

天香學園狂騷曲



Conko.M

「ねエ、九チヤン。これって表紙詐欺じゃない？」

「また、言いにくいことを……」

「でも、そうだよね。」

「こんな内容じゃないよね」

「ま、まア……そうだねエ……」

「皆守クンのせいで九チヤンのダメっぷりが見えないもんね」

「……う、うん……そう、だねエ……」

「何か、ゴメンナサイって感じ」

「うん……そうだねエ……」

「九チヤン、『そうだねエ』しか言っていない気がする」

「そうかねエ……？
そうでもない——」

「そうだよ」

「……ごめんねエ……」



そろそろ天香遺跡に侵入します？

この本は九龍妖魔學園紀のパロディ小説です。
発売元とは一切関係ございません。



【葉佩 九龍】

《ロゼッタ協会》から派遣された、《宝探し屋》。その実態は《秘宝》を飲んで若返ってしまった《協会》のトップハンターの1人。実年齢は30代前半くらい。そんな年齢なので、内縁の妻がいたり、息子が2人いたり。基本的には子煩悩で、優しい。皆守や八千穂の面倒もよく見ている。



【アンリ】

葉佩九龍の実子。12月で10歳になる。預けられていた孤児院が戦火に巻き込まれ、弟の彩と日本にやってきた。家族が大好きで、ママが作ってくれたコアラのぬいぐるみが大好き。皆守らバディも大好き。ママ譲りの黒髪に青い瞳。日本のロボットアニメにハマったようだ。



【彩】

葉佩九龍の養子。7月で8歳になった。アンリと孤児院から焼け出され、葉佩を頼って日本へやってきた。アンリとは違い、日本語が若干不自由。人見知り。ママが作った羊のぬいぐるみを抱え、家族の愛情の中で育っている。ゲームに興味津々。



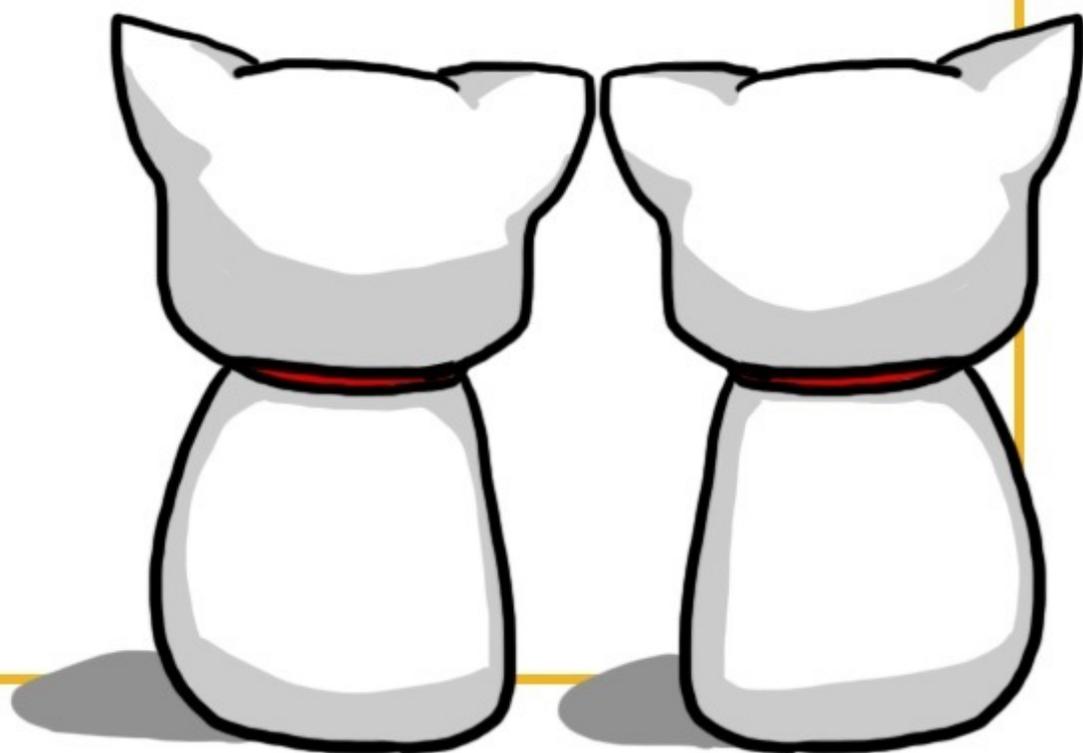
【菱木 亮太】

《ロゼッタ協会》諜報部所属の職員。26歳。若いが秀才であり、諜報部長代理として日々働いている。葉佩の内縁の妻の弟だが、葉佩に対して恐ろしく強圧的な態度を取る。なぜか一人称が俺様であり、慇懃無礼な態度。子供たちを心から心配している。

天香學園狂騷曲

《宝探し屋》子育て奮闘記

紫 桐子



謎の転校生（？）～やってきた子供たち

九月十八日――朝。

「……また、部屋に鍵掛けてねェよ、このオッサン……。おい、葉佩」

「……ん……」

「葉佩ッ」

「……ん～……」

「俺より長く寝てるんじゃないッ！」

バサッ！ と大きな音を立てて布団がめくられる。

「……ん～……何、甲太郎ちゃん……」

春先から天香に潜り込んでいたが、仕事らしい仕事をまったくしていない《宝探し屋》葉佩九龍。転入して五ヶ月経った、九月も半ばを過ぎた十九日。隣室の皆守甲太郎の罵声という名の太音声に渋々体を起こした。

「お前のH. A. N. Tがピーピー鳴ってんだよ！ うるせェッ！」

「……あァ、はいはい……ごめんねェ……」

寝巻きの浴衣の前を直しながら、がなっている皆守にヘラヘラと笑い、H. A. N. Tを手を取った。

「誰からかなァ……」

「お前の女からだろ」

「んふふ～。モーニングコールだねェ」

そう言いつつ、嬉しそうにH. A. N. Tのメール画面を開いた葉佩の顔が笑った形のまま硬直した。

「……！」

「何だよ？」

ぷかり、と皆守はアロマに火をつけ、ゆらゆらと漂う煙を見つめている。軽やかなラベンダーの香りが部屋に漂った。葉佩はといえば、それどころではない様子である。H. A. N. Tを握り締めかねない勢いで震えているのではないか。

「大変だ……」

「だから、何が？」

皆守の視線が葉佩の方を向き、ギョツとした様子で硬直する。ちょうど出来の悪いSF映画の特殊効果のような、ギギギギーッと音を立てそうな雰囲気だ。葉佩の首が皆守の方を向いたところだった。強張る葉佩の口元が、ゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「……子供が……日本に来た……」

「子供ねェ……」

皆守はパイプを口に咥え直して頭をボリボリと搔き……一瞬置いて目を見開いた。

「子供ッ?!」

「そう。……子供……俺の……」

「い、幾つ……なんだ……？」

「九歳と……八歳……」

穴が開くほどに葉佩を見つめつつ、皆守の指が一本二本と折られ、口元が小さく動く。そして頷いた。

「……ああ、まア……いてもおかしくはない歳か……」

「うん。……と、とにかく、学校行ってる暇ないから！ 俺、ちょっと行ってくる！」

「彼女とこか？」

「そうそう」

「……雛川には適当に言い訳しといてやる」

「ありがとね」

あたふたと支度をし、葉佩は鍵と財布を持って、ひらりと三階の窓から出て行った。

「……面倒臭いなア……」

皆守は溜息を一つ吐いて葉佩の机の引き出しを開けると、そこにあった合鍵を手にとって部屋を出た。そして、鍵を掛けると欠伸混じりに伸びをして自室に戻り、登校するための支度を始めたのだった。

葉佩九龍。実際年齢は三十一歳か三十二歳。もしかしたら、三十三か三十四歳。皆守も詳しいことは知らない。ただ、それくらいだ、と本人が言っていたから、漠然と「それくらいかな」と思っている。

けれど、見た目は高校生だった。若返りの水——《秘宝》を飲んでしまい若返ってしまった《宝探し屋》。年齢的に言えば、子供がいてもおかしくはない。

いわゆる内縁の妻に当たる人は新宿にいた。住宅地の真ん中にあるアパートの二階に住んでいる。彼女に会いに行くのはいつもそちらなのだが、今日は《ロゼッタ協会》日本支部へと向かうつもりだった。彼女のメールには、「そちらに向かいます」と書かれていたから。

天香學園を抜け出したところに《協会》の車が滑り込んできた。

「葉佩さん、迎えに来ました」

助手席の窓が開き、そこから覗く運転手が口の端を持ち上げる。

「……タイミングのいいこと……」

呆れたように呟いて後部座席のドアを開けると、そこには20代後半くらいに見える一人の女性の姿があった。彼女こそが葉佩の内縁の妻である。宮美という名のその人は、儂そうな微笑みを浮かべて葉佩を見つめていた。

「今回のことはさすがに驚いたね……」

乗り込みつつ言い、ドアを閉める。

「えエ、そうね」

彼女は答え、隣の座った葉佩を見た。

「あなたなら、前もって俺に言うでしょう」

「ええ」

車は二人を乗せて大手町に支部へと向かう。

葉佩は隣に座る宮美の手を取り、

「……最近、どう？」

優しく尋ねる。けれど、その言葉の響きは恐る恐る探りを入れるかのようだ。彼女は微笑みを浮かべるのみでゆっくりと葉佩を見た。

「俺は普段通り。……そっちは？」

「……」

「どう？」

「普通かしら」

「そ、そうかア……」

取り繕うような笑いしか浮かべられない。隣にいるのに、後ろめたいことなど何も無いというのに、二人は向き合えない。しばらく無言が続き、沈黙に耐えられなくなったのか葉佩は言う。

「ごめん。側にいるのに、会えなくて……」

「いいのよ。あなたは、あなたのすべきことをする。……私は、あなたが無事でいてくれさえすれば、それでいいの」

微笑む彼女にそれ以上の言葉が出ず、葉佩は口を閉じた。

身勝手だとなじられる方が気が楽だと感じるが、彼女はそういう人なのだ。「あなたが無事ならいい」——本当にそれだけを喜びとして生きる人。体も心も疲れきり、子供を《ロゼッタ》の孤児院に預けるしか出来なかった人だった。

わかっているのに、側にいてやれない自分が情けない。けれども、そんな素振りを一ミリも出すことなく葉佩は微笑むが、僅かに強く握り返された彼女の手には、やはり心が痛んだ。

噛み合わない想いを抱える二人を乗せた車が、大手町にある《ロゼッタ協会》日本支部に到着したのはそれからしばらくしてのことだ。玄関前に横付けされた車から降りた葉佩は、自動ドアの開くスピードすら遅く感じつつ、それでも愛する人の手を握ったままエントランスホールへと入る。正面に受付カウンターが見えるが、尋ねる時間も惜しい。

「子供たちはどこにいるか知ってる？」

傍らの宮美に尋ねると、彼女は「えエ」と頷き、

「遺跡統括情報局の調査室オフィスにいるそうよ」

と返す。

「そうなんだ。なら、こっち」

彼女の言葉に葉佩は頷き、エントランスホールを突っ切り、関係者以外立入禁止区域へ踏み込む。

「身分証の提示を——」

警備の事務的な言葉は、葉佩が突きつけたH. A. N. Tによって消え失せる。

「俺は《宝探し屋》です！」

そして、警備の前を手を繋いだまま走っていく。宮美の呼吸が見る間に上がるのを聞きながら、葉佩は「もう少しだから」と宮美に言い、角を曲がる。

「ここ！ 調査室！」

《ロゼッタ協会》の中核を担う遺跡統括情報局のオフィスはエントランス階にある。ただ、調査室オフィスは表向きの窓口業務が主で、裏の顔とも言える《秘宝》売買などを取り仕切るオフィスは遙か上階だ。

調査室前で足を止めた。宮美は胸元を押さえ、辛そうに呼吸をしている。

「……ッ、はア……はア……」

「……宮美さん、大丈夫……？」

自分を支える葉佩に、彼女は気丈に微笑み返す。

「大丈夫……」

けれど、その顔色は白を通り越して青に近かった。「軽率だった」と葉佩が後悔するのはいつも後になってからなのだ。彼女の体調がよくはないことを知っていたはずであるのに、いつもいつも無理をさせている。

「ごめんなさい……宮美さん、俺一一」

「私のことはいいから、子供たちを……ゴホッ、ゴホッ！ 子供たちが心配ですから……」

「わ、わかった」

顔色の悪い宮美の肩を抱き、オフィスのドアを開ける。

「こんにちは！ お久しぶりです！」

一応の挨拶。オフィスの人々の視線が葉佩を向き、一人が立ち上がる。

「お帰りなさい、《宝探し屋》葉佩九龍」

「うちのコはどこ?!」

遺跡統括情報局日本支局長が待っていた。いくつもの《秘宝》をその手に取り上げた優秀な《宝探し屋》だった男で、まだ四十代だったはず一一と葉佩は記憶している。

「大変だったよ。本部を振り切って君の子供を運ぶのは」

「本部局長が移動させたんじゃない……？」

局長は「何も知らないのか」と葉佩を見遣る。

「詳しいことは応接室にいる職員に聞くといい。子供もそこだ」

「わかりました」

オフィスに隣接している応接室のドアの前に立った葉佩は、中から聞こえる声にハッとする。紛れも無い自分の子供の声だった。会うのは半年ぶりだろうか。

「アンリ！ 彩！」

ドアを開け、そこに子供たちがいることを確認した途端、思わず叫んでいた。子供たちの顔が上がる。

「……あ！」

そこには年の割に幼い二人の子供がいた。一人はコアラのぬいぐるみを抱えたぼさぼさの黒髪の子供。もう一人は明るい茶色の髪、羊のぬいぐるみを抱えた遠目からでもわかるほどの大き

な痕が顔の左側に走っている東洋系の顔立ちの子供。子供たちは白人の中年女性と向かい合わせにソファに座っている。

黒髪の子供は葉佩たちの姿を見た瞬間立ち上がり、ボロボロと頬に涙を落とした。

「パパァ！ ママァ！」

応接テーブルを飛び越え、真っ直ぐに葉佩と宮美に抱きつく。

顔に大きな痕のあるもう1人の子供も、トコトコと葉佩たちの傍に来ると、

「父……母……」

と、遠慮がちにたどたどしい日本語で小さく呟き、ギュッと抱きついて啜り泣いている。

ソファから腰を上げた女性職員は、困ったような笑顔を浮かべて葉佩に手を差し伸べた。

「お久しぶりです」

葉佩は女性と握手し、返す。

「こちらこそお久しぶりです。マザー・ベロニカ。……子供たちを運んでいただきありがとうございます。こんな極東までお越しありがとうございます……」

「いえ。子供たちのためです」

ベロニカは首を横に振り、次に宮美に手を差し伸べた。

「……あなたが子供たちのお母様？ はじめまして」

宮美も握手する。

「はい、はじめまして。私が至らないため、ご面倒をおかけしました」

「人にはいろいろとあるものです。お気になさらず」

彼女は微笑んでから葉佩と宮美に向き直る。

「今回は任務の途中であるというのに、突然のことで大変申し訳ありません。実は――」

口を開きかけ、子供たちがいることに気付いたのか、首を横に振り、屈んで子供たちに視線を合わせた。

「パパとママとお話があるから、席を外してもらえるかしら？ ちょっとの時間だけ、廊下で待っててちょうだいね」

しゃくりあげながら、子供たちはコクリと頷き、応接室の外へと出ていった。それを見送ってから、ベロニカはソファに二人を誘い、腰を落ち着けてから切り出した。

「こちらとしても突然でした。……実は――」

葉佩と宮美は彼女から聞かされた顛末に、ただ絶句するしかなかった。

「もしもし？ 甲太郎ちゃん？」

『何だよ、今どこだ？』

「今、支部傍の病院。そっちに帰れそうもない。明日も休む」

『トラブルか？』

「そう、だね。トラブルだね。詳しいことは、たぶん、明日話せると思う」

『……ったく、面倒臭いな。わかった。雛川には八千穂から上手いこと言い訳させる』

「頼むねエ。……いい友達を持ったよ」

『はいはい。わかったわかった』

翌日。九月十九日土曜日。

時計は朝七時を回ったところだ。

滑走路に《ロゼッタ協会》のプライベートジェットが見えた。《協会》所有とわかってはテロの標的になるため、極普通のプライベートジェットを装っている。小型ジェット機は葉佩を日本に運んだときのように何箇所かで給油を行い、愛する人を遠くの地へと運ぶのだろう。

「あ……飛行機……」

離陸態勢に入ったジェット機は滑るように滑走路を走り、機首を僅かに上に向けた。そして、大空へと飛び立っていく。徐々に小さくなる飛行機を見つめながら、「これからどうしようか」とそればかりを考えていた。旅立つ彼女は心配だけれども、彼女には《協会》がついている。万が一にも危険はない。あの飛行機が墮ちない限り、彼女の身柄は心安らかに過ごせる場所へと運ばれることだろう。

それよりも、葉佩にはこれからのほうが心配でならない。

「ママ、行っちゃったね……」

ぐすん、と黒髪に大きな青い瞳の子供――アンリは鼻を鳴らし、ギュッと父親の手を強く握る。

「やっと会えたのに……ママ……ママア……」

「……元々、体の強い人じゃなかったし……いろいろ無理もさせちゃった。空気のいいところでゆっくりすれば、すぐに戻ってこられるよ」

「うん……」

手の甲で涙を拭い、アンリは葉佩を見上げた。

「パパ、僕たちこれからどこに住むの？ またホテル？ 僕、パパと一緒にいたい……」

「ん～、一緒にいることは出来るよ～」

子供たちの手を引いて、空港口ビーを後にしつつ、葉佩は言う。

「《協会》が用意してくれた家があるから、そっちに行こうねエ。昨日のうちに必要なものとか全部頼んでおいたけれど……あア……寮と家と学校と《墓》と……どんなふう歩き回ることになるんだろう……。協力してくれる誰かを捜さなきゃ……」

「……ガッコウ……？」

ボソッと小さな声が聞こえた。葉佩は自分の右手をしっかりと掴んでいる顔に痕のある子供――一彩に微笑む。

「今、お仕事で行ってるところ。パパのお友達がたくさんいるんだよ」

とは言うものの、九龍は「う～ん……」と唸っている。

「……協力者に当てはあるから、まア、何とかなるかねエ。とりあえず、《協会》が用意してくれた家に入ろう。話はそれからだよ」

葉佩は子供と向き合って生活したことなど、今まで一度もなかった。

本当に、話はそれからののだ。

皆守甲太郎はスーパーの買い物袋を手にぶら下げたまま、天に向かってそそり立つ高層マンションを見上げていた。

學園から程近い位置にある、學園の屋上からも見える高層マンションだった。いかにも「ブルジョアジーが住んでいそうだ」と思って眺めていたマンションに葉佩がいるらしい。

「……」

携帯電話を取り出し、一時間ほど前に着信したメールを開けて今一度確認する。

「間違いないよな……」

葉佩九龍からのメールには、

『どうせサボってるなら、ちょっと来て～！ ヘルプヘルプ！ 場所は、新宿区●●町△ - ■にあるマンションだよ！ 二五〇六号室にいます』

と書かれている。勝手なものだ。呼び出されてのこのこ出て来てしまう皆守も皆守なのだが、葉佩の周辺は知っておくに越したことはない。なぜなら、何かあった場合、今回以上の無理難題が皆守の方に押し掛からないとも限らないのだ。

オートロックの玄関を開けてもらうため、部屋ナンバーをプッシュする。

『はいはい～。……あ！ 甲太郎ちゃん！ 早かったねエ！ 今開けるからね！』

どうやら、カメラがついているらしい。

ドアが開くと、皆守は一つ溜息を吐いてマンションへと入る。

「……一体何だってんだ……」

エントランスでエレベータを呼んだ。ポーンと軽やかな到着音の後、音もなくドアが開く。

乗り込んだエレベータの壁に背を預け、かなりの速さで上がっていくらしいエレベータの階数表示を眺めていた。途中の階で止まることもなく、二十五階へ直行したエレベータが再びポーンと軽い音を立てて到着を知らせる。

「……何だ？」

降りた皆守を待っていたのは、小学生くらいの歳の、外国人の血が混じっていそうな子供二人。片方はコアラのぬいぐるみを抱き締めた黒髪碧眼の子供、片方は羊のぬいぐるみを抱き締めた顔の左側に縦に走る傷跡が目立つ、明るい茶色の髪に同じく明るい茶色の瞳の子供である。コアラを抱えた子供は全体的に葉佩に似ているが、羊を抱えた子供はまったく違う顔立ちだった。

「甲太郎兄ちゃん？」

コアラを抱き締める子供が小首を傾げて皆守を見上げている。

「……あ、ああ……？」

「こっち……」

羊のぬいぐるみを抱えた子供は、コアラのぬいぐるみを抱えた子供の手を引いて先を歩いていく。

「……もしかして、お前らが葉佩の子供……？」

当然の疑問を口にした皆守に、

「《ハバキ》？ ……あ、パパのこと？ パパって、《ハバキ》っていうの？」

小脇にコアラを抱く子供はニッコリ笑いながら皆守を振り仰ぐ。

「は？」

「パパ、ホントのお名前は違うんだよ」

「アンリ、言うダメ……」

先を行く子供は笑いもせず小走りに進む。とは言っても皆守と子供ではコンパスの差がある。いかに小走りとはいえ、皆守が普通に歩く速度とあまり変わらない。

「……ここ」

案内された部屋のドアの横、名前の入っていない表札には2506と書かれている。

「……こっち」

変わった形の鍵でドアを開けると、普通ならば玄関の向こうに廊下なり部屋があるはずなのだが、皆守の目には堆く積みあがったダンボールの山しか見えない。

「……何だこりゃあ……」

思わず口を付いて出た声に反応したのは、薄茶色の山の向こうにいたらしい葉佩だった。

ガバッ！ と立ち上がる音がして、山の向こうに葉佩の泣きそうな顔が見える。皆守の眉間に皺が寄った。

「何してんだ、お前」

「あああ！ 甲太郎ちゃん、よく来てくー！」

スポベシャドコ！

皆守に歩み寄ろうとしたところ、足元のダンボールに躓いて、葉佩はそのまま山の中にダイブする。ダンボールの小山は見るも無残にひしゃげ、壊れた。見通しはよくなったが、皆守は「はア……」と盛大な溜息を吐くしか出来ない。

「……大体、わかった。まず、この荷物を片付けるのを手伝って、時間を見て飯の仕度をする、そして、この場所と子供のことを俺に相談しようということか」

「そうです……」

起き上がった葉佩は、ひしゃげたダンボールの上に正座して皆守を見上げた。

「その通りです。……助けて。本当に頼むから。ダンボールだけで気が滅入ってくるんだよ……」

「……」

皆守は様子をハラハラと伺っている子供2人を横目に一瞥して、葉佩を見る。

「わかった。……じゃあ、まずはそこのガキの名前を教えろ」

「こっちのコアラを抱えてるのがアンリで九歳。で、こっちで羊を抱えてるのが彩で七月に八歳

になった」

「……ああ」

「可愛いでしょ？ 俺の子供」

いつものように、「んふふふ」と笑う葉佩の顔が変ににやけている。子供が可愛くて仕方ないらしい。

「……バカ親め……」

皆守は溜息を吐いて頭を掻いた。

「アンリ、彩、お前らも手伝え。ダメ親父じゃ役に立たんからな。……まずは――」

葉佩は「うんうん」と頷きながらテキパキと子供らに指示を下す皆守を見ながら八千穂にメールを打った。

『学校終わったら、ちょっと抜け出してきてほしいんだ～☆ 場所は……』

「僕の箱の方がカッコイイ！」

「……彩の箱、カッコイイ……」

気に入った大きさのダンボールを「オモチャ箱にするんだ！」と意気込んで、白いコピー用紙をペタペタと周りに貼り付け、各々そこに買ってもらったばかりのクレヨンで何かの絵を描いている。その声を聞きながら、キッチンでは片付けの合間を縫って夕食の仕度をさせられている皆守と、買い揃えたばかりらしい皿を洗う葉佩の姿。

「しかし、昨日の今日だろ。よくこんだけの物が揃えられたな」

「《協会》だもの。……俺みたいなケースが前にも何件かあったみたいで、対応が早い早い。病院にいる間に担当者が出してきたカタログ見て、必要なものを片っ端から頼んだんだよ。で、言われたマンションに来てみたらこれだもの。搬入されてたけれど、梱包解いてないっていう… …ガックリきたねエ……。何かもう、『これぞ《協会》クオリティ！』みたいなものを見せつけられた気がするよ～。常に投げっ放しってとことか」

「酷いな」

「笑ってるくせに」

揃っているグラスや皿は画一的だ。だが、恐らくはこれから少しずつ気に入ったものが増えていくのだろう。何となく優しい気持ちになりかけた皆守だったが、ふと我に返る。

「それはそうと葉佩」

「何？」

「何で俺がここで、お前らの飯を作ってるんだ」

葉佩はニコニコしながらパタパタと手を振った。

「いいじゃない。細かいことは。んふふふッ。あ、あのね！ うちのコ、カレー食べたことないんだって。だから、とっても美味しいのを食べさせてあげてねエ」

「カレーを食ったことがない?!」

「うん」

白く飾り気のない皿を洗う葉佩は言う。

「あのコたち、ずっと海外暮らしでねエ……《ロゼッタ》の孤児院に預けてあったんだ」

「お前、女がいるだろ。何で日本で育てなかった？」

「……彼女ねエ、ちょっと患ってる……心も体も……」

葉佩は苦笑いを浮かべて皆守を見る。

「元々体が弱い人で、アンリの出産のときも危なかったんだ。その頃、俺、忙しくて側にいて上げられなくてねエ……。最近になって俺だけ若返ったりとかいろいろあったし……。それからますます崩れ始めたというか……。普段一人で我慢してる分、今回のことで、また、ちょっと――」

「子供の事か？」

「うん。……孤児院のあった国で政変が起きてねエ……。《協会》のことをよく思わない政党が政権を掌握したんだよ。で、政権と繋がりのあるテロリストが《協会》の関連施設をテロの標的にした。そこに、あの子たちのいた孤児院も含まれてたんだ」

「……」

「彼女、それを聞いて不安定になっちゃってねエ……。戻りの飛行機で一緒に国外の病院に行った。……『少し、環境のいいところでゆっくりしなさい』って医者に言われちゃったよ。昨日の病院はそういうこと。アンリと彩の健康状態のチェックのつもりだったんだけど、あの二人より彼女の方が深刻だった」

病院からの電話にようやく合点がいった皆守は手を止めて葉佩を見た。困ったような顔をして笑っている。

「出来れば一緒に住めたらよかったんだけど……医者に言われたらそうも行かないから。でも、今回のことで踏ん切りがついたかねエ」

「？」

「仕事するよ」

皆守の手が止まる。訊いていた。

「……《墓》に潜るのか？」

葉佩は頷く。

「うん。仕事が終われば、子供と一緒に彼女に会えるでしょう？」

やれやれと肩を竦め、皆守は仕度を再開する。

「……ノロケは聞き飽きた」

「んふふふふ。もっと聞いてよー」

肘で脇を突付く葉佩に、皆守は口の端を曲げてこう返した。

「ヤなこった！」

そのとき、キャッキヤと笑う声がりビングから聞こえてきた。笑っているのは恐らくアンリだ。彩はニコリともしない。日本語が少々不自由だが、「はい」「いいえ」の意思表示だけはしっかりとするから困ることはない。けれど、アンリのような天真爛漫さというものが伺えないのも

また事実である。

「……一つ、聞いていいか？」

「うん。いいよ」

「アンリはお前の子供だな？」

「うん」

「彩は？」

「あのコは養子」

何の淀みもなくそんな言葉が返ってきて、訊いた皆守が驚いた。

「そうなのか」

「そうだね」

葉佩は頷く。

「死んだ同期の《宝探し屋》の子供。《協会》が俺に里親になれって。……あのコは自分が養子だってことを知ってる。でも、俺はアンリと同じくらい、それ以上に彩も可愛いと思うよ？」

「……親バカだな」

「んふふふ。それ、最高の褒め言葉」

あまりにも嬉しそうに笑う葉佩に、呆れ果てたような溜息しか出てこない。皆守は「はア～……」と溜息を吐きつつ、鍋をかき混ぜる。

そのとき、インターフォンが鳴った。

「はいは～い」

葉佩はキッチンにもあるインターフォンを覗き、通話ボタンを押した。キョロキョロしている八千穂を見て思わず笑みがこぼれる。

「いらっしゃい、明日香ちゃん」

『お待たせ～！』

「ありがとねエ。今開けるよ」

『は～い！』

バタバタと子供が走る音がキッチンに雪崩れ込んで来た。好奇心いっぱい目を輝かせて父親を見上げている。

「お迎え、行った方がいいよね？」

「……誰、来る？」

尋ねる子供らに、葉佩は布巾で手を拭きながら答える。

「八千穂明日香ちゃん。明日香姉ちゃんだよ」

「うんッ！ 覚えた！ 彩、行こッ！」

「……うん」

「待って待って」

手を繋いで走り出そうとした子供たちを呼び止めた葉佩は言う。

「鍵は持って行かなくてもいいよ。パパと甲太郎ちゃんがいれば、ドア開いてても大丈夫だから。昼間だしね」

子供二人の頭を撫でて、「行ってらっしゃい」と玄関まで送った葉佩は、何か不思議そうなものを見るように自分を見つめる皆守を見て苦笑を浮かべた。

「どうしたの？」

「……いや、『父親なんだな』と思っただけだ」

再びシンクの前に立つと、葉佩は食器洗い用のスポンジを手にして笑った。

「そうだよ。二人のパパだもん」

真っ白い泡に埋もれる皿を見つめる葉佩は言う。

「あのコたちと彼女のために、俺は《宝探し屋》をしてるんだもんねエ」

八千穂明日香は、キョトンとした顔をして目の前の子供を見た。

「え、と？」

「明日香姉ちゃん、だよね？ ね？」

コアラに抱えられているのか、コアラを抱えているのか、そんな子供が自分を見上げ、小首を傾げて笑っている。

「……違う……？」

羊を抱えた子供が不安げに自分を見つめているのに気づき、八千穂はぶんぶんと頭を横に振った。

「あ、あたし、八千穂明日香。……え〜と、キミたちは……」

「僕はアンリ。こっちが彩」

アンリはニッコリと笑う。彩はペコリと小さく頭を下げた。

「アンリクンに彩クン……。キミたちは九チャンの……」

「九チャンって、パパのこと？」

「……『パパ』？」

八千穂の目が点になる。確かに、九龍が実は三十代の訳アリ人間だということは知っていたが、まさか子供がいるとは思っていなかったのだ。

「パパって、九チャンのこと……？」

「そうだよ」

「うん……」

二人揃って、コクリと頷く。アンリは八千穂の手を掴んだ。

「パパが待ってるから、早く早く！」

「甲太郎お兄ちゃん、いる……」

八千穂は三度キョトンとした顔をして二人を見る。

「こ、こうたろう……？ 皆守クンもいるの？」

答えたのはアンリ。

「うんっ！ パパが全然お部屋の片付け出来なくてね、来てもらったんだよ！」

葉佩が普段校内でどれだけボーッとしているかを知っている八千穂は、「さもありなん」と一人頷いてニッコリ笑った。

「なるほどね～。じゃ、あたしも、そこに連れてってね！」

「……こっち」

彩は上目遣いに八千穂を見て、先を歩いていく。アンリは八千穂の手を握ったまま、トコトコ歩いていった。

八千穂はきょろきょろしながら歩いている。あちこちにカメラがついているのはわかった。

「さっすが高級マンション！」と一人で勝手に解釈、納得して、アンリと彩が足を止めたのに合わせ、彼女も足を止める。

「ここ？」

「うん！ そうだよ！」

アンリは元気よく頷いて、ドアノブに手をかけた彩がドアを開けるのを待つ。

ドアが開くと、廊下の向こうから葉佩がひょっこりと顔を出した。

「パパ！」

「父」

靴を脱ぎ散らかして自分の許へと走ってきた子供の頭を、「よく出来ました」と撫でて葉佩は笑う。それから、彼は一人で八千穂の方へとこやかに歩いてきた。

「明日香ちゃん、いらっしゃい。よく抜け出してこられたねエ」

言いつつ屈み、子供たちの靴を直して、八千穂にカエルのスリッパを出した。

「まっかせてエ！ 出来ると思ってるから呼んだんでしょ？」

「まァね。……ささ、入って入って。もうすぐお夕飯にするからね。食べてってねエ」

タイミングよく、キッチンへ向かったらしい子供たちの声が聞こえる。

「カレー！」

「……初めて食べる」

葉佩は「んふふふッ」と小さく笑うと、八千穂には苦笑を向けた。

「……ごめんね」

心底申し訳なさそうに頭を掻く葉佩に、彼女は首を横に振る。

「いいっていいって！ ……でも、九ちゃんはこれからここに住むの？ 本当に？」

「うん、まァ……そうなるかな」

葉佩の返答はあまりにも歯切れが悪い。天香學園は全寮制である。当然、學園に在籍している葉佩の部屋もそこにある。装備一式を寮に預けたままこちらに来てしまった。鍵を閉め忘れる、百万単位の金を帯封をしたまま部屋の真ん中に放置する、などなど、抜けつぷりを多々披露して皆守に怒鳴られることが日常茶飯事の彼にそんな二重生活が送れるのか。彼を知っている者なら誰しものが言い知れぬ不安を覚える。

年がら《隣室のダメ人間》について皆守から愚痴られている八千穂は、当然とてつもない不安に襲われた。

「アンリクンと彩クンはどうするの？ 寮はどうするの？」

「それが問題なんだよねエ……その辺りのこともあって、『ちょっと相談したいなァ』って……
甲太郎ちゃんと明日香ちゃんに」

生活能力がないわけではないのだろう。ただ、少々無頓着なのだ。そうに違いない。八千穂はその辺りで適当に解釈した。

「オッケオッケ！ 一緒に考えてあげるね！」

そうしないと、葉佩は一人で何も出来まい。世話焼きの血が騒ぐ。

「パパ～！ ご飯だって～！」

「彩、お手伝い」

「おい、こぼすなよ。真っ直ぐ持て！ 真っ直ぐ！ 火傷するぞ！」

カレーライスの盛られた皿を持ってキッチンから出てきた子供二人の後を追うように、エプロン姿の皆守が現れた。八千穂は「プフ～ッ！」と思いきり吹き出す。

「保父さん！ 保父さんがいる！」

思ったことを口にそのまま出し、八千穂はガラガラ玄関先で大笑いしている。葉佩も視線を逸らし、壁に手を当てて「んふふ、んふふふふふふ……」と肩を震わせていた。

「保父さん言うな！ 葉佩も笑いたければせいせい笑え！ ッたく……ッ！」

「兄ちゃ～ん、お腹空いた～」

「空いた～……」

「わ～かったよッ！ ……葉佩、八千穂、お前らもとっととしろ！」

睨む皆守に、八千穂は、

「は～い！ 甲太郎兄ちゃん！」

と返事をし、葉佩は、

「はいはい。ああ、いいベビーシッターを見つけたよ～。んふふ～」

と満面の笑みで頷いている。皆守が口元に恐ろしくイイ笑顔を浮かべたのはそのときだ。

「――飯だ……ッ！」

「だッ！」

「てッ！」

二人の頭に皆守のゲンコツが1発ずつ降ったのも、ご愛嬌。

「お腹空いた～！」

「た～……」

皆守は葉佩と八千穂2人を睨んで子供らが待つテーブルへと向かう。その背を眺めながら、葉佩は呟いた。

「行こうか、明日香ちゃん」

「そだねッ、九ちゃん」

頷く八千穂。

二人揃って頭の天辺を擦りつつ、皆守特製カレーを前にしてお腹を空かせて待っている二人の子供の許へと向かった。

蜚気楼を抱く少年～《宝探し屋》×3 始動！

九月二十二日。

保健室――朝。

「葉佩、お前、いい加減にしろ」

瑞麗の眉間に困り果てたような皺が寄っている。アンリと彩に売店から買ってきた甘いココアのプルタブを上げて手渡ししながら、葉佩は笑った。

「んふふ。いいじゃない、ルイちゃん。このコたちもお前さんに懐いてるし……」

「ここは小学校じゃないッ」

「でも、ルイちゃんに読み書き教えてもらえるの、すごく喜んでるんだよ～。俺も側にいられないし、ここが一番安全なんだよねエ……」

「私から言わせてもらえば、朝一でもないのに誰にも見つからず、子供をここに運搬してくるお前の能力の方が驚嘆に値するよ……」

「このコたちの能力もあるよ？ 亀さん並みに忍んで安心。ニンニン」

「にんにん！」

J A D E のポーズのマネをする葉佩。父のマネをしてアンリも笑う。彩もマネをしているが相変わらず表情が変わらない。

「……わかったわかった」

仕方ないといった溜息を吐いて、瑞麗は葉佩を見る。

「暴れるわけでもない。問題ないだろう。……お前も昼にはここに来い」

「了解。……何かあったら、連絡ちょうだいねエ～」

「ああ」

「……散々だった……何なんだ、今日は……」

げっそりしつつ皆守は溜息を吐いた。一時限目終了後、女子生徒を襲った『両腕ミイラ化事件』に見事巻き込まれ、精神的疲労を味わった。そして、昼休み。葉佩と一緒になぜか保健室で昼食を摂っている。瑞麗も八千穂も一緒であった。

それだけではなく、子供二人も一緒に食事していた。

「ビックリしたね～！ お姉ちゃんの手がミイラだったもん」

甘口カレーパンを頬張りながら興奮気味にアンリは言う。口の周りが油でテカテカしているのを見て、皆守は保健室の備品であるウェットティッシュを持ち出し、アンリの口の周りを拭いた。

。

「大したことではない。《氣》の流れを正常に戻してやればすぐに回復する」

皆守の手からウェットティッシュを受け取って机の上に置くと瑞麗は事も無げに言う。

件の女子生徒は瑞麗の治療もあってすでに復調していた。しかし今は大事を取って寮で安静に

しているはずだ。

「彩、お茶……」

買ってきてもらったはずのミルクティーのPETボトルを探してキョロキョロする彩に、

「はい、彩くん。あったよ～」

八千穂は手元近くにあったそれを手渡ししながら、解せないことでもあるのか「う～ん」と唸った。

「今回の何なんだろうね？ 『今日から潜る』って決めた途端にこんなことが起こるなんて」

「そうだねエ……嫌な感じだよねエ」

曖昧に頷く葉佩を見ていたアンリがカレーパンから顔を上げた。

「パパ、お仕事行くの?!」

「行くよ。もちろんねエ～」

「僕も一緒に行く！」

キラキラと目を輝かせるアンリの横で、コクリと彩は頷く。

「……彩も」

「ちょっと待てッ！」

皆守の声に、その場にいた全員が口を閉じて声の主を見つめた。

「どしたの？ 皆守くん」

「騒々しいな」

「甲太郎ちゃん？」

皆守はビシッ、ビシッ、とアンリと彩を指差して言う。

「この二人を連れて行くのか?!」

「……え、何かマズイ？ はて？」

呑気な父親は、子供と揃って小首を傾げた。皆守は瑞麗を見る。「このバカを止めてくれ！」という無言の懇願があったが、瑞麗は「フッ」と口の端を上げて皆守に唐揚の刺さったフォークを突きつけた。

「何のことやら。お前たちの《夜遊び》の内容など私は知らないし、止める義理はない」

白々しくとぼける瑞麗に皆守は正論で反発する。

「カウンセラー、知ってる知らないは、この際どうでもいいんだよ！ あんたは夜中に出歩くこいつらを止める方だろうが！」

「あァ、なるほど？ 心配をしているわけか」

伺うような瑞麗の視線。皆守は「う」と言葉に詰まりつつも、

「い、一応……」

と口の中で呟く。「そうか」と頷いた瑞麗は、

「葉佩が一緒なら平気だろう。……この子らは、曲がりなりにも葉佩の息子だ」

そう言い、笑って唐揚を口に運ぶ。確実に葉佩が何者かを知っている素振りであるが、彼女自身がそう言わないため皆守もそれ以上は言えない。

「九ちゃん一緒なら平気だよ～！ モチロンあたしも一緒に行くし！ ね～、アンリくん、彩

クン」

「うんッ！」

「明日香お姉ちゃん一緒……へ～き」

二人をすっかり手懐けた八千穂は、隣に座っていた彩をギュッと抱き締めて笑う。

「だよね～ッ！」

「どっから来るんだ、その根拠のない自信はッ！」

一人静かだった葉佩に皆守の視線が向いた。呑気な父親は、懐からH. A. N. Tを取り出してどこかにメールを打っている。

「……飯の最中にメールを打つな」

「そういうところウルサイよねエ、ホント。甲太郎ちゃんみたいな人が保育士さんになったら、今の世の中喜ばれそうだよねエ」

ニッコリと笑って皆守を見る葉佩。その隣に座るアンリは、父のH. A. N. Tを覗き込んで「あッ！」と声を上げた。

「パパ、ママにメール打ってたんだ！」

「うん。そうだよ～」

「何て打ったの？」

興味津々なアンリは父の腕にしがみついて続きを促す。

「『アンリと彩を連れて潜ります』って送ったんだ」

「……母は？」

彩の手が制服の袖を引く。

「『何かあったら承知しません。怪我などをしないように気を付けて。あなた方に《秘宝》の加護があらんことを』だって」

皆守は、最後の砦が落ちたことを知った。止められるのは葉佩が溺愛する内縁の妻だけだと知っていたからだ。

けれど、メール一本で話は片付いた。恐らく葉佩のことだ。《協会》にもその旨連絡しているに違いない。《宝探し屋》予備軍の現地訓練なのだろうか。

この天香遺跡が！

「……絶対におかしい。絶対にお前らはおかしい……」

「仕方ないよ～。だって、そういう職業ですから」

両腕に子供を抱き締めて葉佩は笑う。2人の子供は父を仰ぎ見てから、誇らしげに皆守に視線を向けた。

「パパ、すごいでしょ？」

「……父、すごい」

「そういう問題じゃないッ！」

食後の一服をつけようとしていた瑞麗は、八千穂に訊いた。

「皆守は世話焼きだったのか」

「実はそうなんですよ～」

ニコッと笑う八千穂に、瑞麗は「意外だな」と煙管を口に運ぶ。

放課後、葉佩は保健室に子供を引き取りに行き、皆守とともに何食わぬ顔をして寮に戻った。巧妙に擬態させた子供二人——つまりは小さな二人を大きなダンボールに詰めて運んでいたのである——を連れて寮の部屋に入ると、新宿西口の電器店の紙袋を開けてコンシューマゲーム機の本体と、全年齢指定のゲーム数本を取り出した。

午後の授業を放り出して外に買いに行ったものはこれだったのか、と皆守の頬が引きつる。本体の取扱説明書を見ながらケーブルをテレビに接続する葉佩は子供たちに言う。

「これで遊んでなさいね。すぐに戻るよ」

「うんッ」

「……うん」

返事をした二人を見て葉佩も頷く。本体の電源を入れてゲームが点くことを確認すると、「よっこいしょ」と腰を上げた。

「じゃ、甲太郎ちゃん。二人をよろしく」

「よろしくされたくはないんだが？」

「そう言わずに、ね？ アンリも彩も暴れたり、騒いだりしないし、俺も一時間しないうちに戻るよ」

「……どこに行くんだ？」

「夕飯の買い出しだよ？ んふふふ。炊事場あるし、作ってあげようと思って」

テレビでは、白いシンプルな顔をした猫が何かを喋っていた。皆守はテレビから葉佩に視線を移す。

一瞬、間があった。

「……何？」

「何じゃなくて、俺がご飯作るんだよ？」

ニコリと笑う。皆守の口元が片方だけ持ち上がった。笑っている葉佩の首に自分の腕を巻きつけると、子供に背を向けてボソボソと小声で葉佩に言う。

「……お前、一昨日の惨状を忘れたのか?!」

「ヒドいなァ……一生懸命ご飯の仕度して、美味しいもの作ったじゃない」

「ああ、美味かったよ。俺も八千穂も、ガキどももしっかり食ったよ。……でもな、お前は飯の仕度の手際が悪すぎる！」

首に巻いていた腕を離し、葉佩の頭を叩く。

「ええ～……そうかな～……」

頭を擦りつつ、葉佩は首を傾げた。納得いかない様子で皆守を見る。

「俺なら三十分で終わることを、どうして一時間半もかかる！」

「だから早めにご飯の仕度始めて、七時にはご飯にしたでしょう」

何が悪いの？　と言いたげな葉佩の視線。皆守は再び葉佩の頭を叩いた。

「イライラするんだよッ！　何時だと思ってる?！」

「え〜と……」

部屋の時計を見る。

「六時回ってるね」

「一時間半足すと？」

「七時半回るねエ」

「腹を減らしたガキどもがピィピィ言うんだぞ?!」

「うう……でも、ちゃんにご飯食べさせてあげたいんだよ……」

今度は皆守が言葉に詰まる番だった。

しばしの沈黙の後、苦し紛れの声が聞こえた。

「……俺も、手伝うッ。だから、とっとと飯の買い出しに行け！」

「うん。わかった。甲太郎ちゃん、ありがとね」

葉佩は財布だけ持って窓から飛び降りる。

アンリと彩は、それをじっと見つめていた。アンリは目をキラキラと輝かせ、

「……パパ、すご〜い……」

と言うやいなや立ち上がると、開け放たれた窓に駆け寄り、下を見下ろす。

「……彩、飛ぶ」

彩に至っては、窓から飛ぼうとしたのだからたまらない。

「ま、待て待て待て！　お前らは無理だから！」

窓から引き離し、皆守はハッとする。

年のわりには細く、小さい二人の体の軽さと、そうなってしまった事柄を感じさせないほど無邪気で愛らしく微笑む子供の様子に言葉がない。

アンリも、彩も、小さい。

日本人の九歳、八歳の平均身長、体重はない。小さく、細い。

帰り際、保健室で呑気に昼寝を決め込んでいるという子供を迎えに行きながら、何の気なしにそれを葉佩に尋ねていた。葉佩は僅かに眉間に皺を寄せて答える。

「前にも言ったと思うけど、あのコらがいた国は政情が安定したことはなかった。最近はやかったから安心してたんだけど、やっぱりそんな平和は長く続かなかった。俺が長いこと周辺国の大規模遺跡を梯子してたから、頻繁に会いに行けるっていうのを言い訳にして、あの国の孤児院に預けてたんだよ。知り合いも、まア……いたにはいたし」

「ああ」

「《ロゼッタ》は万能でも完璧でもない。食料を国内に運び込むことさえ難しかった。国境の検問所で荷物を検査されて食べ物なんて入っていると没収されることもあったみたいだし、輸送途中に雇ってた運転手にトラックごと盗まれたり、盗賊に強奪されたりしたらしい。……貧しい国だよ」

葉佩は階段を下りつつ、二、三段後ろを歩く皆守を見る。

「あのコたちは食糧事情のよくない国で育ってしまった……。あのコらのママは、久しぶりに会った自分の子供たちがあんなに小さく、細く育ってしまったのを見て酷く悲しんだ。……俺のせいだ。でも、責めないだよ。辛いよねエ……」

返答が思いつかず、皆守は視線を逸らしてアロマに火を点ける。葉佩は苦笑して再び歩き出した。

「日本はなんて恵まれてるんだろうねエ。……あのコらを日本で育ててあげたい。少しは大きくなれるかなア」

「さァな」

素っ気無く相槌を打った後、皆守は「あァ、そうだ」と思い出したかのように訊いた。それは、前から訊きたかったことでもあった。

「どうして、今まで遺跡攻略を先延ばしにしてた？ 子供にも、嫁さんにも、苦勞かけなくて済んだだろうが」

「あ、あァ……それはね……」

そこまで思い返したとき、抱きかかえた子供二人がジタバタ暴れているのに気付いて床に下ろした。アンリは小首を傾げて皆守を見つめている。

「甲太郎兄ちゃん、どうしたの？」

「あ、いや、何でもない……いや、何でもなくはないか……」

子供の視線に合わせて屈むと、皆守は訊いていた。

「葉佩は《秘宝》の声が聞こえるのか？」

「……うん」

彩は当然のように頷く。アンリも大きく頷いた。

「そうみたい。……昨日の夜、パパ、僕たちに約束してくれたの。『《秘宝》が呼んでくれたから、ようやく動けるよ。一緒に、《秘宝》を探そうね』って」

アンリはニッコリ笑い、彩はいつもの如く仏頂面で皆守を見つめていた。

「僕たちは、パパと一緒に探すんだ」

「探す。……《宝探し屋》」

その返答に、皆守は自分がどんな顔をしていいのかわからなくなった。

ただ、

「約束なら……仕方ないな」

と答えるのだけで精一杯だった。

「忘れ物はありませんか？」

葉佩は墓地の墓穴の前で全員顔をグルッと見回した。

「ありませ〜ん！」

と葉箱を下げた八千穂。

「な～い！」

とアンリ。

「……ない」

と彩。

「……」

「甲太郎ちゃん？」

一人苦虫を噛み潰したような顔をした皆守に、葉佩は小首を傾げた。

「どうかしたの？」

「どうしたもこうしたも……」

ブルブルと震える拳を握り締め、皆守は言う。

「『墓地に関わるな』と忠告した」

「うん。言ったねエ」

「それなのに、どうしてこんな大人数で潜るんだ?！」

葉佩は「はて？」と首を傾げる。

「《宝探し屋》三人と、バディ二人だよ？」

子供たちは大きく頷く。

「そっだよ～！」

「……探す」

危険だ！　と言いたい。

中には化人がうようよしているし、大型の化人もいる。《生徒会》も潜んでいる。子供を連れてピクニック気分ですべて潜っていい場所ではない。

口に出せない分、非常にイライラが募る。

八千穂が皆守の袖を引いた。

「皆守くん、結構細かいこと気にするよね」

「細かいッ！　葉佩、大体お前のせー」

振り向いた皆守の目の前には誰もいなかった。墓石に括りつけられたロープがゆらゆらと揺れている。

「ちゃんと握らないと落ちちゃうよ～」

「は～い」

「……あ」

「痛ァい～ッ！　彩が蹴ったァ～ッ！」

「早く降りないからだよ～」

早速穴の中から賑やかな声がする。

「キャ～ッ！　楽しそう～ッ！」

八千穂の興味が仏頂面の皆守からロープを下った場所にある遺跡に向いた。すでに皆守の話に耳を貸す雰囲気ではない。

「九ちゃん、下りて平気～ッ？」

「おいで～！ 待ってるよ～！」

「とオ～うッ！」

ロープに飛びついた八千穂が一気に下に下っていく。

一人置いてきぼりを食らった気がする皆守は、悔し紛れにわざとロープを揺らして八千穂を脅かし、何となく気が晴れたところで下へと向かった。

たった三発の銃弾で殖三体を倒した葉佩が「ああでもない、こうでもない」と、ブツブツ言いながら土偶を直している横で、アンリは八千穂に言った。

「明日香姉ちゃん、さっきパンツ見えた」

「キャ～ッ！ 見たの?!」

「……見た」

彩は頷く。皆守はアロマをぷか～ッとふかしながら、

「あんなふうに下りたら見えるに決まってるだろ」

当然のように言う。八千穂の顔が一瞬で真っ赤になった。年頃の娘にはとてつもない羞恥だろう。

「は、恥ずかしい～ッ！！ き、九チャンは見たの?!」

「確認するまでもないだろ」と皆守は呟くが、八千穂はそれを無視して重ねて尋ねた。

「どうなの?!」

「……ん～？ 何が？」

「あ、あた、あたしのパンツ、見た？」

「あア～、それ」

ようやく納得出来るような形になってきたのか、「うん」と頷いた葉佩はにこやかに振り向くと八千穂に答える。

「ピンクの水た一一」

「キャーッ！」

「だ……ッ！」

ゴスッ！ という鈍い音。

「パパ～ッ?!」

アンリの悲鳴。

「……父、へ～き……？」

彩の声。その後続く皆守の溜息。

葉佩の額に八千穂が垂直に振り下ろしたラケットが叩きつけられていた。ガットであれば、もう少しダメージは少なかったかもしれないが、フレームである。痛くないわけがない。

「つあア～……ッ」

涙目でしゃがみ込む葉佩を見て、さすがに八千穂も我に返る。

「あ、ヤだッ！ 九ちゃん、ダイジョブ?!」

額にかかる髪を撫で上げると、真っ赤に腫れている。見事なタンコブが出来ていた。

「だ、大丈夫……かもしれないし、そうでもないかもしれない……ッ」

蹲る葉佩の横でオロオロしていた子供らだったが、南の方角から響いてきたカチッという小さな音に耳聡く反応する。

「鍵外れた！」

「……向こう」

「ま、待てコラ！ 危ないっての！ また化け物がいたらどうすんだッ！」

「やっつける〜！」

「……る〜」

「無理だッ！」

走り出した子供二人を追い、皆守は南の扉へと走っていった。

「……やれやれ」

葉佩は立ち上がると、額をかち割る勢いでラケットを振り下ろした八千穂に向かって微笑む。

「さて、行こうか」

「え？ あ……九ちゃん、ゴメンね……」

「あ、うん。もう平気。……ほら」

葉佩は額を隠す前髪を上げる。

「何ともなっていないでしょ？」

つるんとした白い額。葉佩の眉間にはまだ痛そうな皺が寄っているが、額には何の跡もない。

「……え、ほ、本当だ……」

八千穂はぴたぴたと葉佩の額を撫で、首を傾げる。

「俺のことは心配しないでいいよ」

葉佩はニッコリと笑った。

「年頃の女の子だもん、あの反応は正しいよ？ んふふふふ」

八千穂の頭を撫で、葉佩は八千穂の手を握って歩き出す。

「さ、次の場所に行ってみようか。何がいるかなァ？」

大広間。十二体の石像がずらりと並んでいる。

「うわ〜……ッ。広オイ……」

アンリの手を引く八千穂が感嘆の声を上げた。彩は四人から少し離れたところで周りを見渡している。

「……敵、四。右、二。左、二」

「H. A. N. Tよりも早いねエ、彩は。いいコだよ。すぐに片付けるからねエ〜」

ニッコリ笑った葉佩は両手にハンドガンを持ち、敵の真ん中へと躍り出る。

「はいは〜い。一、二――」

塩垂が水槽から水を噴出して光と消える。

「三、四ツと！」

蚊欲は頭が潰され、甲高い断末魔を上げて光になった。

「片付きましたッ」

振り向いてニッコリ笑う葉佩。

八千穂とアンリは「すご〜い！」と声を上げ、揃って手を叩いた。皆守は壁に背中を預けて退屈そうに周りを見渡している。彩はというと、トコトコと父の側へと歩み寄り、アサルトベストを引いた。

「ん？」

「……いる」

八千穂と皆守は「は？」という顔をして彩を見る。その視線を受けて、彩は少し顔を伏せた。

「あ、あのねッ！」

アンリは唐突に声を上げ、訝しげな皆守、八千穂の視線から彩を守るように間に立つと、「えへへ」と笑い、言った。

「あのね、彩は『見える』んだよ」

「……『見える』？」

聞き返す八千穂。皆守は「はッ」と笑った。

「幽霊でもいるって言うのか？」

「うん。『いる』んだよ」

アンリは当然だ、という顔をして頷く。

「僕、見えないんだけどね。遺跡には『いる』んだよ」

「あ、あ、見えないからわかんないや」

「あははは！」と明るく笑う八千穂。アンリも笑ったが、すぐに泣きそうな顔をして目を伏せた。

「……だから、彩を変な目で見ないで」

アンリは八千穂と皆守の手を握り、呟く。

「お願い……」

八千穂は真剣なアンリを見て、皆守を見た。皆守は八千穂の視線を受けて面倒臭そうに頭を搔く。

「……まァ……いてもおかしくはないからな……」

睡院もここで死んでいる。彼より後の《宝探し屋》もここで何人も死んでいる。彼らの幽霊が彷徨っていても不思議はない。

皆守は彩を見た。葉佩にどこかを指差し、何事かを話している。葉佩はそれを訊きながらいちいち頷き、彩の頭を撫でた。そして、皆守たちの方を向く。

「アンリ、ちょっといいかい？」

「は〜い！」

アンリは皆守と八千穂の手を引っ張って父の側へとやってきた。

「なァに？」

「てるてる坊主、作ろう」

「……え？ それなァに？」

首を傾げたアンリの頭を撫で、八千穂が微笑む。

「あ、それはね、アンリくん。『明日天気になァれ』ってお願いするときに作るものだよッ。…
…九ちゃん、材料持ってるの？」

「うん。……確か持ってたような……。ティッシュと輪ゴムで出来るかねエ？」

「出来る出来る！ 貸してみても〜ッ！ アンリくん、彩くんも一緒に作るッ」

葉佩はポケットを漁ると、ティッシュと輪ゴムを八千穂に差し出す。

「わ〜い！ じゃ、作ろうねッ！ 作り方は――」

その場にしゃがみ込んで、わいわいと楽しそうにてるてる坊主を作り始めた三人を横目に見つつ、皆守は大きな欠伸をした。

「……眠い……」

「帰っていいよ？」

「……お前、あっさりしてるよなァ……」

「無理矢理来てもらうのも悪いしねエ」

それなら初めから呼ぶな、と言いたいが、プリクラを渡している手前強くは言えない。葉佩に賛同したも同然なのだ。「おいで」と言われれば、「わかった」と言うしかない。

溜息が漏れた。

「ここから独りで帰れって言うお前の方がよっぽど酷い」

「んふふふ。そうかもねエ。……じゃあ、もうちょっと頑張ってお前まで行こうか」

八千穂たちが立ち上がった。各々、手にてるてる坊主を持っている。アンリのてるてる坊主はちょっと頭が大きくて不恰好。八千穂のてるてる坊主はバランスはいいような感じであるが、裾のヒラヒラの長さがまちまちで、よく言えばアシンメトリー。悪く言えばだらしない。彩のてるてる坊主はといえば、性格のせいなのか非常に几帳面に作られている。頭の大きさも程よく、ヒラヒラの長さもキチッと揃っている。

「九ちゃん、ペン持ってない？」

「えーと……」

葉佩は内ポケットを漁り、細い油性ペンを取り出す。

「はい」

「……何でそんなもの持ってんだ」

突っ込まずにはいられない皆守甲太郎。

「え〜？ 甲太郎ちゃんが居眠りしたら、顔にラクガキするために決まってるじゃない。んふふふ」

冗談に聞こえない。アンリも「んふふ」と父の真似をして笑っている。八千穂も「んふふ」だ。頬が引きつる。

彩は手にしたてるてる坊主にペンで顔を描くと――この辺りは年齢のせいか、どんな顔を描いていいかわからなかったからなのか、少々面白い顔になってしまったが本人は満足したようだ――人大広間の隅へと歩いていった。

「おい……ッ」

呼び止めようとした皆守を葉佩は止める。

「いいんだよ。平気だから」

彩は誰かと話しているらしい。流暢に彩の話す言語は日本語ではなかった。耳慣れない言葉である。

「……あいつ、何言ってんだ？」

「あのコは、日本語がまだちょっとイマイチ不自由でねエ……。育った国の言葉で話してる」

「だから片言なんだね～」

八千穂は「なるほど～」と頷いた。

「彩はいいなァ」

呟くアンリの肩に手を置いた葉佩は、笑ってアンリの顔を覗き込む。

「そうだねエ。たくさんの人とお話出来るもんねエ」

日本の幽霊に外国語が通じるのかと言いたかったのだが、話は無事に進んでいるらしい。突っ込もうとした皆守だったが、八千穂に脇腹を小突かれて口を閉じた。

化人創成の間。

空気が変わったのをいち早く察知したのは彩だった。掴んでいた皆守の制服の袖を強く引く。

「……いる。……いる。……いっぱい……」

「彩、大丈夫か？」

皆守の手が彩の頭に載せられる。彩は首を横に振り、

「……ッ！」

蹲って自分の耳を塞いだ。何が聞こえているのか、四人にはわからない。葉佩は困ったように笑い、彩の頭を撫でると、一度強く抱き締めた。

「頑張れ。……自分で乗り越えなきゃ、《宝探し屋》にはなれないよ？」

「……父……ッ」

ギュッとしがみつきの、数回大きく息を吐く。次第に落ち着いてきたのか、その手を離れた。

「……大丈夫……」

「うん」

葉佩は彩の頬を撫でて立ち上がった。そして、暗闇に目を凝らす。何かの気配が動きながらこちらに向かって来るのに気付いたからだ。

「墓から出て行け……」

低い、くぐもった声がした。

「この声どこかで……？」

八千穂はアンリの肩に手を置こうとしたが、その場にアンリはいなかった。

「アンリクンッ?!」

「あの馬鹿、何してんだ！」

アンリは声のした方へ走っていた。

「葉佩ッ！ アンリを止めろ！」

葉佩は「ハァ」と大きな溜息を吐いて皆守を見た。

「うちのコをバカ呼ばわりするなんて酷いよ！ 甲太郎ちゃん！」

「いや、そこじゃねエよ！」

思わずツッコむ皆守。ハッと我に返って、アンリの背中を指差した。

「そんなことより、アンリを止めろ！」

葉佩はハンドガンに弾を籠めつつ、ニコニコ笑っている。

「え、あァ、いいんだよ」

「何でッ」

「危なくなったら、ちゃあんと助けるもの。まァ、アンリの好きにさせとこうかねエ」

「九ちゃん、いいの？」

「うん。……迂闊に近寄るとどうなるか、身を持って体験すれば無茶もしなくなるでしょう」

「ヘッ？」

素っ頓狂な八千穂の声。

葉佩はジワジワと自分の周りにわき始めている細掃の位置を確認しつつ、弾丸を銃に装填した。ハンドガン2挺を構え、手短な敵に向けて銃口を向ける。

「……いいのか？」

いつの間にか自分にしがみついていた彩を軽々と抱き上げた皆守は、葉佩に今一度訊いた。

「いいんだよ。……これが俺の教育方針です」

葉佩はアンリの動向を気に掛けながらも、静観に徹するようだ。彼は細掃の掃討を始めた。それを見て、八千穂も葉佩の指示で細掃にスマッシュを浴びせている。

皆守はアンリを見つめていた。取手の前まで進み、無邪気に質問を重ねている。

「保健室にいたお兄ちゃんだよね？ 声、覚えてるもん」

「……子供……？」

「ここで何してるの？ 遺跡の番人なの？」

「……」

「パパの邪魔するの？」

「……」

取手の手がゆっくりとアンリを向いた。

「……うるさい……ッ。お前に何がわかる……。ここは、守らなければならない場所なんだ……。侵入者に何がわかる……」

オオオオオン……と音の波紋が空気を揺らし始める。

「……ッ！」

アンリは耳を塞いだ。直接響いてくるような音波に、頭の奥から痛みが染み出るようだ。

「……ッ、痛い……ッ！ 痛いよオ……ッ」

立ってられず、ペタリと尻餅をつく。

「パパア……痛いよオ……」

「子供といっても……墓を荒らす者に容赦はしない……。この曲を聴かせてあげよう……」

最大出力のフォルツァンドが放たれようとしたとき、取手の目の前からアンリが消えた。

「……何……？」

「いっくよ〜ッ！」

その代わりに、目の前に現れたのは八千穂のテニスボール。遺跡の床を削る勢いで放たれたボールは、取手の額を直撃する。

「……ッ！」

二、三步踏鞴（たたら）を踏みつつ後退する取手の目の前に、不意に葉佩が現れた。

「うちのコを可愛がってくれてありがとねエ、鎌治ちゃん」

どこまでも優しげな微笑みを浮かべる葉佩がいた。その後ろでは、しゃがみ込んだアンリを回収した皆守がアロマパイプを啜え直し、彩は耳を塞いで恐々と取手を見つめている。

「覚悟してねエ」

言葉が終わると同時に両手のハンドガンから放たれる銃弾には容赦の欠片もなかった。《黒い砂》のおかげで蜂の巣にならないにしても、その銃弾は弱点を的確に狙って放たれる。

「……やり過ぎだろ……」

ぐったりしたアンリと、また何かが聞こえるのか耳を塞いでいる彩の面倒を見ている皆守が溜息を吐く。

八千穂は皆守から彩を預かると、「う〜ん」と唸った。

「何だよ」

「九ちゃん、やっぱり、パパなんだね」

「……ああ、そうだな」

仰向けに倒れた取手の口から黒い砂が立ち昇ったのは、すぐその後のことだった。

遠い音楽が聞こえていた。

『かっちゃん……』

優しい声が聞こえる。

『かっちゃん……』

姉の白い頬。死の間際、彼女は微笑んでいた。

『音楽は、心を繋ぐのよ。……かっちゃん、忘れないで。そうすれば、私はずっとあなたの傍にいられる。……ずっと傍にいる。……あなたのピアノを奏でて――』

朝露が朝日に照らされ、微かな煌きを放つような繊細な音。

その積み重ねで出来た姉の音楽。

命が失われる瞬間の耐え難き無力感。

大好きな姉を奪った者たちへの憎しみしか頭になかった。

わかっていたはずなのに。悪い者など誰もいなかったことはわかっていたのに。そう思わなければ取手は立っていられなかった。未来を囑望された姉の無念の死を受け入れるための器などなかった。

だから、付け込まれた。

『かっちゃん』

誰かが呼んでいる声に目を凝らした。

『姉さん！』

天香の制服を着た、元気だった頃のさゆりが微笑んでいた。

『姉さん……ッ！』

駆け寄り、縋る取手にさゆりは言う。

『かっちゃん、あなたはもう、見つけた』

『何を――』

『あなたのこれからを変える人を。……羨ましいな』

取手の手を取り、自分の手を重ねたさゆりは苦笑した。

『私も、お話、したかったな……』

『……？ 姉さん一体何を――？』

『何でもない。きっと、すぐにわかる』

ギュッと手を握り、彼女は涙を零す弟の目を覗き込む。

『ずっと、傍にいる。かっちゃんのピアノが私を、想いを繋いでくれる。傍にいるわ。約束したもの』

『……逝かないで……姉さん……』

さゆりは首を横に振り、今一度、心からの微笑みを取手に向けた。

『もう独りじゃない。目を開けて』

「……」

暗い、遺跡の天井がそこにあった。

「お兄ちゃん、目が覚めた？」

アンリと彩が自分の顔を覗き込んでいるのを見て、ハッと顔に手を当てる。

「マスクは、明日香姉ちゃんが取ったよ。窮屈そうだからって」

「え……」

ぬっと影が落ちた。皆守と八千穂が顔を覗かせる。

「……ようやくお目覚めか？」

「無事だった！ ……よかったッ、取手クンッ」

「皆守君、八千穂さん……」

皆守は一度欠伸をして、体を起こした取手の側に屈む。八千穂も同様にしゃがんだ。

「……君たちは……この子たちが誰か知ってるんだね？」

「ああ」

皆守は頷き、左手をアンリの頭に、右手を彩の頭に乗せる。

「こっちがアンリ。こっちが彩。葉佩の子供」

「葉佩君の……？」

「そうなんだって。……九チャンね、ホントは三十歳越えてるんだよ。若返りの水を飲んで一回り以上若返っちゃったんだって」

「え、ええ？」

取手が驚くのは無理もない。葉佩はどうみても自分たちと同じくらいの歳に見える。

人好きのする笑顔を浮かべ、人当たりよく――大人びていた。

「……？」

取手はふと耳に入った音に耳を澄ます。

「……歌？」

「うん。九チャンが歌ってるの。……さっき出てきたデッカイ化け物を倒したら、楽譜が出てきたんだ。その楽譜を見てるんだと思う」

「……」

取手は体を起こし、周りを見回した。

「……あァ……姉さんが僕にくれた曲だ……」

創成の間を調べながら、葉佩は鼻歌を歌っている。彼の手には、楽譜。

「パパ、お歌上手でしょ？」

アンリは取手に微笑む。先程怖い目に遭ったばかりだというのに、それを忘れていいのか取手の傍らに座って笑っていた。

八千穂は立ち上がり、ス〜ッと大きく息を吸う。

「九チャ〜ン！ 取手クン、目が覚めたよ〜！」

オォンッ！ と遺跡の中に八千穂の声が響き渡った。

「チッ……デカイ声だな……」

「僕もパパ呼……モゴモゴモゴ……！」

「アンリ、お前はいい。うるさいのは敵わない」

叫ぼうとしたアンリの口を塞いだ皆守は、口の端に笑みを浮かべ、取手に言う。

「……帰ろうぜ」

「うん……ありがとう」

「礼なら、あいつに言え」

皆守の指先が葉佩を向いた。取手はそちらを見て微笑む。

「そうだね……」

ひらひらと手を振った葉佩がタッタッタ、と軽い足取りで皆の許へ戻ってくる。ちょっとした段差に足を取られて転びそうになり、「あ〜」と小さい悲鳴を上げた葉佩だが、何とか態勢を立て直して駆け戻ってきた。

「はい、鎌治ちゃん。これ」

と楽譜を手渡す。

「良い曲だねエ。これを書いたのは誰？」

「……姉さん……だよ」

「そうかい。……じゃあ、戻りがてらお姉さんのこと聞かせてね。……戻ろう。學園に……」

手を差し伸べ、葉佩は笑う。

「……無事で何よりでした」

「ありがとう……」

取手は葉佩の手を取り、立ち上がる。

葉佩の手は温かかった。

地上に無事に戻ってきた取手は、葉佩にプリクラを渡そうとした。

「ぷりくら〜！」

「……彩にも」

なぜかアンリと彩も小さな手帳を持っていた。そこには皆守と八千穂のプリクラが貼られ、綺麗な平仮名——おそらくは葉佩の字で皆守と八千穂の名前が書かれている。

「……ふふ」

小さく笑った取手は、葉佩にプリクラを渡し、自分のメールアドレスを教えた後、アンリと彩の手帳にも自分のプリクラを貼り付け、二人に手を差し出した。

「僕は、取手鎌治。……よろしくね。アンリ君、彩君」

閑話休題（九月二十三日～九月二十八日）

「ルイちゃ～ん、うちのコを迎えに来ましたよ～」

そこにいたのは、八卦盤を前にして瑞麗から指南を受けている彩のみ。

「あれエ？」

「アンリなら、トイレに行くと言ったきり戻っていないな。そういえば」

「えエッ？ 本当？ あ～……困ったなア」

首を傾げた葉佩と一緒にいた皆守は、「チッ」と短い舌打ちの後で葉佩の襟を引っ掴む。

「グエッ」

潰れたカエルのような声を上げた葉佩は、

「も、もう少し、彩のことよろしく～……」

と瑞麗に手を振って、皆守に引き摺られるように保健室を出て行った。

タタタッ……タタタッ……

小さな足音が、放課後の校内に響いている。

「……」

二階、音楽室前。

下校時間近くになり、生徒はほとんどいなかった。アンリはピアノの音がする方に吸い寄せられていく。

「……」

ジャンプしても、廊下から中の様子は覗けない。

「う～……う～……」

一生懸命背伸びしても、ジャンプして届かないのだからまったくの無駄。

「……」

それでも気になって、そうッとドアを開け、中を覗いた。

「あ、鎌治兄ちゃん！」

突然呼ばれた方の取手は、ビックリして手を止めた。

「え、えエッ?! ア、アンリ君……?!」

「えへへ。内緒で探検してるんだアッ」

「み、見つかったら……大変だよ……ッ」

「大丈夫だよッ！ だって、僕、《宝探し屋》だもんッ」

そういう問題ではないのだが、取手の言葉がでる前に、アンリはピアノの傍へ駆け寄り、「よいしょッ」と取手の座る椅子の端にちょこんと腰掛けた。

「何弾いてたの？」

無邪気な瞳が見上げてくる。こうなると笑うしかなくなるのか、取手は苦笑を浮かべて楽譜を

示した。

「ショパンのワルツ十四番……だよ」

「ショパン？」

首を傾げたアンリに、音楽室の壁にかかった肖像画の一枚を指差す。

「そう。フレデリック・ショパン。あのんだよ」

「へ～ッ！」

心底感心したような声を出し、アンリは取手に向き直る。

「あのね、パパもピアノ弾くんだよ。ママも昔はピアノが弾けたんだって」

「『昔は』？」

「うん。僕もよく知らないの。僕が生まれるずっと前のことだって。手が動かなくなっちゃったんだって、パパが言ってた」

「そうかい……ピアノが弾けなくなるなんてお気の毒に――」

「でもね、パパも上手なの。ママが前に言ってた。『ママよりもパパの方が上手なのよ。パパのピアノが聴けるからいいの』って」

遺跡で楽しそうに楽譜を眺めていた葉佩の横顔を思い出していた。「確かにあの曲を初見で歌うことが出来るのだから楽譜は間違いなく読めるのであろうし、音も体に染み込んでいるのだろう」と一人納得する。

「葉佩君はピアノを弾くんだね」

「うん」

アンリは上目遣いで取手を見た。

「でも、僕は弾けないの。教えてほしいな～」

口の中でモゴモゴと小さく言葉にするのは、一応遠慮というものを知っているらしい。

「僕が、君に？」

アンリは頷く。

「パパは遺跡探索で忙しいから、お願いなんて出来ないもん……」

取手にもやることはあるのだが、アンリはそこまで頭が回っていないらしい。アンリの中のヒエラルキーはパパがトップなのだろう。パパに迷惑がかからなければいい、そう思っている節がある。

「アンリ君、あのね――」

取手がアンリに説明しようとしたときだった。

ガチャッと音楽室のドアが開き、驚いたらしいアンリの体がビクンと震えたが、顔を出したのが皆守と葉佩だったのを見て、ホッと胸を撫で下ろす。

「パパ！ 甲太郎兄ちゃん！」

アンリはニッコリ笑って手を振った。葉佩はその様子に苦笑し、皆守は盛大な溜息とともに眉間に皺を寄せ、大股でピアノの傍へとやってくると、

「帰るぞ」

細いアンリの腕を掴む。だが、アンリはイヤイヤと首を振った。

「鎌治兄ちゃんに、ピアノ……教えてもらおうの……ッ」

「アンリ、取手だって忙しいんだ」

言うことを聞かないアンリを小脇に抱え、皆守は取手の方を一瞥して、「邪魔したな」と音楽室を出ようとした。

「あ、あの……」

躊躇を含んだ声に皆守の足が止まり、振り返る。取手は皆守ではなく葉佩を見ていた。

「葉佩君、ピアノを弾くって聞いたんだけど……聴かせてはもらえないかな……？」

「え？ アンリ、そんなこと言ったの？」

「うん。……上手だって、聞いたよ」

小さく笑う取手に、葉佩は頭を搔いた。

「ん～、まァ、弾くよ？」

「どんなものを弾くの？ どの作曲家が好き？」

「ん～……そうだねエ～……」

葉佩は皆守の小脇に抱えられているアンリの頭を撫で、ピアノの傍に立つ。取手は「どうぞ」と葉佩に椅子を譲った。

「こらこら、本当に弾かせるつもりかい？」

「弾くつもりだから、ここに来たんでしょ？」

「言うねエ……んふふふふ」

葉佩はバッグを椅子の下に置き、椅子に腰掛けた。

「アンリ、何が聴きたい？」

「ベートーヴェン！ ピアノソナタ《悲愴》！」

元気よく答えるアンリに、皆守は感心したような呆れたような声を出す。

「……よく知ってんな」

「えへへへへ」

褒められたアンリは照れたように笑っている。葉佩は椅子の高さを直し、位置を決めた。いつもと比べ、随分と神経質にそういう部分にこだわるらしい。そして、座り直した。

「彼女が好きなんだ。俺も、好きな曲。でも、時間がないから、第三楽章だけね」

ペダルに足を乗せると、「あ」と顔を上げて取手を見上げた。

「鎌治ちゃん」

「何だい、葉佩君」

「アンリの言うことは聞かなくていいよ」

「……何で……？」

「君は君の出来ることをしなさいよ。ピアノを教えるのは俺も出来る。だから、気にしないでいい。今度の休みに、電子ピアノでも買いに行ってくるよ」

そう言って笑うと、鍵盤に手を乗せた。一呼吸置き、軽快なスタッカートからスラーに繋がる第三楽章を弾き始める。

「……！」

圧倒的な表現力だった。手で口を覆い、漏れそうになる驚嘆を抑える。

——こんな《悲愴》は初めて聴いた……！

軽やかでいて、深い悲しみを心の奥深く秘めている。そんな印象を受ける音——かつて、姉のさゆりが好んでいたピアニストの音によく似ていた。「もし姉さんが生きていたら……」そんなことを考えて胸が熱くなる。

「ヘエ～……上手いもんだな」

感動のない皆守の弦きに、取手は言葉を尽くして葉佩の音の素晴らしさを伝えたいと思ったが、恐らく皆守には通じないだろう。

素晴らしい音楽も、聴く気の無い者に対してはそこいらを吹き抜ける風の音と相違ないのだ。

「これ……」

「あげるッ！」

昼休み。

いつものように保健室でのランチタイム中のこと。

最近、皆守、八千穂の他に、取手がランチメンバーに増えた。瑞麗も含めると総勢七人の賑やかな食事である。

食事が済んだ後、彩とアンリは皆守たちにプリクラを差し出した。

「……どこで撮ったんだ……？」

皆守の問いに、葉佩は「んっふふふ～」と笑う。

「この間、ちょっと西口に用があって行ってきたものだからねエ。『二人で撮りたい』って言うから撮らせてみました」

葉佩は懐からH. A. N. Tを取り出し、皆守たちの目の前にパーン！ というような雰囲気で見せた。H. A. N. Tには、ぺたりとプリクラが貼られている。

「最高でしょう！ うちのコ、ホント可愛いんだから！」

「……親バカも、ここまで来ると、病気ではないかと疑いたくなるな」

冷静な瑞麗の弦き。

「カウンセラー、これは親バカじゃない。葉佩がバカ親なんだ……」

皆守も弦く。

八千穂と取手は子供たちから差し出されたプリクラを受け取り、生徒手帳にぺたりと貼った。

「あははッ！ 可愛いィ～ッ！ アンリクンと彩クン、二人で撮ったんだねッ」

「よく撮れてるね」

八千穂と取手に頭を撫でられてご満悦な子供たちは、皆守と瑞麗にもプリクラを渡した。

「は～い！」

「……あげる」

笑って受け取る瑞麗と、困ったような顔をする皆守。葉佩はそんな皆守を見逃さなかった。

「ちょっとちょっと、甲太郎ちゃん、何その顔。うちのコに何か？」

「別に、何があるってわけじゃないが――」

「じゃあ、何？」

「……」

一瞬の躊躇があった。葉佩は首を傾げる。それを見た皆守は、「チッ」と舌打ちして子供たちの手にあったプリクラを受け取った。

「何でもない。ありがたくもらっとく」

「わァい！」

「友達」

アンリは手短かにいた八千穂に、彩は取手に、ギュッと抱きつく。

瑞麗はふと笑い、自分のプリクラを二枚取り出して、アンリと彩に見せた。

「ほしいかい？」

「ほしいほしい〜ッ！」

「プリクラ……」

八千穂たちの許から、二人は瑞麗の側に移動する。この辺り、子供は正直だ。

子供たちの小さな手帳に瑞麗のプリクラが貼られるのを見ながら、複雑そうな顔をしたのは葉佩だった。

「ねエ、ルイちゃん」

「何だ？」

「俺にもプリクラちょうだいよ」

片眉を持ち上げ、瑞麗は葉佩に向けて意味深な頬笑みでを返す。

「……まだまだ、やるわけにはいかんな」

「え〜？ じゃあ、何でアンリと彩にはあげるの？」

「好感度の違いだ」

ギュッと両腕に子供を抱き締め、瑞麗は続ける。

「まだまだ、葉佩では足りないな」

「……羨ましい……」

呟く葉佩。

「ルイちゃんにあんなふうには抱き締めてもらえるなんて……いだッ！」

「パパ〜ッ?!」

「父、平気？」

「は、葉佩君……痛そう……」

「……くオオオ……ッ」

葉佩は頭を押さえて椅子の上で蹲る。

両側に座っていた皆守と八千穂にどつかれたのは、言うまでもない。

「葉佩さん、荷物が届いてますよ。さっき、《協会》の人が届けてくれました」

「お、ありがとねエ。……おや、ママからだよ？」

夕刻。

マンションの管理人が、帰ってきた葉佩と子供たちの前に箱を差し出した。かなり大きいのが、見た目に反して軽い。つらつらと綺麗なアルファベットで宛名に書かれている。通常の宅配便ではなく、世界各地の《ロゼッタ協会》を繋ぐネットワークで迅速に運ばれてきているようだ。何よりも送り状に《協会》のシンボルが大きく箔押しされているのがその証拠である。

「ママから?!」

「……母」

「お手紙が入ってるといいねエ。じゃあ、おうちに帰って開けてみましょう」

「は〜い！」

「早く帰る」

部屋に戻るなり、ダンボールを壊す勢いでアンリと彩は箱を開け始めた。かなり頑丈に梱包してあるらしい。

「ん〜ッ！ んんんん〜ッ！」

「アンリ、ここ」

「あ、ちょっと開いた！」

「びりびり、アンリ、びりびり」

「うん！」

葉佩はその様子を微笑ましそうに見つめつつ、H. A. N. Tを取り出して皆守と八千穂にメールを打った。

『明日は日曜日でしょう。どう？ 泊りがけで遊びに来ない？ カレー作って待ってます』

送ってすぐ超高速のレスが来た。八千穂だ。

『行きま〜すッ！ お泊りセット持ってくね〜！』

遅れて、皆守からも返事が来た。

『俺が作る。お前は何もするな！』

さすがの葉佩も、これには少し傷付いた。

「ヒドイよ、甲太郎ちゃん……」

呟いてH. A. N. Tをゴソゴソとポケットにしまったとき、

「開いた〜！」

というアンリの元気のいい声が部屋に響き渡った。

「……羊……彩のぬいぐるみ……」

嬉しそうな彩の声。

「僕のはコアラ〜！ ママありがと〜！」

子供たちはそのぬいぐるみを抱え上げ、揃って首を傾げた。

「ん？ どうしたの？」

屈み込んだ葉佩は、子供らが差し出したぬいぐるみを見て笑う。

「ああ、これはリュックだよ。ぬいぐるみの形のリュックなんだ。……見てごらん」

アンリの手からコアラを受け取り、お腹の部分にあったファスナーを下げる。

「ここに物が入るんだよ？」

「羊……」

「彩のも、お腹にファスナーがあるからね」

一端開けてみせてから、二人に合わせて手の部分を調節し、背負わせる。背中に大きなぬいぐるみがぶら下がった。見方によっては、ぬいぐるみが歩いているようにも見える。

「んふふふ～。可愛い《宝探し屋》が完成だねエ。今度から、それに物を詰めて一緒に探索に行こうねエ」

「うんッ！ お菓子持ってく～！」

「……彩、《宝探し屋》……」

「可愛いねエ……」

葉佩は目を細め、二人をギュッと抱き締めると、「あ、そうだ！」とH. A. N. Tを取り出した。

「ママにお前さんたちの写真を撮って送ってあげようねエ」

H. A. N. Tでリュックを背負ったアンリと彩の写真を撮り、箱の中に同梱されていた彼女の手紙を読んでから、メール画面を開いて天井を見上げた。

「……」

葉佩は頬を掻き、「ん～……」と唸る。それからしばらくそうしていたが、

「あ、ちょっとイイコト考えちゃった。んふふふふ……」

そう言って笑うと、手早くメールを打ち――かなりの長文を一気に書き上げて送信する。

「パパ～、ご飯の仕度しないの～？ 僕、手伝うよ～？」

「彩も……」

「あ、そのことなんです」

葉佩は笑って告げる。

「お二人にお知らせです。……明日香ちゃんと甲太郎ちゃん、泊りがけで遊びに来てくれるそうです。当然、夕食は甲太郎ちゃんのカレー！」

「本当に～?!」

「……カレー……美味しい」

目を輝かせる二人を見て、葉佩は微笑む。

「うんうん、よかったねエ。お前さんたちが喜んでくれれば俺も嬉しいよ～」

いつも仏頂面の彩も嬉しそうに微笑んでいた。少しずつ葉佩を含めた周囲の人々に慣れれば良いと思う。アンリは元来能天気ですぐに慣れることが出来るが、彩はそうは行かない。彩の今までの思えば思うほど、皆守や八千穂も関わる生活が彩のこれから明るくしてくれればと思う。

ピンポン、とインタフォンが鳴った。

「は～い！」

アンリは踏み台を運んでその上に乗るとインタフォンに出る。

『来たよ～！ 皆守クンも一緒だよッ！』

「今開けるね～！」

彩はテーブルの上に載っていた鍵を手取る。

「ぬいぐるみ、見る」

「僕も～！」

「はいはい、いってらっしゃい」

ぬいぐるみリュックを背負った子供らを送り出した葉佩は、手紙を手にとって、今一度開いた。

優しい言葉が並んでいる。

「……健気なのはいいことかもしれないけれど……無理しなさんなよ」

子供には決して見せない顔をしてそれをポケットにしまうと、アンリと彩という怪獣がボロボロに壊したダンボールを見て「はァああああ!？」と奇妙な叫び声を上げると慌てて片付けを始めた。

「は、早く片付けないと、甲太郎ちゃんに怒られる……！」

「コアラが歩いてる……可愛いな～」

「羊が歩いてるようにしか見えない」

手を繋いで歩くアンリと彩の後を、八千穂はニコニコと微笑ましように、皆守は呆れ果てたような顔をしてついていく。

「あの二人の大きさとぬいぐるみの大きさが合っていないんだな」

「リュック可愛いなァ～！ 似合うなァ～！」

二人が部屋の中でいつも抱えているぬいぐるみとまったく同じ顔をしているぬいぐるみリュックを見て、八千穂は首を傾げた。

「メーカーが一緒なのかなァ？」

「さァな。葉佩に訊け。俺は知らん」

「そだね」

玄関ドアを開け、居間代わりの部屋に踏み込んだ皆守と八千穂は、壊れ果てたダンボールをどうやって畳もうかと思案している葉佩を見て苦笑を浮かべる。

「あ……」

一瞬「しまった！」という顔をしたのだが、そのすぐ後で葉佩は取り繕うような微笑みを浮かべた。

「い、いらっしゃい」

「九ちゃん、何してるの？」

「ダンボールを片付けようかなって……あ、あのさ、明日香ちゃー」

どうしたらいい？ と訊こうとした葉佩を遮るように、皆守は言う。

「八千穂、手を貸すなよ。……葉佩、少しは自分で片付けろ。この間だって俺とアンリと彩で片付けたんだからな」

「わ、わかってるよ～……」

「俺はカレーを作る。飯までに片付けろ」

「は～い……」

皆守は勝手知ったる他人の家で八千穂の前に来客用カエルスリッパを出し、自分は荷物の中から新品らしき自分専用スリッパを取り出すと、それを突っかけてズカズカと上がり込む。

「ご飯？ カレー？」

「あァ、そうだ。始めるぞ」

「手伝う～！」

「……彩も」

自分たちの部屋に戻ってリュックを背中から下ろし、代わりにいつものぬいぐるみを抱きかかえたアンリと彩は、皆守の後にくっついてキッチンに入った。すっかり皆守に懐いている。ダンボール一つ畳めない父親よりもよっぽど頼りになるように見えているとしたら、葉佩の立場はかなり寂しい。

「……うう、甲太郎ちゃん、厳しいんだから……」

跡形なく、不揃いな形に切り裂かれたダンボールを何とかまとめてビニール紐で縛ると、ニコニコ笑いながら自分を見つめる八千穂に気付いた。

「？ どしたの？ 明日香ちゃん」

「ん～ん。『九チャンツて可愛いな～』って見てた」

「……三十過ぎのオジサンに言う言葉じゃないよ～」

「でも、そう見えたんだもん」

えへへ、と笑った八千穂は、「あ！」とポンッと手を叩いた。

「九チャン、聞きたいことがあるんだァ」

「ん？」

「アンリクンと彩クンが持ってるぬいぐるみって売ってるの？ リュックも同じ顔してるから、メーカー一緒なんだよね？ あたしもほしいなァ……」

「あ、あァ、あれはねエ」

葉佩は目を細めて微笑んだ。

「彼女(ママ)の手作り」

「えエツ?! すごいね！ 手芸とか得意なの?!」

「得意……ん～、『得意になっちゃった』と言う方が正しいかなァ……」

「どういうこと？」

首を傾げる八千穂に、葉佩は言う。

「あの人はね、すごく腕のいいピアノ弾きだった。俺なんて足元にも及ばないくらいのね。でも

、俺のせいでピアノが弾けなくなっちゃって……」

葉佩が泣きそうな顔で笑うのを初めて見た。いつもの能天気な笑顔からは想像出来ないほど悲痛な笑い顔。

「当然、手が不自由になっちゃっててね……リハビリを兼ねて、編み物とか針仕事とか始めたらいいんだ。そうしたら、楽しかったんだろうね。時間が潰せるし、そのことしか考えなくていいんだからどんどん上達した。アンリと彩が抱えてるあのぬいぐるみ、彩が俺たちのところに来たとき、アンリと彩に彼女がプレゼントしたんだよ。二人とも、自分の子供だっていう意味で。『アンリも彩も、自分の子供。偏ることなく二人とも愛していきます』……そんな誓いの言葉がぬいぐるみの中に手紙になって入ってるんだよ」

葉佩は右手の人差し指で空中に四角を描く。

「このくらいの大さの紙に、俺と彼女の署名入りでね」

と、そう言って笑った。

八千穂は黙ってその話を聞いていたが、ようやくいつも通りの微笑みを浮かべた葉佩を見て安堵の溜息を漏らす。

「九ちゃん……九ちゃんの奥サンは、素敵な人だね」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

——無理ばかりしている人だけけどね。

葉佩は口を突いて出そうになる言葉を飲み込み、漂う香りにキッチンの方を見た。

「あ、いい香りがしてきたね」

「皆守クンのカレーだもんッ！ いい匂いするよ～」

二人は笑い合い、揃って立ち上がった。

「たまには手伝いますか」

「『邪魔だッ！』って叩き出されないことを祈ろうかね。んふふふッ」

九月二十八日。

「アンリ、よくない」

「大丈夫だよ、彩。僕たち、《宝探し屋》なんだよ！」

「……」

子供二人がコソコソと何かを話している。内容はかなり不穏で、二人の父が聞いたら真っ青になって卒倒するかもしれないようなものだった。瑞麗は聞かないふりをして、手元の仕事を進めながら成り行きを見守る。

「……父の話、聞いた……？」

「何？」

「う……と……——」

彩は日本語が出てこなかったらしく、彼らの育った国の言葉に切り替えた。意思の疎通はその

方が円滑らしい。アンリは「うん、うん」と頷きながらその内容を聞き、ニカッと笑った。

「平気だよ。《生徒会》に見つからなきゃいいんでしょ？」

「……アンリ……違う」

首をブンブンと横に振る彩を無視して、アンリは立ち上がった。背中にはぬいぐるみリュックを背負って装備は万端だ。

「《宝探し屋》はどんな困難にもへこたれないの！」

言うが早いか、アンリは保健室を飛び出していった。

「……アンリ……」

「まったく仕方ない子だな、彩」

「……」

彩は俯く。

「そんな自分の責任のような顔をしなくてもいい。……君たちの父はああ見えて間抜けではない。……大丈夫。アンリに危害が及ぶことは決してない」

「……何で？」

「何でも、さ。……三人で食べようかと思っていたチーズケーキがあるが、言いつけを守れない悪い子の分は食べてしまって構わないぞ」

「……ありがとう」

彩は少しだけ頬を緩めて頷いたが、再び俯いた。

「？」

「……アンリ、食べる」

「……そうか。わかった。では、これはアンリが来るまで取っておこうか」

瑞麗は「これが逆だったら、迷わずアンリは二個食べているな……」と二人の性格の差を知り、大きく内心頷いた。

大きなぬいぐるみが廊下の角でしゃがみ込んでいた。

「……？」

どうも、ぬいぐるみが人の背中にくっついている。

「あのオ～……」

ビクンとぬいぐるみが震え、ゆっくりと動いた。ぬいぐるみの向こうから出てきたのは、明らかに子供。

「……子供……ですか？」

アンリの青い目が恐々と声の主を見て、真ん丸に見開かれた。

「……！」

アンリには、大きなフランス人形が立っているように見えていた。普段隠れて観察している一般生徒の姿から大きく逸脱している風貌の女子生徒である。のんびりとした調子で紡がれる言葉

と高い声は、彼女の姿と相まって、本当に作り物のような気すらした。

走って逃げようとしたが、声の主がぬいぐるみリュックを掴んでいたために逃げることも出来ず、その場でジタバタと足だけを動かすに留まる。

「可愛いぬいぐるみですウ～」

どうやって出来ているのかを確認するように、少女はぬいぐるみを端から端まで眺め回す。

知らない人に声をかけられた上、女子生徒の白塗りに紫色の口紅がアンリには怖かった。怖くて仕方ないアンリは涙目でコクコクと頷くだけ。女子生徒はぬいぐるみから手を離し、ニコッと微笑んだ。

「ありがとうございますウ。……でもオ、あなたはどこから入ったんですのオ？ 天香學園は全寮制ですし、校門にも警備がいて外からは入ってこられないはずですよ」

「……」

ガタガタと震えるアンリの視線の先、女子生徒の肩越しに音楽室から出てきた父の姿が見えた。皆守と取手も一緒のようだ。

「パ……」

パパ！ と叫ぼうかと思ったが、叫んでもいいものかどうなのか、アンリは一瞬躊躇した。父の正体を明かすようなものではないだろうか、と一生懸命考える。

「椎名さん……？」

それを遮るような取手の声が出た。女子生徒はアンリから視線を外し、取手を見てスカートを少しだけ持ち上げて丁寧にお辞儀する。葉佩と皆守は視界に入っていないらしい。

「こんにちはア～、取手クン」

「……何してるんだい？」

「今ここにィ、大きなぬいぐるみリュックを背負った子供がいるんですウ～」

「へ……へエ～……」

引きつり笑いを浮かべる取手。

それを聞いた皆守の肘鉄が葉佩の脇腹にクリーンヒットする。

「で……ッ！」

咳き込みそうになったが何とか我慢し、彼女の背後にいると思いきぬいぐるみを確認しようと、体を斜めにしてそちらを覗き込んだが――

「ここに……あらア？」

いなかった。

頭の回転はともかく、逃げ足だけは速いようだ。

「いなくなってしまうましたのオ～……」

「そ、そうかい。残念だったね」

「ですよ……キャラメル、あげようかと思ったのですけれどオ～……」

彼女は残念そうに溜息を吐くと、理科室へと入っていった。

「……間違いなくアンリだな」

「保健室に行ってみようか」

ダメ親父を見つめる取手と皆守の視線が痛い。

「なァ、取手」

「何だい、皆守君」

「子供の躰だけは重要だと、最近特に思い始めたぜ」

「そうだね、僕もそう思うよ」

針の筈である。

葉佩は二人の哀れむような優しい微笑みに、いつもの笑顔を引きつらせつつ小さく呟いた。

「あ、ああ、ほ、保健室、行こうよ、ね？」

ギラリ、と皆守と取手の視線が途端に冷たくなる。

「そうだな、葉佩。お前に言いたいことは山ほどあるが、それはアンリと合流してからゆっくりと話そうじゃないか」

「そうだね、僕もそれがいいと思うよ」

「ヒ……ヒィー……ッ」

細い悲鳴が廊下に響き、尾を引くように遠ざかっていった。

駆け戻ってきたアンリは保健室に駆け込むなり、ピシャッと戸を閉めてゼーゼーと肩で息をしている。相当焦って帰ってきたのだろうことがわかって、瑞麗はアンリの方を振り向いて何か言おうと口を開いたのだが、アンリは瑞麗が注目していることにも気付かず、彼女が何かを言う前にノートに五十音を並べて書いている彩に飛びついた。その衝撃で背中のコアラにまで頭突きを食らった彩の手が滑り、2B鉛筆の濃い線が勢いよくノートに真横に走る。

「……ッ」

頭を押さえて黙り込んだ彩の代わりに、瑞麗は苦笑しつつアンリに尋ねた。

「どうした？ 慌てて戻ってきて……」

「あ、あのね、ルイ先生！ デッカイ、デッカイお人形がね……ッ」

「大きな人形？」

「うん！ 女の子の格好してたよ！ でもね、他の人とちょっと違うの！」

「……」

瑞麗は首を傾げ、「ああ」と頷いた。

「椎名か」

「シーナ？」

「3-Aの椎名リカだな。……名前は訊かなかったのか」

「ビックリして、逃げてきちゃった……」

ガラッと保健室の戸が開いた。

「カウンセラー、アンリはいるか」

イライラとした皆守の声に、アンリは傍にあった掃除用具入れの中に隠れようとしたが、背中

のコアラが大きくて中に入りきれない。

「ん～……ん～……ッ！ ……んにヤッ！」

リュックを掴まれズルズルと引き摺られるアンリは、ジタバタと手足を動かして自分にかかる力を分散しようと試みる。リュックを手放せばいいのだろうが、そういう方向に頭が回らないのがアンリのアンリたる所以である。

「アンリ～……話があるんだがな～……」

皆守の声が真上から降ってきた。ギギギ～ッと『油を差した方がいいのでは』と思うような動きで首を回したアンリは、不気味に微笑む皆守を見て、

「び……」

と小さい悲鳴を上げる。

「葉佩は一緒なのか？」

彩のノートに引かれた濃い鉛筆の線を消しながら、いつもとまったく変わらない調子で瑞麗は皆守を見る。

「ああ、一緒だ。……これからちょっとばかり、この親子に話をしようかと思ってな」

「好きにしろ。……取手、シュークリームでも食べるか？ お茶を淹れるぞ。ついでに彩に簡単な日本語でも教えてやってくれ」

「はい、ルイ先生」

「僕もシュークリーム……」

「アンリはこっちだ」

コアラを掴まれ、そのまま小脇に抱きかかえられると、父が待っているらしい皆守がよく寝ているベッドの方に連れて行かれた。

「パパ～……」

「アンリ～……」

恐らくギュッと抱き合っているであろう2人の様子が手に取るようにわかる。

「彩、シュークリームは食べるか？」

笑いを堪えつつ瑞麗は彩に小さいがクリームがしっかりと詰まったシュークリームを差し出す。しかし、彩は首を横に振った。

「……彩、いらない」

「食べないのかい？」

取手が尋ねると、彩は取手の制服の袖をギュッと握って呟いた。

「彩、アンリが一緒いい」

「そうか。……この調子でチーズケーキもいらないと言ったからな、この子は」

「そうなんですか」

瑞麗の言葉に頷いた取手の耳に、「ひ～……」「にゃ～……」という悲鳴じみた声が聞こえたが、それは身から出た錆。関わらないに越したことはない。

「……あ、いたいたッ！」

保健室の窓の外から声がした。コンコン、と八千穂が窓を叩いている。

「どうした？ 八千穂」

カラカラと窓を開けた瑞麗に八千穂は言う。

「えへへ。みんな集まって楽しそうだな～って。……あれ？ アンリくんは？」

「アンリなら、葉佩と一緒に皆守に説教を食らってる」

「皆守くんのお説教?! 何したの？」

「アンリが独りで校内に探索に出たのだよ。椎名に見つかったが、とりあえず何事もなく済んだ」

「……危ないなァ、もう……」

八千穂は窓枠に肘を突いて中を覗き、取手の手にあったシュークリームを見て目を輝かせた。

「私にも一個ちょうだい！」

「はいはい」

その間にも、やはり、「にゅ～……」「ぴ～……」というわけのわからない悲鳴が聞こえているのだが、それに首を傾げたのは八千穂だけで、彩も取手も、瑞麗も、何事もないような顔をして、シュークリームを食べたり、お茶を飲んだり、消しゴムでノートの鉛筆の跡を消したりと忙しい。

「変なの」

ぱくり、と手渡されたシュークリームを口に入れ、八千穂はニッコリと笑った。

九月二十九日――午後。

「……マミーズで爆発？」

「五時限目の授業中です……私のクラスの生徒も何人か巻き込まれたみたいで……」

瑞麗としては「授業をサボった報いだ」と言いたいところだが、雛川は授業をサボるサボらないの前に怪我をした生徒がいることの方に心を痛めているようだ。「さすがに皮肉を言う雰囲気ではない」と思い直し、

「心配だな、雛川先生」

と返した。雛川は小さく頷く。

「ええ……皆守君と葉佩君もその中にいたみたいで……あの二人は何かある場所に必ずいる気がします……」

「そうか、なるほど」

まア、葉佩はこの学園の特異点みたいなものだからな……――と言いたいところをグッと我慢して瑞麗は雛川の話の話を聞きながら熱心に聞く。

職員室前でそんな会話をして保健室に戻ってきた瑞麗は、何も知らずに小学校一年生程度の国語の問題集に頭を悩ませているアンリと彩を見た。数日前から一緒に行動しているコアラと羊のぬいぐるみリュックを隣に置き、向かい合ってブツブツ言いながら問題を解いている。

「……」

口の端に笑みを浮かべ、瑞麗は煙草に火をつける。煙管からゆるゆると煙が立ち昇るのを目で追いながら、

「ああ、そうか。担任しているクラスの生徒がそこにいたというのもあって、雛川先生は必死に原因究明を……」

と、雛川が先程他の教師たちと職員室で繰り広げた丁々発止のやりとりを思い起こした。

少し疲れたような顔をした葉佩が保健室に現れたのは、下校のチャイムが鳴る二十分程前だった。

「失礼しますよ～」

「ああ、葉佩。遅かったな」

「んふふ。いろいろあってねエ。……今日もありがとね、ルイちゃん」

「フッ……気にするな」

葉佩の横顔を見ながら、瑞麗は僅かに眉をひそめた。血の流れた跡があるが、傷がない。

「葉佩、ちょっと……」

「ん？」

瑞麗は立ち上がると、葉佩の顔に自分の顔を近づける。

「あわわッ！ ルイちゃん、俺には心に決めた人ガフッ！」

「うるさい」

葉佩の鳩尾に一発拳を入れた瑞麗は首を傾げた。

「葉佩」

「えふ……ッ……けふッ」

「傷がないのに、どうして血が流れた跡が……？」

「んふふ。……内緒」

葉佩は片目を瞑り、瑞麗の肩をポンッと叩くと、アンリと彩のいる衝立に区切られた場所に入る。

「さあ、帰るよ～」

「パパ～！」

「父、遅刻……」

「ごめんごめん」

ムギューッと音がしそうなほど子供たちを抱き締める葉佩の顔はどこか悲しそうに見えた。瑞麗は、ぷかりぷかりと煙草の煙を吐き出しつつ様子を伺う。かのしげよから何を言うべきものでもない。相談されたら乗ればいい。葉佩は大人だ。

「ルイちゃん」

子供たちの帰り支度を整え、衝立の裏から出てきた葉佩は私服に着替えていた。アンリと彩の手を引いて、瑞麗の前に立っている。

「どうした？」

「……今日、いろんなことを考えたよ」

「例えば？」

「『《人が死ぬ》って、どういうことなのか』『《人の心の痛み》って何だろう』って……」

「それで？」

子供の手を握る力が強くなったのだろう。アンリと彩は、不思議そうに父を見上げた。

「俺は、忘れまいとしながら、でも、本当は忘れようとしてたんだ……って」

「……そうか」

「うん」

ぬいぐるみリュックを背負う子供たちを見て、葉佩は苦笑する。

「でも、人は『他人の幸せを奪ってここに自分があるんだ』って知っても自分の幸せを追おうとする。……なんて罪深いんだろうと思うねエ」

「それに気付けぬ輩も多いのに、お前はそれに気付いたんだ。……まだマシな部類だろう？」

葉佩は屈みこんでアンリと彩の顔をじっと見つめ、握っていた手を放す代わりに二人を抱き締めた。

「んふふ……そう言ってもらえると、少し、安心する」

「私はこの学園のカウンセラーだぞ？ 当然の仕事だ。……お前たちが夜な夜な《夜遊び》を繰り返すのを仕事にしているよにな」

薄く笑う瑞麗に、葉佩も小さく微笑み返して再び立ち上がった。そして、いつもと変わらぬ能天気な調子で告げる。

「じゃ、帰りますねエ。明日もよろしく～」

「じゃあね！ ルイ先生！」

「さようなら……」

葉佩と子供たちは人気がないことを確認すると窓から出て行き、すぐにその場から消え失せた。

「……葉佩、お前が何者かは知っているが……」

最近は移動の際にダンボールを使うこともなくなった。彼らは校内を熟知しているのだろう。

「たいしたものだよ……」

額に手を当てた瑞麗は苦笑とともに大きな溜息を吐いて窓を閉め、鍵を掛けた。

葉佩たちは住処であるマンションに一端戻っていた。

「パパ～、遺跡には何を持ってくの？ リュックにお菓子詰めてけばいいの？」

コアラのお腹のファスナーを下げ、中に大好きなチョコレート菓子数種類とハンカチ、ティッシュ等を詰めるアンリは、相変わらずのんびりと夕食の支度をしている父の服の袖を引いた。

「彩がね、お薬も入れた方がいいって言うんだよ」

「そうだねエ……。転んだときに傷が洗えるように、水を持って、消毒薬を持って、あとは綺麗なタオルを持って、あと絆創膏かなア」

「それ、いつも甲太郎兄ちゃんが持ってきてるよ～？」

「あ、そうかア……明日香ちゃんも持ってきてくれてるよねエ」

それら薬品を葉佩はまったく使わず、専らアンリと彩が世話になっている。恐らく、皆守と八千穂も二人のために持ってきているのだろう。八千穂はともかくとして、皆守も相当の気配り人だ。

フライパンの中で美味しそうに出来上がったチキンライスを皿の上に綺麗に盛り付けてから、葉佩は小さなフライパンを取り出して、油を入れると火にかける。ボウルの中に卵を落とし、塩を少し入れて菜箸でチャッチャとかき混ぜ、フライパンの中に卵を流した。

アンリは父の仕事を首を傾げて腕を組み、「う～ん」と唸りながら見つめていたが、唐突に「うん」と一つ頷いて言う。

「じゃあ、パパ。やっぱり、僕はお菓子持ってくるね～」

「ん。そうしなさい。『お腹空いた』ってときに食べられるようにね。明日香ちゃんとアンリは、いつも『お腹空いた』って言ってるもんねエ」

小さなフライパンの中でフワフワのオムレツが出来上がった。それをチキンライスの上にポンと置くと、指先で上の方を二、三箇所つつく。

「うわア～……！ 美味しそう！」

半熟のオムレツが綺麗に割れ、チキンライスを覆った。ツヤツヤ、とろとろの卵が目にも鮮やかである。

「卵とろとろオムライスが出来上がり。……これはアンリの分。後は、彩と俺の分を作るから、もう少し待っててねエ」

「うんッ！」

アンリはキッチンから居間の方に向かった。

「彩～！ もうすぐご飯だよ～！ 今日、オムライスだって～！」

そんな大きな声で言わなくとも聞こえるだろうに、と葉佩は苦笑し、彩と自分の分のオムレツを作り始めた。

『九ちゃん、今日のお夕飯は何？』

『今日のメインは半熟卵のオムライスだよ。アンリと彩は、ペロッと食べちゃった。美味しかったよ～』

『む、私も今日はハンバーガーじゃなくて、オムライスが食べたくなっちゃった』

『オムライスはいいいねエ。ケチャップでお絵描きする楽しみがあるもの』

『えへへ☆ それは言えるかも！』

他愛ないメールを数通交わし終えた葉佩は、随分とパンパンになったぬいぐるみリュックを前にして「ああでもない、こうでもない」と言いながら、中味を出したり入れたりしているアンリと彩を見た。

「二人とも、随分詰めたねエ……」

「うんッ！」

「彩、片付けた」

「片付けるのとはちょっと違うねエ、この場合は」

彩の頭を撫で、葉佩は二人の前に座った。

「はい、注目」

「？」

「何、父」

「今日の探索は、この間よりも少しだけ大変かも知れません。この間はまだまだ入り口だったわけだからねエ。この間みたいに、鎌治ちゃんのような《生徒会執行委員》もいます。今回待ち受ける敵は3 - Aの椎名リカちゃん。アンリが会ったことのある、お人形みたいな可愛らしいコだね」

「……あ、昨日のデッカイお人形……みたいな、女の子……？」

「そうそう。……彼女が敵です」

「……」

アンリは俯く。

「ぬいぐるみ、可愛いって言うてくれたのに……」

「……アンリ、それが彼女の本当なんだよ。でも、《生徒会》の下にいる限り、彼女がその本当を取り戻すのは至難の業。……俺たちは、彼女のために敵対するんだ。戦って勝つんだ。……いいね」

「うん……！」

「彩は、わかったかい？」

「……うん」

頷いた彩を確認し、葉佩は「よっこらしょ」と立ち上がると、一度大きく伸びをした。

「さァて、行きますか〜！」

「行きますか〜」

「……か〜」

「遅い」

「ごめんごめ〜ん……ん？」

皆守の声に明るく返した葉佩は、バディがいつもより一人多いことに気付いた。墓地には皆守、八千穂、取手がいる。

「おやおや、お前さんたちが相当な手練だとしても、さすがに連れて行けるのは二人までだよ」

困ったように笑った葉佩に、取手は言った。

「僕は行かないよ。見送りに来たんだ」

「見送り？」

「うん」

首を傾げる葉佩に取手は続けた。

「……葉佩君。椎名さんを助けてあげて」

「そのために俺はいるんだよ、鎌治ちゃん」

強く頷く葉佩。

「お前さんを含めて、俺には甲太郎ちゃん、明日香ちゃんがいる。子供たちもいる。……任せて。リカちゃん、連れて帰ってくるよ」

「頼むね……」

「うん。もちろん」

取手に見送られ、五人は墓に潜行した。

皆守の視線の先には、手を繋いだアンリと彩がいる。

「お前ら」

「何？ 甲太郎兄ちゃん」

「何？」

本人たちよりも膨れてしまっているぬいぐるみリュックを見ると溜息しか出てこない。

「それは、何が詰まってるんだ？」

「確かに、すごい入ってそうだね～」

八千穂も頷いた。

アンリはニッコリ笑って八千穂を振り返る。

「お菓子！」

元気な声に、八千穂の目が輝いた。

「お菓子?!」

彩も頷く。

「二人とも、何を持ってきてるの？」

皆守の溜息が聞こえる。「緊張感のない奴らだなァ……」という呆れ果てた声が後に続いた。

「僕はチョコのお菓子！」

「彩、チーズ」

八千穂は大きく頷いた。

「そうだったね～。アンリくんはチョコ大好きだし、彩くんはチーズ味大好きだもんねッ」

先頭を歩いていた葉佩は、後ろの呑気な会話を聞きつつ、ひょいッと階段の下を見た。

青い蝶がヒラヒラと舞っている。

「……おや？」

H. A. N. Tが『キルリアン反応が……』と呟いているのを聞いていた。

「ちょっと待ってて」

葉佩は後ろを振り返らずにひょいと階段を飛び降り、蝶の前に立って手を伸ばす。

空間が歪んだのだろうか。肌に当たる空気にチリチリとした僅かな刺激を感じた。そう思った瞬間、蝶が滲み、先程まで飛んでいた蝶と同じ姿のマスクを付け、同じく鮮やかな青色のドレスを身に纏う豊満なバストの美女が出現したのである。

「……！ チョウチョコ……女の人になった……！」

アンリは目を丸くしてギュッと彩の手を掴む。彩は淡々とした様子で、目の前に繰り広げられる光景を目に焼き付けているように見えた。

「……遺跡って……すごい……」

好奇心に目を輝かせる八千穂に、皆守は冷淡だった。

「あァ？ 何があっても不思議はない。……奇天烈な格好した取手だっていたんだ。椎名だってとんでもない格好してる可能性はあるぞ」

指摘ポイントが微妙にずれている。

一方、葉佩はというと、マダム・バタフライと名乗った女性と何か交渉しているらしい。

「……え？ マダムって、グルメだねエ……？」

呟く葉佩に、マダムは言う。

「……何も持たないのね……また、いらっしやい」

そして、蝶に戻ってしまった。

「つれないねエ……」

溜息混じりに振り返った葉佩は、アサルトベストからパルスHGを取り出しピンを抜き、レバーを放す。

「葉佩、何すー」

「え〜い！」

悔し紛れのようにパルスHGを壁に向かって投げつける葉佩。ハンドグレネードが壁で炸裂すると同時に、皆守の蹴りが葉佩の背中に炸裂する。崩れた瓦礫の中に葉佩の上半身が埋まった。

「何してんだ、お前！ 危ないだろ！」

恐らく、葉佩は同じことを皆守に言い返したいに違いない。

「パ、パパァー……！」

「父……」

「今のは九チャンが悪いけど、皆守クンもやりすぎ！」

「ふん」

一番の被害は葉佩なのだが、何の注意もせずにハンドグレネードを投げたのは葉佩だ。因果応報かもしれない。

パラパラと瓦礫を撒き散らしながら無傷で起き上がった葉佩は皆守の蹴りを受けた証拠である靴跡を背中に残しつつ、

「……さ、ここから《探索》開始だねエ……んふふふふ」

心底楽しそうに笑い、葉佩は宝箱に手をかけた。

「暗いとかやだァ〜！」

ピーピー泣くアンリの手を引きながら、皆守は溜息を吐く。

「うるさい。そんなんで《宝探し屋》になれんのか、お前は」

「暗いの怖いィ〜！」

礼堂は漆黒の闇だった。

「明日香ちゃん、彩はいる？」

「うん。大丈夫だよ。手、繋いでるから」

八千穂は葉佩のアサルトベストの端を掴んでいる。

ただいま、この五人パーティがどのように歩いているかということ、先頭に暗視ゴーグルをつけた葉佩。葉佩のアサルトベストを掴んだ八千穂。八千穂の手を握る彩。彩の手を握るアンリ。アンリの手を握る皆守。そういう順番になっていた。

葉佩しか周囲の様子を確認出来ないため、数珠繋ぎで歩いている。

「彩の方が年下なのに、兄貴のお前がピーピー泣いてどうすんだ！」

皆守に叱られ、アンリは小さくしゃくり上げながらブツブツと口答えした。

「……だって……こ、怖いだもん……」

それを訊いて皆守が溜息を吐いたとき、カチッという音が暗い礼堂に響き渡った。全員の動きが止まる。

「あ、何か踏んじゃった。んふふふふ」

「葉佩！」

「九ちゃん！」

皆守と八千穂の「何してるんだ、お前は！」というニュアンスしかない叫びに、葉佩はのんびりと答える。

「全体止まれ～！ 床に伏せてねエ！」

アンリは彩の手を掴んだまましゃがみ込んだ。彩も釣られるようにしゃがみ、皆守と八千穂も言われたとおり頭を低くする。

「父。前、四。後ろ、二」

「了解」

八千穂がアサルトベストから手を放したと同時に、不気味な声が前方後方から複数聞こえた。

「相変わらず、彩は鋭い。その通りだねエ。……じゃ、みんな、耳塞いでねエ」

楽しそうな葉佩の含み笑いと銃声、何かの断末魔が絶妙にミックスされた、どう表現していいのかわからない音が礼堂全体を支配する。

「……ヒッ……ク、ヒック」

「アンリ」

しゃくり上げる兄の手をギュッと握る彩は、数えていく。

「五、四……」

銃声、断末魔……

「三」

「あ、弾切れした。こっちに武器代えよっと。んふふふ」

「二、一」

最後の一体の断末魔が響き渡ると同時に、彩は告げる。

「終わり」

皆守はアンリの手を引き、立ち上がる。八千穂と彩も立ち上がった。

「え～と、ここに亀裂があって……こっちにレバー……」

鼻歌混じりに葉佩はパルスHGを亀裂に投げて盛大に壊すと、その間に壁のレバーを引く。

「あ、宝箱回収するから、ちょっと待っててねエ」

葉佩が宝箱を回収している間、八千穂は自分の手の先にいる彩に訊いた。

「彩クンは暗いところは平気なの？」

「うん……」

「どうして？」

「ずっと暗い、ない……」

「？」

「ドアのあっち、明るい」

「そう、だね！　ずっと暗いままってないもんねッ！　夜だって、朝がちゃんと来るしね！」

皆守は口の端を不愉快そうに曲げた。今ほど顔が見えなくてよかったと思うことはない。

「明けない夜はないもんね！」

――明日が光に溢れたもんだという保証もないがな。

胸の中で愚痴ってアロマに火を点けると、ふと手の先にいるはずのアンリがやたらと静かになったのが気になった。

「おい、起きてるか？」

「……うん」

小さく頷いたらしいアンリの声。不安の色は濃い。酷い鼻声だ。

「……ドアの向こう……本当に明るいのかなァ……」

「行ってみればわかるよ～」

間延びした葉佩の声。

「次はどんなところかねエ。次の部屋にも何かいたら、ちょちょいッと片付けて休憩しようねエ」

その言葉に、子供と八千穂は元気に返事をした。

「うんッ！」

「お菓子！」

「ケーキ食べる」

「お、お前ら、本当に呑気だな……」

一人でやきもきしている皆守はバリバリと頭を搔いて、また大きな溜息を吐いた。

「甲太郎ちゃん、溜息吐くと幸せが逃げるんだよ～？」

暗視ゴーグルの光に目を細めつつ、皆守は怒鳴る。

「誰のせいだァッ！」

叫びは虚しく尾を引いて、闇の中に溶けて消えた。

甲高い声で、磐座のモノマネをして笑っているアンリは、さっきまでピーピー泣いていたとは思えないほど元気だ。チョコレート菓子をもしゃもしゃと食べている。

「みにゃ～、ふみよにわにゆいによ～」

アンリにはそう聞こえているらしい。彩はチーズケーキ味のチョコレートがかかったプレッツェルを食べながら、父の手元を覗きこんでいる。

葉佩が作っているのは燃焼剤だった。

「そんなもんでいいのか？」

尋ねる皆守に、葉佩は満足そうに頷く。

「うん。いいんじゃないかねエ？」

先日のてるてる坊主に続き、本日はアンリの涙と鼻水を拭ったポケットティッシュが大活躍だ。

「随分広い場所だよね～……」

アンリと一緒にチョコレート菓子を食べていた八千穂は、周囲をぐるりと見回して誰ともなく呟く。

誰かが喋らなければ、シン……と静まり返っている。アンリがいる限り、静けさなどありえないのだが。

「みにゃ～、ふみよにわにゆいによ～」

だだっ広い空間にアンリの高い声が響く。

「面白い～！」

「……ッたく、うるさいなァ……」

皆守は溜息を吐いてそっぽを向く。

胡坐をかいて座っていた皆守の膝の上に、ポスッとスナック菓子の袋が乗せられた。

「これ、甲太郎ちゃん用」

それを笑って差し出したのは葉佩である。

「ポテチの新製品だって。……インドカレー味。絶妙のスパイス感がかなりの高得点だって話だよ～？」

「……」

ガシッ、ガシッと皆守の両袖が掴まれた。左右には彩とアンリが座っている。

「開けて～！ 開けて～！ カレー味食べてみたい～！」

「カレー」

見つめられ、皆守は負けた。

「……あ～ッ！ わかったわかった！」

アンリは食べかけのチョコレート菓子を八千穂に手渡すと、皆守に向き直って封を開けるのを今か今かと待っている。

彩は彩で、残りの菓子がこぼれないように丁寧に蓋をし、羊リュックに詰めると皆守を見上げた。

「……」

皆守の心情や、いかばかりか。

「アンリくん、これ食べちゃってもいい？」

「うん。まだあるからいいよ～」

「やったァ」

八千穂の嬉しそうな声に、カレー味スナックが開けられる音がかぶさる。

「ほら、食え」

「いただきま～す！」

「食べる」

がらんとした広い広い青の至聖所。そこに響くのはお菓子の音。

「……」

突然来た。

「こいつらに何を言っても無駄だ」と唐突に悟った皆守は、自分もカレー味スナックの袋に手を突っ込んだのである。

「伊邪那岐さんは、自分の子供を殺しちゃったんだよ」

天之尾羽張が突き立った首の無い火之迦具土像を見上げる葉佩は、自分の隣で同じように像を見上げるアンリと彩に言う。

「西の至聖所の石碑で読んだねエ。火之迦具土さんは炎の神様で、産まれるときにお母さん――伊邪那美さんを焼き殺してしまったんだって。怒った伊邪那岐さんはね、愛する伊邪那美さんを殺してしまった子供を――火之迦具土さんの首を斬って、殺してしまったんだねエ」

「……」

アンリの手がおずおずと父のアサルトベストを掴んだ。

「……パパ……」

「何だい？」

「僕を産んだとき……ママは死にそうだったって聞いたよ。……パパは、もし僕がママを殺しちゃったら……僕のこと、殺しちゃった……？ 火之迦具土さんみたいに……」

目に涙をため、不安げに尋ねるアンリの髪を撫でつつ葉佩は言う。

「そんなことはしないよ。……ママは愛してるけれど、同じくらいアンリも、当然、彩も愛してる。……誰かを取ることは出来ない。もし、あの時、ママが死んでしまっただけで誰かを殺さなきゃならないとしたら……俺は――」

葉佩は口を閉じた。次の言葉を笑顔で飲み込み、ガラリと雰囲気を変えて明るく言う。

「さ、次に行こうか。東の扉が開いたみたいだから」

「父、あっちに敵、いない」

「そうかい？ よ～し、じゃあ、アンリと彩に偵察頼んじゃおうかなア～？」

「ホントッ?!」

「行く」

「彩、行こう！」

アンリは彩の手を握って東の至聖所の方へと走っていく。

「壁」

途中の壁を指差す彩に、葉佩は声をかけた。

「爆破しておくよ～。先に行っておいで～」

葉佩は皆守と八千穂を振り返る。2人とも、何とも妙な顔をしていた。

「ん？ どうしたの？」

アロマに火を点ける皆守は、「ハァ～」と大きな溜息を吐いた。

「子供の質問にはちゃんと答えろよ」

「九ちゃんにも答え辛いことがあるんだね」

「.....そりゃあねエ」

葉佩はハンドガンを抜いて手元でぐるりと回すと、ピタッとこめかみに当てる。

「あの時、自分を心底恨んだ。.....殺したいのは俺自身だったよ。十年も昔の話だ。.....昔の話になったねエ」

ハンドガンをホルスターに戻すと、葉佩は笑った。

「アンリと彩が待ってる。行こうか」

先を歩く葉佩の背に、八千穂は言った。

「九ちゃん、訊いていい？」

「ん、いいよ」

「それ、ホント？ でも、それって九ちゃんのせいじゃないんでしょ.....？」

「俺のせいなんだよ。.....遺跡から戻れなかった。テロリストに遺跡を包囲されて、殲滅するのに手間食っちゃってー」

「殲滅.....？」

訊き返した皆守に、葉佩は笑う。

「言葉のアヤだよ。言葉のアヤ。.....俺がそんなこと出来ると思う？」

んふふ、といつも通りの含み笑いで返し、彩が指摘した壁を爆破して中の宝を回収する。

「.....へ～、綺麗なものだねエ」

「それは、鈴？」

八千穂の問いに、葉佩は頷く。

「そうだねエ。三環鈴っていうものだよ。.....というか、奈良は吉野の天河神社、そこの御神体じゃない。明日香ちゃんたら、お前さんの出身県の話だよ。天河神社では五十鈴っていうけれどねエ」

八千穂は「ん～」と首を傾げる。

「天河神社って聞いたことあるなァ。鈴が御神体だっけ？ 弁天さんだった気もするんだけど」

「ああ、そうだねエ。市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)が主祭神だけれど、神仏分離でそういうことになったんだよねエ。だから、天河神社の正式名は大峰本宮天河大弁財天社。弁天さんとしても信仰されてる。元々密教と深い関わりがある神社だから、仏様も神様も仲良く祀られてるねエ」

三環鈴は、振るととてもいい音色がする、名前の通り三つの鈴が環状に繋がったもので、奈良県の天河神社では御神体の五十鈴がこれに当たる。五世紀から六世紀頃の遺跡からしか出土せず、故に出土件数が少ない。また馬具と一緒に出土することが多いため馬具装飾の一種なのではないかと言われているが、真偽のほどは定かではない。

「.....彩が喜びそうだなァ。後であげよっと」

ポケットにそれをしまい、葉佩は皆守と八千穂に少しだけ真面目な顔をして向き直った。

「.....俺がノロノロしている間に、あの人は生死の境を彷徨った。その時に側にいてあげられ

なかった自分を責めるなどと言われても無理な話だよ。……予定通りに俺が戻らなかった。それだけで、あの人は心を強く持つことが出来なかった。出産のリスクは健常者でも付き纏う。それなのに、あの人はそれほど体が強くない。心も疲れ果ててた。『死んだかもしれない』と思われるのは、仕事柄仕方ないことだと言えるけれど、でも、その中で子供を産むことになった彼女の苦しみはどんなものだろうね。……男には、十月十日も自分のお腹の中で子供を育てる女の人の苦しみや、辛さはわからないよ。だから、伊邪那岐は火之迦具土を殺せる。……アンリには言えなかったけれど……俺が同じことをしたかもしれない可能性は否定出来ないね。自殺するのと同じくらいの確率で」

絶句した皆守と八千穂を見て、葉佩は頭を掻くといつも通りのヘラヘラした笑い顔に戻った。「当時だよ。今はありえないからねエ。……アンリも彩も、大事な大事な俺と彼女の子供だもの」

「ようこそ、葉佩くん」

リカの微笑みにアンリは父の後ろに隠れた。昨日アンリが見たりカとはまるで別人。温かみのない笑顔を浮かべ、葉佩を見つめている。

「ここに来たということはア、『死』を恐れていないってことですよね？」

「『死』を恐れていない……ねエ……？」

葉佩はリカを見る。

「本気でそんな馬鹿なことを言ってるのかい、お前さん。……温厚な俺でも、それはちょっとねエ……？」

「では何でこんなところまで来たんですの？ ……おかしな人……」

「お前さんに人の温かみと『死』の恐怖を教えてあげるためだよ。……んふふふ」

葉佩はハンドガンを握る。

「俺はねエ……大事な人を守るために生きてるんだ。子供たち、甲太郎ちゃん、明日香ちゃん、鎌治ちゃん……俺の愛する人を守るためにね。……大事な人が目の前からいなくなる恐怖……お前さんは知っているはずなのにねエ……」

悲しそうな葉佩の声が響く。化人創世の間は異様な静けさに包まれていた。リカの小さな独り言だけが僅かに空気を震わせている。

「……そんなことは……そんなことは……そんなことは……」

幾度も繰り返される言葉を聞きながら、彩は俯いた。

「父……」

「わかってるよ。彩。……リカちゃんの傍に見えるんだろう？」

「いる。『リカを助けて』って」

「その人のためにも、俺は頑張らなきゃねエ」

ジャコンッ！ という音の後、葉佩は言った。

「甲太郎ちゃん、アンリと彩をよろしく。明日香ちゃん、行くよッ！」

「りょ〜かいッ！」

不意に顔を上げたりカの目が赤く輝いた。

「あなたの望む罰を差し上げますわーッ！」

「やってごらん！ 悪いコにはお仕置きだよッ！」

銃声が響き渡る。

「リカ姉ちゃんッ！ パパッ！ やめてよ〜ッ！」

アンリの声は銃声に掻き消され届かない。

「アンリッ！ そっち行くな！」

コアラごとアンリを小脇に抱え、彩の手を握る皆守は、じっと黙って父の姿を見つめる彩を見た。

「.....？ どうした、彩」

「.....『死』.....人.....みんな、なくなる.....」

「.....ああ」

「父、死なない？」

「平気だろ、あいつは。.....心配いらないさ」

「うん」

彩は頷く。

「父、好き。彩、父、大事」

「そうだな」

いつもと変わらぬはずの葉佩の薄ら笑いが、今日はやけに悲しそうに見えた。皆守はアンリを下ろして彩と手を繋がせると、アロマに火を点けてゆるりと燻らす。

「.....葉佩も、何を考えてるんだかわからんがな.....」

葉佩の浮かべる笑顔は、リカの人形のような笑顔にも似ていた。

お母様が亡くなって.....

お父様が嘘を吐いていたことを知って.....

すごく怖かった。

でも、オルゴールが、お母様の縁(よすが)がある.....

怖くない。怖くないもの。

「綺麗なオルゴール.....」

溜息のような八千穂の声。葉佩は「ふうッ」と額の汗を拭くとグルリと周囲を見回し、今一度

危険がないかどうか確認している。

「リカのお母様とお父様が、リカにくれたプレゼントですウ……。お母様はここにいる。リカの心の中にずっといる……。帰ってはきてくれないけれど……」

「……いる」

「何か、いるのか？」

皆守の問いに、彩は頷いた。

「リカお姉ちゃん、母……」

「お母様が?!」

「うん」

彩は座り込むリカのすぐ隣を見上げ、手を伸ばした。そして、何かを掴むような仕草をすると小さく頷いてリカを見る。

「……？」

「……リカ……忘れないで……あなたは……望むものを手に入れられる……大丈夫……何も、怖くはない……私はいつでも……あなたの側にいますよ……」

彩は再び視線を上へ向け、小さく何度か頷くと何かから手を放した。

「母、ある。ここ」

彩は自分の胸に手を当て、言う。アンリは彩の言った辺りを見つめていたが、何も見えないらしく首を傾げる。けれど、彼は彩の言うことを否定しているわけではないから、見えない自分が齒痒いだけなのだろう。

「いつも、ある」

「……そう、ですわね……心は、残りますものね……」

リカの視線が黙って話を聞いていた葉佩に向いた。

「葉佩くん……」

「どうしたの？」

リカは一瞬俯いたが、すぐに顔を上げて微笑んだ。

「あ、あのオ、外に出てから、お話しますウ……」

墓地。

キィキィと蝙蝠が飛びかう声がする。月だけが六人を見下ろしていた。

「葉佩くんは……リカの大切なものを取り戻してくれましたわ……」

「お役に立てて、何よりです」

ニッコリと笑う葉佩に、リカは少しだけ頬を染めて呟いた。

「……葉佩くんの傍は居心地が良さそうですの……これ、差し上げます」

彼女が差し出したのはプリクラだった。皆守は口を曲げて八千穂に呟く。

「始まるぞ……」

「……そだね」

その呟きが終わるか終わらないかのタイミングで、アンリと彩は小さな手帳をぬいぐるみリュックから取り出し、

「僕にもプリクラ！ 僕にも～！」

「彩も～……」

プリクラ帳を開いてリカに差し出す。

「あらまァ……」

リカは小さく笑うと、「少々お待ちくださいねエ～」と、まずは葉佩にプリクラと連絡先アドレスを教え、それから二人のプリクラ帳に一枚ずつプリクラを貼り、手を差し出した。

「アンリくん、彩くん。椎名リカですウ。リカのお友達になってくださいませね～」

「うん！」

「友達」

リカの小さな手を、アンリと彩の手がしっかりと握った。

閑話休題（九月三十日～十月三日）

「パパ〜ッ！」

「父ッ」

ドコッ！ ガンッ！

「だッ！」

ガラドガガシャ〜ン！

昼休み。

いつも通り保健室の子供に会いにきた葉佩は、唐突に抱きついてきたアンリと彩に押し倒され、運悪く開いていた掃除用具入れに頭から突っ込み、こちらに向かって倒れてきたモップとほうき、その他諸々の長物とともに床に倒れる。

「パパ〜?!」

「父、へ〜き……？」

「へ……平気……俺、じょ……丈夫だけが……取り柄だか……ら……」

自分を見下ろしている子供二人を見て、葉佩の顔が痛そうにしかめていた顔から驚きに満ちた顔に一瞬で変わった。

「な、なななな……何……何で……？」

「葉佩、起きろ。そして、掃除用具を片付けろ」

瑞麗の声に葉佩は飛び起きてガタガタと掃除用具を片付けると、バンッ！ と勢いよく戸を閉めるなり瑞麗を見た。

「ルイちゃん、こ、これは一体……？」

「椎名が『是非に』と置いていった。アンリと彩に」

「あ、ああ、リカちゃんがねエ……」

葉佩は制服の袖を掴んでいるアンリと彩を見た。

顔だけが出ている。後の部分はすっぽりと、猫のきぐるみに覆われていた。その上からお気に入りとなってしまったぬいぐるみリュックを背負っている。

猫がコアラと羊を背負っていた。

「……二人とも、すっかり気に入ったようだな……着込んで脱がない」

「あ、暑くないの？」

葉佩は子供の顔を覗き込む。

「へ〜きッ！」

「うん……」

それを聞いて、葉佩はニッコリ笑って二人を抱き締めると瑞麗に向き直る。

「イイコト、考えた。ぬいぐるみリュックをもらったときにも考えたことがあるんだけど、それを実行に移すときが来たみたいだねエ……んっふっふ」

「？」

「今日は、午後サボる。そうしよっと。……アンリ、彩。そのきぐるみとリュックをパパに貸し

ておくれ」

「着るの？」

すかさず聞いたアンリの言葉に瑞麗が噴き出して盛大に咳き込む。想像したらしい。

「着ない着ない。……ちょっとね、もっといいものに変身させてくるから」

「……返して」

「もちろん。……ルイちゃん、放課後迎えに来るからそれまでよろしく」

「りょ……了解した……くくくく……」

葉佩は瑞麗の姿に溜息を1つ吐くと、子供が脱いだきぐるみとリュックを抱えて保健室を出て行った。

「こんにちは～」

「うわ、来た……ッ」

《ロゼッタ協会》日本支部技術部兵器開発局――午後。

全世界の《協会》内でも指折りの技術力を持った日本支部の技術部兵器開発局の主任は、やってきた葉佩の姿を見て自分のデスクの下に隠れる。

「何、何々～。無理難題は吹っ掛けたりしないよ～？」

コンコンとデスクを叩いて葉佩は主任を呼ぶ。

「もしも～し」

「ア、アンタが来ると、ロクなことがないんだ！」

「そんなこと言わないでよ～」

「というか、学校はどうした?!」

「サボリ」

「……いいよなア。半年間も遊んで、今ものんびり仕事出来る奴は」

「遊んでないってば。……仕方ないでしょ。《秘宝》が目覚めるまでの時間があつたんだから」

「アンタの場合、それがただの言い訳じゃないから厄介なんだッ！」

「んふふふふふ～」

葉佩は持ってきた荷物を主任の机の上にドンと置いた。

「小耳に挟んでるよ～。性能のいい光学迷彩の開発に成功したんだって？ それから、かなりクリアな盗聴器と、発信機。H. A. N. Tに繋がられるんでしょ？ 当然受信出来るよねエ？」

「な、何でそれを」

「トップハンターなめないでよ？ んふふ」

気の毒な主任は、机の下から這い出ると、葉佩の持ってきた荷物の中味を見て「はァ？」と言って一瞬動きを止めた。

「……アンタが着るのか」

「お前さんまでそれを言うかい」

葉佩の頬が引きつる。

「うちの息子二人の実地訓練がてら探索してるんだけど、やっぱり小さいからね、心配なんだよ。……このきぐるみとリュックに光学迷彩つけて。あと、リュックに発信機と盗聴器つけてくれる？」

「……」

主任の顔が強張る。

「あ、あのな、アンタは簡単に言うが、そんなにホイホイつけられるようなモンじゃないんだッ！ 支部長に言いつけるぞ！」

「……ん～……」

葉佩はニッコリと笑う。

「どうぞ～」

「！」

「痛くも痒くもないもの。……今更、支部長ごとき怖くないし」

主任の顔が青くなる。

ニッコリ笑顔でゴリ押しするのは葉佩の常套手段だった。若いなりをしているが、実際は三十過ぎの脂の乗り切った《宝探し屋》。そして、《宝探し屋》の頂点に君臨する、五本の指に入るほどの実力者である。

本当に気の毒なことだが、支部の主任では歯が立たない。葉佩が聞く耳を持つはずもない。

「し、しかし！ 開発費やら何やらもあるんだ！ 子供の装備につけていい代物じゃない！」

「え～……」

葉佩はムスツとして主任の部屋の電話の受話器を取った。

「……仕方ないなァ……」

ピッとボタンを押す。

「あ、もしもし。葉佩です。そうそう、俺～。今名乗ってるのが葉佩なんだよ～。うん。久しぶり。……え～とね、悪いんだけど、本部の開発局長のところに繋いでくれる？ 直通あるでしょ。そうそう。ちょっとした用で」

主任はガタガタと震えながら葉佩を見つめていた。本部に電話するとは思っていなかったからだ。何を言い出すのかと内心逃げ出したい衝動に駆られるが、逃げたら葉佩がそれこそ何をすかわからない。ここはぐっと我慢して、ことの成り行きを見守ることにした。

当の葉佩はニコニコしながら電話が繋がるのを待っている。受話器の向こうから、日本語でない言葉が聞こえた。

「Hello!」

葉佩の口から流暢な英語が溢れ出す。

主任にも話の内容は伝わっている。

こともあろうに、開発局上層部は葉佩の要求に呆気なくOKを出したようだった。葉佩の口調と機嫌からそれは嫌でも伝わってくる。

人間諦めが肝心だ。

電話が終わる頃には、主任は力なくガックリと肩を落とした格好で、きぐるみとリュックをデスクの上に広げてどうしようか思案していた。

「対応早くて助かるねエ」

「上層部巻き込んでまで自分の子供の安全を確保するんだったら、初めから連れて行くな」道理だ。

葉佩は苦笑すると主任のデスクに手をついた。

「局長が言ってたよ。『実戦配備する前のテストケースを見るのにちょうどいい』って。もし、うちのコに何かあっても、それは《協会》が関知するところではないから覚悟しろってさ」

「……そうかいそうかい」

「自分で言うのもなんだけど、子供の安全とモルモットの恐怖と、両天秤にかける俺も悪い親だよねエ」

「ああ、まったくだな！」

主任にも子供がいるが、そんな危ない橋は渡れない。とてもではないが、自分の子供に新開発の装備を付けるなど考えたくもなかった。

「悪い親だ」

「……だから、主任に頼むんだよ」

葉佩の顔は笑っているが、その目は真剣だった。

「俺は、お前さんの腕を信用してる。……失敗作なんてこの世に出さない、そんなプライドに敬意を払ってるよ」

「よく言う……」

「んふふ。本当だよ。……《協会》でも最高水準を誇る日本支部の開発局。……そこを預かるお前さんの腕は確かだ」

「……おだてても、何も出ないぞ」

「知ってるよ。長い付き合いだもの」

葉佩は言う。

「子供を危険な目に合わせてるのはわかってる。……でもね、それでもね、あのコらの笑顔を見ていたいんだ。『パパみたいな《宝探し屋》になりたいんだ』って言ってくれる。……傍にいられる今、それを見ていたいというのが俺のエゴだとしてもね」

「ああ、そうだ。その通りだ。エゴだな」

「巻き込んでごめんねエ」

「ふん……。せいぜい後でしっかりとした報告書を上げてくれよ。アンタの書類作成能力はたいしたものだからな」

「了解ッ」

葉佩は心から嬉しそうに笑う。

「ありがとね」

珍しく寮で夕食を食べることになった。

なぜなら……

「葉佩……お前、こんな装備をこんなもんにつけてどうすんだ。え?!」

皆守甲太郎、かなり怒りゲージが上がっている。

早い話、例の猫のきぐるみにつけられた装備について一言言いたいらしい皆守が、マンションに帰ろうとした葉佩を押し留めたのだ。

皆守甲太郎特製カレーを食べながら、アンリと彩は父と皆守のやりとりを見つめている。子供の隣で、取手は2人の口の周りをティッシュで拭ったり、グラスに水を注いだりと世話を焼いていた。

「鎌治兄ちゃん、パパは何で怒られてるの？」

「あ、ああ～……それはね……」

知ってはいるが、それを言うべきなのかどうなのか。取手は頬を掻いた。

「ん～……何でだろうね？」

何となく誤魔化して子供を見る。

小さい二人。歳のわりに、あまりにも小さい。幼い。

「あ……」

彩の音がした。テーブルの上にカレーが落ちている。

「いいよ。拭くからね」

微笑む取手は、彩の前をティッシュで拭くと、キリキリと眉を吊り上げて怒っている皆守と、どこ吹く風の葉佩を見る。好対照だった。

「甲太郎ちゃん、口煩いよ～？」

「そうさせてるのはどこのどいつだ?!」

「だって、安全でしょ。校内だって問題なく動けるもの。んふふ」

「……いや、だから、それが問題なんだろうが。光学迷彩だかなんだか知らないが、ガキに最新鋭の装備を整えるお前の頭を疑う」

「んふふふふ……」

葉佩は笑っている。

彼がどんな思いでそれを整えたのか皆守に話す気はないし、子供にも言う気はない。

「とにかくね、明日からその装備で校内で遊べるよ～」

「わ～い！」

「……遊ぶ」

「ただ、授業中に教室に入ったりしたらいけないよ？」

「うんッ！」

「それだけ守ればいいから」

「……」

皆守は大きな溜息を吐いてカレーを口に運ぶ。

「九龍君」

ふいに取手が葉佩を呼んだ。

「何だい？」

「この装備って……まだ軍にも採用されてないようなものだよね？」

「そうだねエ。研究は盛んにされてるけれど、実戦配備されたとは聞かないねエ」

「そこまでの技術力があるのに、《ロゼッタ協会》はどこの国にも属さないんだよね？」

「うん」

葉佩は笑って頷いた。

「《ロゼッタ》の技術というものは、《宝探し屋》が持って帰ってきた《秘宝》から生み出された超技術(オーバーテクノロジー)。一歩間違えばとんでもない代物だから。それをどこかの国に渡すことは出来ないよ」

「《協会》がそれを悪用するってことはないのか？」

至極最もな疑問を口にする皆守に葉佩は笑う。

「さァねエ？ 少なくとも、そういう頭を持つてる人間は《秘宝の夜明け(レリックドーン)》に行くと思うけれどねエ」

「《秘宝の夜明け》？」

葉佩は頷いた。

「そう。……俺たち、《ロゼッタ協会》の敵だよ。……人類の敵とも言えるかもしれないよ？」

ガタン、と音がした。アンリのグラスがテーブルの上に転がる。

「あ〜！」

皿のカレーと服は無事だったが、テーブルの上は大洪水になっている。

「大変だ！」

「頼むぜ……」

取手と皆守がテーブルの上を拭いて食事を再開するまでの間に、先程の話は水と一緒にテーブルから消えていた。

学外の住処に戻り、子供と一緒に風呂に入って、二時間ほどはのんびり過ごす。

寮の部屋から持ってきたPS2をテレビに繋ぎ、アンリと彩はいつものようにシンプルな顔の猫に言葉を教えている。

「『チョコレートって何？』って言われた〜」

「……お菓子」

「そだね！」

「『チョコレート美味しい？』って訊かれてるよ？」

「美味しいッ」

アンリと彩の間に挟まれた葉佩は、首にタオルを引っ掛けたまま、グラスに氷を数個入れて日

本酒を飲んでる。原酒のためアルコール度数はかなり高いが、酔うことはない。

グラスの中でカラカラと氷が鳴る。アンリと彩はその音を聞いて揃って父を見上げた。

「どうしたの？」

「喉渴いた」

「……彩も」

「冷蔵庫に入ってるのは……確か……ヨーグルトとミルクとオレンジジュースだったかなァ？」

「わかったァ。……彩、何飲む？」

キッチンに行くために立ち上がったアンリに続いて、彩も立ち上がる。

「一緒行く」

「うんッ」

二人はペタペタと足音をさせながらキッチンに向かった。ガバッと冷蔵庫を開ける音。ゴソゴソと牛乳を出す音が重なる。

葉佩は嬉しそうに目を細め、二人の姿は見えないが、キッチンの方へと視線を向ける。

「んふふ。二人とも、自分で出来るようになって――」

「《調合》ッ！ 《調合》ッ！」

「はいッ?!」

グラスをテーブルに置き、葉佩は立ち上がってキッチンに向かう。

「二人とも何して――」

「《調合》《調合》ッ！！」

「……彩、ミルクとオレンジジュース」

「僕はオレンジジュースとヨーグルトを《調合》する～！」

何とも見た目は美味しそうなオレンジ・オ・レとオレンジヨーグルトドリンクが出来上がっている。

冷蔵庫にパックをしまおうと、棚からスプーンを取り出してグルグルとかき混ぜて満足そうに笑っていた。

「出来た～！」

「……出来た」

「……もしも～し。お二人さん？」

葉佩の声によろやくそこに父がいることに気づいたのか、アンリと彩はニコッと笑う。

「美味しそう！」

「……飲む？」

「……あ、いや、俺はいらぬ……よ。二人でお飲み？」

「は～い！」

「美味しそう……」

「とっかえっこしよ～」

「……うん」

アンリと彩は揃って再びリビングに戻ると、テレビの前にペタリと座る。そして、再開するゲ

ーム。

葉佩はさっきまでとは違う場所に腰を下ろすと、くつつくほどにぴったりと並んで座る二人の背中を見る。

「……」

まだまだ小さい。

二人はゲームをしながら作ったオレンジドリンクを口に運んで、アンリだけ一瞬動きを止めた。

「……どうしたの？ アンリ」

尋ねた葉佩をアンリは振り返った。

「何かね、ボロボロしてる……」

「ああ～、オレンジジュース入れたからタンパク質が固まったんだよ～。大丈夫だよ。飲めるから。……不味かったらお止め？」

「不味くないよ。それにもったいないし。……でも、《調合》面白いなア……」

それは《調合》じゃないでしょう、と言いたくなかったが止めた。

自分も似たようなことをしている。それに、ここで止めて好奇心の芽を摘むのもよろしくない。

「そうかい。また、《調合》してごらん。楽しいなら、いくらでも」

「うんッ！ 彩も一緒にやろうね！」

「……うん」

彩のオレンジヨーグルトはハズレでなかったのか、どこか幸せそうにグラスに口をつけている。

「……まったく、可愛いねエ……」

酒瓶からグラスに酒を注ぎ足し、葉佩は微笑んだ。

『送信者：葉佩九龍

受信者：皆守甲太郎

甲太郎ちゃん！ 大事件ですッ！

アンリと彩が熱出したんだよ～……！』

『送信者：皆守甲太郎

受信者：葉佩九龍

俺にどうしろと……

わかった。八千穂とそっちに行くから待ってる阿呆』

「パパ～……」

「……」

さすがの葉佩も風邪くらいはひくが、自分がかかると子供がかかるとでは訳が違う。

昨日の夜、頭も乾かさないうでゲームをしていたのが原因だったのかもしれないし、秋口といっても、まだ夜暑い日もある。布団を剥いで寝ていたのが原因かもしれない。

アンリと彩はセミダブルのベッドに二人で寝ているが、どちらも寝相はよろしくない。二人揃って布団を剥いで寝ていることはしばしばあった。

今朝は違っていたが。

二人でベッドの中でガタガタ震えていた。汗をかいて、真っ赤な顔をして、それを見た葉佩が青くなった。慌ててパジャマを着替えさせ、シーツを代え、再び二人をベッドに戻す。

「……パパ～……」

「……」

アンリの手が心細そうに葉佩の服の袖を掴む。

彩は黙ってじっと見つめてくる。

正直なところ、葉佩は子供らの様子に泣きたくなった。普段が普段なだけに、弱々しい子供らの様子に心が痛む。

「気持ち悪くない？ 何か食べられそう？ アンリ、彩、何か食べたいものある？」

「……プリン食べたい……」

「……彩も……」

『送信者：葉佩九龍

受信者：皆守甲太郎

甲太郎ちゃん、プリン買ってきて！

二個！ 至急！ 即行で！』

『送信者：皆守甲太郎

受信者：葉佩九龍

俺は便利屋じゃない！

……わかった。コンビニ寄ってく。

八千穂ならどれが美味しいプリンか知ってるだろ』

「アンリ、彩、甲太郎ちゃんと明日香ちゃんがプリン持って来てくれるからね」

「うん……」

「……」

ぐったりとしているアンリと彩の頬を一回ずつ撫でると、葉佩は皆守と八千穂を今か今かと待ちわびた。

彼らの昼食の支度もしなければならぬが、とりあえずは彩とアンリの側にしようと思った。「ど、どうしよう……ルイちゃんに来てもらうわけにいかないし……背負って学校に行くわけにいかないし……」

やはり、泣きたくなった。

自分一人では味わえない満ち足りた時間と、自分一人だった頃の気安さは完全に相反するもの。

「……どうしたらいいんだろう……？」

胸の中で自問自答を繰り返す。家族を持つということがいかに大変かを実感していた。

「パパ……」

「父……？」

「あ、ううん。何でもないよ～。何か飲むもの持ってきてあげるよ」

葉佩は子供よりもぐったりしたような顔をして、プリンとスポーツ飲料を手土産にしてやってきた皆守と八千穂を出迎えた。

「九ちゃん、大丈夫？」

「お前の方が具合悪そうな顔してるぞ」

「……ちょっと、心労が……」

そう言って小さく笑う。

「いきなりだったから、ビックリして……」

「……とにかく、上がるぞ」

「お邪魔しま～す」

皆守と八千穂は出されたスリッパ―八千穂はカエル、そして、皆守は専用スリッパを突っかけると子供部屋に入る。様々なぬいぐるみが大量に鎮座し、部屋の半分を占拠していた。母の手作りが各々数体だが半分以上は外で買って来た、もしくはキャッチャーのプライズである。

二人の気配を察知したのか、

「……？ あ、甲太郎兄ちゃん……明日香姉ちゃん……」

「……お兄ちゃん……お姉ちゃん……」

子供たちはもぞもぞとベッドから体を起こし、皆守と八千穂に手を伸ばす。

「ぎゅ～してほしいな……」

「……」

皆守は盛大な溜息を吐き、言う。

「直ったらな」

八千穂はコンビニ袋からプリンを出した。

「美味しい焼きプリン買ってきたよッ」

アンリと彩は寂しそうに顔を伏せる。そして、揃って涙ぐんだ。

「……九ちゃん」

八千穂に脇腹を小突かれ、葉佩は頷く。

「アンリ、彩、ぎゅ～してあげるから。二人を困らせないんだよ～」

心細いのはわかる。

アンリはボロボロと涙を零しながら父にしがみつくと。彩は黙って泣いていた。

「……子供ってのは大変なもんだな」

火の点いていないアロマを啜え、皆守は天井を見上げる。

彼にもこんな時期があったはずだが、そんなものは遠いどこかの話でしかない。

皆守と八千穂は葉佩に促されて子供部屋を出た。葉佩は子供たちが寝付くまで部屋に残ったが、それほどかからずに出てきた。子供たちも熱で疲れている。子供も大人も、風邪をひいたら眠るのが仕事だ。

「今日が日曜日でもよかったね～、九ちゃん……」

後ろ手に子供部屋のドアを閉めた葉佩に八千穂は言うが、葉佩の表情は冴えない。

「……」

「何凹んでんだよ……子供が風邪ひくのはお前のせいじゃない」

「でも……」

「誰だって熱くらい出すだろうが」

皆守は溜息混じりに倒れそうな葉佩を見つめる。彼の言葉は少々冷たく感じられ、それをたしなめるように八千穂は「皆守くん、そういうこと言っちゃダメだよ」と肩を竦めてから葉佩に視線を戻した。

「プリン食べられた？」

「それは大丈夫。美味しそうに食べてたよ。ありがとね」

「それならよかった。食べられるなら、すぐによくなるから」

微笑む八千穂に、葉佩も小さく微笑み返す。

昼食は皆守がカレー炒飯を作った。冷凍ご飯があってよかった、と皆守は思う。葉佩は何も手につかず完全に戦力外だ。八千穂はそれ以前の問題。皆守がやるしかない。

そのカレー炒飯を食べつつ、三人は話している。アンリと彩はプリンを食べた後で寝てしまったから、ようやく葉佩も一息吐けるかと思いきや、食欲すらどこかに忘れてしまったのかスプーンを持つ手が進まない。

「明日、もし熱が下がらなかつたら、ルイ先生に診てもらった方がいいかなア……」

「そうした方がいいよ」

頷く八千穂。彼女も子供たちを心から心配している。

「ここに呼ぶわけにいかないのか」

一番手っ取り早い方法を提示した皆守に葉佩は首を傾げる。

「.....それはちょっと.....マズいんだァ.....」

ぱくん、とようやく一口、口に入れる。詳しくは言わないが、皆守にも八千穂にも何らかの事情があることは理解出来た。

「そうなんだ」

深く訊かない八千穂に感謝しつつ、葉佩は二人に向かって心からの微笑みを浮かべた。

「.....明日香ちゃんと甲太郎ちゃんがいてくれて助かったよ〜.....」

人の優しさが身に染みる。

葉佩は皆守に視線を移した。

「美味しいねエ」

「当たり前だ。カレーが不味いわげがない」

「皆守クンってば、も〜.....」

ようやく声を出して笑った葉佩に、八千穂はホッとしたような溜息を吐き、皆守は呆れ果てたような溜息を吐いた。

十七時過ぎに八千穂と皆守が帰った後、葉佩は独りキッチンでアンリと彩が食べられそうなものを作っていた。

蒸した鶏ササミを細かくほぐしたものと三つ葉の入った粥である。

「.....」

やはり、心細い。

何かあるとは思えないが、何かがあった場合自分がどこに縋るべきかを考えている。《協会》がそんなときに当てになるのか、ならないのか――葉佩はならない方で見積もっている。

そうならないことを祈るしかない。

ぺた、ぺた、と素足で床を歩く音がした。振り向くと、彩が立っている。前に来ていたパジャマを着替えて手に持っていた。

「起きて、大丈夫？」

「へ〜き.....」

彩は頷くと、一端洗濯機のあるバスルームの方へと、ぺた、ぺた、と歩いていき、洗濯物を置いてキッチンに戻ってきた。

「彩、本当に平気？」

戻ってきた彩の顔を覗き込んで葉佩は訊く。

「彩は、平気」

頷いた彩は、まだ少し熱っぽい手を父の頬に当てる。

「……父、平気？」

「ん？ 何が？」

彩は一端口を閉じ、出来るだけ使わないようにしている母国語で葉佩に言った。

「……お父さんが無理をしているようにしか見えない。ごめんなさい……彩、迷惑ばかりかけて……」

ボロッと彩の目から涙が落ちた。ヒック、ヒック、と小さくしゃくり上げる。

「お父さんが、一番大変なのに……」

「彩……」

普段我慢している子だということは知っている。アンリと喧嘩をすれば、見えないところで泣いているのを知っている。そして、よく物事を見つめている。葉佩が不安そうにしているのを見て幼心が痛んだのかもしれない。

「俺は大丈夫」

葉佩は彩の語る言葉で答えを返す。

「心配いらないよ。……俺は大丈夫だから、自分の体を直すことだけ考えなさい。ここは日本だよ。彩が食べたいもの、必要なもの、大体のものは揃って――」

「……ないものがある」

「何？」

彩は葉佩の首にしがみついた。

「お父さんの代わりは、どこにもいない」

ギュッとしがみつくと力が強くなる。

「だから、無理しないで」

ぼろぼろとこぼれる涙が頬に触れる。

「大丈夫。無理してないよ。……お前さんたちを置いてどこかに行ったりしない。安心しなさい。ここにいるよ」

普段甘えない彩だからこそ、こんなときにこうして抱き締めてやりたいと思う。自分の血を引く子ではないけれど、愛情は変わることはない。

「お粥作ってるけれど、食べられそう？」

「食べる」

「そうかい。よかった。……よくなったら、美味しいチーズケーキを食べに行こうねエ。アンリにはチョコレートケーキかなア」

「うん」

「頑張って直そうね。……鎌治ちゃんも、リカちゃんも、ルイ先生も心配するからね」

「うん」

頷いた彩を今一度抱き締める。

細く小さい体は、まだやはり熱かった。

翌日。

熱も下がって案外ケロツとしている子供に安堵しつつ、「今日一日は一緒にいてやろう」と学校は休もうと思ったのだが。

「パパ、学校行かなきゃダメだよ」

「……ダメ」

子供から怒られた。

「僕たち、ちゃんと大人しくしてるよ。電子レンジの使い方も知ってるし、ちゃんにご飯の支度出来るもん」

「……あつためる」

「……えええええ～……本当に大丈夫？ ものすごく心配なんだけど……本当に平気？」

「へ～き！」

「へ～き」

そんなわけで、初めての留守番である。

「インタフォンで見て、知らない人だったら開けたらダメだよ」

と、葉佩は言うが、荷物は管理人が預かってくれることになっているし、部屋を訪れる者などいない——と、葉佩は思っていた。

ところが、世の中は思っている通りには進まないものである。

ピンポ～ン。

いつものようにぬいぐるみを抱えてゲームをしていた二人の耳に、インタフォンの音が聞こえた。

「誰だろう？」

二人揃って踏み台に乗り、アンリが受話器を取って彩と一緒にインタフォンの画面を覗く。

「あ、リョタ兄ちゃん！」

『俺様だ。開けろ。ケーキを買ってきたぞ』

「ケーキ。開ける」

リョター一太は二人の叔父に当たる。つまり、アンリの母の弟だ。《ロゼッタ協会》日本支部の内勤職員でもある。極めて横柄な態度だが、どうしてそうなってしまったのかは誰も知らない。

しばらくして、玄関のチャイムが鳴った。

「は～い！」

二人揃って玄関に出迎え行く。ガチャッとアンリが鍵を開けると、すかさずドアが開いた。亮太がケーキの箱をぶら下げてそこに立っている。葉佩と同じくらいの背がある亮太にとって、アンリと彩は随分と小さく映った。

「リョタ兄ちゃん、元気だった？」

「うむ。問題ない。……久しぶりだ」

ぬいぐるみを抱える二人の頭を順に撫で、亮太は靴を脱ぐと、その辺りに放置されていたアヒ

ルのスリッパを突っかけて部屋に上がる。

「冷蔵庫にケーキを入れたい」

「こっち」

彩は亮太を手招きした。亮太はアンリが差し出した手を握り、そのままキッチンに向かう。

「親父は？」

「パパ、学校に行ったよ」

「……二人で留守番か」

「うん。昨日ね、僕たちお熱出したんだ。朝になったら直っちゃったんだけどね、パパ、『学校休む』って言ったんだけど、『学校行かなきゃダメ』って言って、お留守番することになったんだよ」

「今一つ要領を得ないが……昨日、二人揃って熱を出し、それもあって親父が『学校を休む』と言ったが、お前たちが『学校へ行け』と言ったから家にいない、ということだな」

「うん」

わかっているのかいないのか、アンリはニコニコ笑って亮太を見上げる。

キッチンで冷蔵庫の中にケーキをしまい込もうとした亮太は愕然とした。

「……何だ、この冷蔵庫の中身は」

「え～？ 何々～？」

「変？」

三人で冷蔵庫を覗く。

「何も入っていないではないか。昼はどうしろと親父は言っていたのだ？」

「んと～……」

アンリは中段の冷凍庫を開けて冷凍ピラフの袋を取り出した。

「僕たちだけのときは火を使ったらダメだから、レンジでチンしてこれ食べる～」

「彩も」

亮太は冷蔵庫を閉め、「う～む……」と腕を組む。

「姉さんが見たら、嘆き悲しむ。……これは黙って見ておれん」

「どしたの～？」

「お兄ちゃん……？」

「昼は俺様を作る。……今から買い出しに行ってくる」

子供二人は顔を見合わせた。

「リョタ兄ちゃん、ご飯作れるの？」

「もちろんだ。俺様を誰だと思っている」

「亮太お兄ちゃん」

彩の声に、亮太は大きく頷く。

「そうだ。亮太様だ。作れないわけがない。」

そんなわけで亮太は買い出しに行き、子供二人と自分の昼食を作ることにした。

「野菜はちゃんと食べているのか？」

「うんッ」

「食べる」

「残さず食べているか」

「うんッ。もったいないもん！」

「もったいない……」

「うむ。……あの土地で育っていたら、好き嫌いも何もないだろうがな」

見事な包丁捌きで野菜が次々に切られていく。

「お昼は何？」

アンリの問いに、亮太は淡々と答えていく。

「病み上がりなのだろう？ 軟らかめに煮た野菜スープ。冷凍されていたご飯で卵おじやを作る。あとは……」

「お肉食べたい」

「肉」

「……わかった。胸肉を買ってきたから蒸し鶏を作る。向こうに行って遊んでいる。すぐに来る」

「は～い！」

「は～い」

何も知らない葉佩はというと、何とか四時限目まで学校にいたが、

「甲太郎ちゃん！ 明日香ちゃん！」

昼休みに入るなり、席を立った。

「何だよ……」

「どしたの？ 九ちゃん？」

「心配だから、帰る！」

「へ？」

「留守番くらい出来るだろうが。甘やかしすぎだぞ」

「だって、心配だもん！」

「一度言えればわかる」

ぷか～ッと漂うアロマの煙。皆守はそれを目で追いつつ、葉佩を見た。

「……俺も行く」

「え、えエ～ッ?!」

八千穂は目を真ん丸くして二人を見た。

「あ、あたしも！」

言われてみれば心配だ。心配に違いない。

授業をサボるのは気が引ける――と考えているのは八千穂のみだ――が、三人は揃って學園を

抜け出し、寮で私服に着替えると、一路、葉佩一家のマンションへと向かう。

「あ～……心配で心配で死ぬかもしれない……」

本当に死にそうな顔をした葉佩を横目に見つつ、私服姿の三人は駆け足でマンションへの道に行く。元々運動能力が高い三人だ。道行く人が振り返るほどのスピードで歩道を走り、とにかくまっすぐ部屋に戻る。

「あ～……心配だ……心配だ……アンリ泣いてないかな……彩は喧嘩してどっかに閉じこもってないかな……うううああああ……」

「心配するのは勝手だが、奇声を上げるな恥ずかしいッ！」

マンションの入り口で皆守に思い切り背中へ蹴りツッコミを入れられつつも、何とか部屋の前に辿り着いて鍵を開け――

「開いてる……」

ザーッと葉佩の顔色が悪くなった。

「ちょ……ッ……と、どう、どどどういいいうう……？」

「お、落ち着いて九ちゃん！」

玄関先でガタガタやっていれば、中にいる人間にも聞こえている。

玄関のドアが開き、ゴンッ！ と葉佩の額にドアが当たって派手な音を立てた。

「つあ～ッ！」

「九ちゃん！」

蹲る葉佩。八千穂は葉佩の側に屈み、真っ赤になっているであろう額の辺りを撫でつつ、「痛い痛い飛んでけ～ッ」と役に立たないおまじないを施している。

皆守は部屋から出てきた人間を見て、眉をひそめた。

「誰だ、お前……？」

「誰でも良からう」

皆守とは違う方向性の唯我独尊を貫く亮太は、足元の辺りで蹲る葉佩を見下ろし、底冷えのするような声で言い放つ。

「……何をしている、ボンクラ」

「……り、亮太こそ、何を……」

「子供の顔を見に来た。……悪いか。叔父が甥の心配をして何が悪い。……貴様が子供らを育てるといのがまだ腹立たしいというのに」

八千穂は葉佩と一緒に立ち上がり、亮太を見た。

「……アンリクンと彩クンの叔父さん？」

「そうだ。アンリの母の弟に当たる」

「……なら、葉佩の義理の弟か」

「違う！」

亮太の語調が強くなる。

「姉は、まだ独り身だ。たまたまアンリを産むことになった。そういうことだ」

「……」

皆守の顔に、「いけ好かない野郎だな……」と書かれているが、亮太は軽く無視して三人を見る。

「……ここで話しているのも何だ。入れ」

「……ここ、俺の……家……」

「入れ」

八千穂は慚然としている皆守と、困り果てた顔をしている葉佩を交互に見つめ、「お邪魔します」と亮太に頭を下げて家に上がる。

「あ、明日香姉ちゃん?! 甲太郎兄ちゃんにパパもいるッ?!」

「……学校は？」

アンリと彩に手を握られた八千穂は、ニッコリ笑って二人に言った。

「心配だから、来ちゃった！」

「学生は勉学が本分である。……サボタージュは感心しない」

亮太はキッチンに入ると、手際よくお茶の支度をして居間に戻ってきた。

「茶だ」

アンリは思ったよりも早く帰ってきた父にまわりついてる。彩はまだテーブルの上に残っていた自分の分の昼の残りをのんびりと食べ始めた。

「あ、お昼……どうしたの？」

今更ながら気づいた葉佩に、亮太は言う。

「俺様が作った。子供に冷凍物を食べさせるな」

「そ、そんなこと言ったって……」

「まァ、しょうがないさ。こいつも何だかんだと高校生をやってるわけだしな」

助け舟を出す皆守に、八千穂も頷く。

「まァね～……お昼はいつも保健室で適当に食べて済ませてるし」

ピクン、と亮太の眉が釣り上がった。

「何だと?! 貴様、弁当すら作れないのか?! だからボンクラだというんだ! そんなだから姉さんは――!」

「ま、待って、亮太待って! そこから先は……ッ」

子供の前では～ッ! とそこは口だけが動く。舌打ちした亮太に、皆守はアロマに火を点けつつ言った。

「お前はそう言うが、葉佩の手際の悪さを知らないのか? 飯を作らせると人の三倍かかる男だぞ。弁当なんて作らせたなら、一体どれだけかかることか」

「そんなことは知らん。朝、早く起きれば済むことだ。子供が大事なら、自分の睡眠時間を削ってでも弁当を作るべきだ」

カチャン、とスプーンを置く音が響いて、一瞬沈黙が訪れる。

「ご馳走様……」

彩は手を合わせて頭を下げると、亮太を見た。

「彩、どうした？」

「……父、頑張る。だから、彩、いい」

「……」

これには、さすがの亮太も口を閉じた。これ以上ガミガミ言って子供に嫌われるのは避けねばならない。大事な姉の子供に嫌われたら、それこそ亮太にとってかなりの痛手である。

「……わかった。彩がそう言うのなら、俺様も少しは考えよう」

「何で子供の言うことは聞くんだろうねエ……」

半分泣きが入っている葉佩の声に、八千穂は苦笑して「それだけ大事なんだよね～」と彩に向かってニッコリ笑う。彩は首を傾げた。

「ようするに、お前は嫌いだが、姉の子供は可愛ってことだろうが。簡潔な感情だろ」

自分にまわりつき始めたアンリの頭をクシャクシャと撫でつつ、皆守は欠伸混じりに溜息を吐いた。

「……が、根は深そうだなァ」

第三者を巻き込むなど言いたかったが、ここに来ると言ったのは自分だと思い返して、再び溜息を吐いていた。

「お料理上手だねエ……」

「当然だ。誰に向かって言っている。俺様に出来ないことなどない」

亮太は皿の上にアルミのプリン型を載せて、それを上下に振りながら頷く。

葉佩、皆守、八千穂は、昼食がまだだった。それを聞いた亮太は、

「仕方のない奴らめ」

と、三人分の昼食をパパッと作って出していた。八千穂の感嘆の元がそれである。

「……悔しいが、本当に美味しいな」

皆守の呟きに、亮太は「ふん」と鼻を鳴らした。

「《ロゼッタ》に所属する者として、当然の嗜みだ」

「……」

葉佩はヒクリ、と口の端をひくつかせつつ、亮太の作った食事を口に運ぶ。

「毒でも入ってるんじゃないかと思ってたよ」

「入れてほしかったのか」

「あ、いや、それは遠慮……する」

すべて真顔で返されると、心臓に悪いのは確かだった。

(やりかねないな)

(やりかねないよ)

八千穂と皆守は心の中で呟いた。

傍目にもわかるほど、葉佩と亮太の関係は最悪である。子供らとは問題ないのだが。

ぺしょん、と小さな音がすると、亮太はアルミのプリン型を外した。ぷるるんとした直径八セ

ンチほどの白いゼリーが皿の上で揺れている。

一端キッチンに戻った亮太の両手には、ミルクゼリーが一つずつ乗った皿がある。

「アンリ、彩、ミルクゼリーだ。デザートだぞ」

「わ～……！」

「美味しそう……」

彼は再びキッチンに戻ると、違う器を持って帰ってきた。

「このイチゴソースをかけて食べるといい。余ったイチゴはここに。コンデンスミルクをかけておいたから」

「うんッ！」

「……ミルクゼリー……」

アンリの目も、彩の目も、キラキラと輝いてゼリーを見つめている。

「今の時期にイチゴ……」

「高そうだな」

別の部分に感心する皆守と八千穂。だが、亮太としてはそのような問題は些細なもののようにだ。問題は別に存在していた。

「……こんなもので喜んでもらえるとは……三十分もかからずに出来るものなのだがな」

亮太はテーブルに肘をつき、出来る限り顔を上げずに食事に専念する子供の父親を見た。

「出来るものなのだがな！」

「二度言うな」

皆守は箸を置き、亮太に突っ込む。八千穂は「ん～」と首を傾げると、ティッシュで口の周りを拭いた。

「ご馳走様でした。……九ちゃん、頑張ってると思うんだけどな～……」

「足りない」

素気無い亮太の言葉。

「この男の一生懸命など当てになるものか。……姉さんがあんなことになって、何を頑張っているというのだ。病み上がりの子供を置き去りにして、どうしてフラフラしている？」

「あ、あう……」

葉佩の食事の手が止まる。今にも倒れそうなほどに顔色が悪い。

「おい、亮太」

皆守は冷めかけたコーヒーを啜りながら亮太を見る。亮太の眉間に皺が寄った。

「馴れ馴れしい……」

「しょうがないだろう。お前はそうとしか名乗らなかつただろうが」

「……」

「亮太、お前、何で子供が留守番してるって知ってたんだ？」

それは確かに疑問である。

「ここをどこだと思っているのだ？」

馬鹿にしきったような亮太の声。

「《ロゼッタ》の中なのだぞ？ 当然お前たちの素性も我々は知っている。皆守甲太郎に八千穂明日香。……出入りしている人間の情報は必ず諜報部に上がるのだ。俺様は諜報部に属している。知らんはずがないであろう。当然のように、今朝、ボンクラが子供を連れて家を出なかったことくらい知っているし、昨日からバタバタしていたのも当然知っている」

「……なるほどな」

「いい加減、アンリと彩を手放す気にはならんのか？ 俺様が育ててやる。もっといい教育だって受けさせられる」

舌打ちしてアロマに火を点ける皆守。八千穂はわずかに眉をしかめて葉佩を見る。その横では、アンリと彩がミルクゼリーにイチゴソースをかけて食べていた。

「美味しいね～、彩」

「うん」

その声に、葉佩は溜息を一つ吐き、箸を置いた。

「ご馳走様でした。……ねエ、亮太」

「……何だ」

「俺は、彼女から『二人をお願いします』って言われてる。……亮太が何を言おうと、俺は手放す気はないよ。……何度も言ってるけれど……彼女と、二人の意見を聞いて。それもせずに、俺から二人を取り上げようとしなくてくれるかい？」

「……」

「早ければ、今年中にこの遺跡は片が付く。……そうしたら、俺は彼女が落ち着くまで彼女の傍にいる。子供たちと一緒に。……《宝探し屋》を辞めてもいい。彼女がいいように生きられるなら、それが一番だから」

「《ロゼッタ》を辞めてどうする気だ？」

「ピアノで食べていくよ。……それだけの腕はあるつもり」

葉佩は立ち上がった。

「食器、片付けるね～」

キッチンに下がる葉佩の背を見て、亮太は溜息を吐いた。

「……《宝探し屋》を辞められるはずがないことを知っているくせに何を言うのだから……」

亮太の呟きに、八千穂は首を傾げる。

「何で？」

「何でもだ。……奴は《協会》でも五指に入るハンター。……簡単に我々が手放すはずもない。……手放せんのだ」

皆守は「ああ」と頭を搔いた。

「《秘宝》の声が聞こえるらしいからな。……アンリ、こぼしたぞ」

「うあ～」

「アンリ……ティッシュ」

「ありがと、彩」

八千穂は首を傾げると亮太に言った。

「……それなら、どうして九ちゃんのこと、そっとしておいてあげないの？」

「……」

言葉に詰まる亮太の代わりに、皆守は口の端にニヤリと笑いを浮かべて答えた。

「極度のシスコンで、姉を取られた腹いせに葉佩を突っついてるんだよ、こいつは」

「……ッ！ シ、シシシスコンではないッ！」

「当たり前なんだ」

真っ赤になる亮太に八千穂はニッコリと微笑む。

「いいんじゃないかなァ？ 大事にするのは。でも、九ちゃんのことも考えてあげなよ。大事なお姉さんの彼氏なんだから」

「それが許せないのだ！」

皆守が内心、「こいつ、からかうと面白い」と思っていたのは、ここだけの話。

閑話休題（十月四日～十月五日）

十月四日。

「ルイ先生、僕たち、ちゃんと消えてる？」

「……見事に消えたな。視覚的には問題ない。私には《氣》の流れでそこに君たちがいるのは見えるのだがね」

「じゃ、行ってきま～す！ 彩、手、繋いでこ～」

「……うん」

入り口の戸が、ガラッと開いて、ピシャッと閉められる。

「……光学迷彩ねエ……？」

瑞麗は小さく笑うとプカリとタバコの煙を吐き出しつつ、窓から見える空を見上げた。

「……いい天気だな……」

「……どうしたんだい？ 何かいるのかい？ ふふふふふふふ……そうか。僕には見えないんだけどね……」

アンリと彩は、不思議そうに一人の男子学生を見つめていた。授業時間中だというのに、その男子生徒は廊下をフラフラ歩いている。

肩を包むほど長いゆるゆるとしたウェーブがかかった髪に四角い眼鏡の彼は、何やら独り言を呟きながら手に石の標本を抱えてニヤニヤ笑っていた。

「……？」

アンリと彩は揃って首を傾げる。猫のきぐるみーもとい、《ロゼッタ協会》日本支部特製、光学迷彩を搭載した最新鋭兵装《猫スーツ》の尻尾がふりふりと動いていた。

「……そこにいるのかい？」

くるり、と男子生徒がアンリと彩を見る。

「！」

「！」

声もなく驚き、近づいてくる男子生徒を見つめる。

「……幽霊……ではないようだねエ？ 僕にも気配がわかるよ」

ふふふふふ、と男子生徒は笑う。

「大丈夫だよ。誰にも言わないから。それに、今の時間はここに人は来ないしね」

「……あ」

アンリが声を出そうとしたとき、彩に強く手を引かれた。「止めろ止めろ」と首を振っているが、アンリにも見えていないだろう。ただ、強く握られた手だけはわかる。

「大丈夫。子供がいるって、石が教えてくれたもの。ふふふ……」

「石が?!」

アンリの素っ頓狂な声が廊下に響いた。彩はふかふかの肉球がついた手を顔に当てて溜息を吐く。

「……ふふ。君たちは悪い子ではなさそうだね……おいで。珍しい石を見せてあげるよ～」

「僕は黒塚至人。3 - Dの生徒だよ」

「パパのお隣のクラスの人だねッ」

「パパ？」

「うん。パパ。ハバキクロウ」

「ああ～……わかった。石を愛する彼だねエ？」

遺跡研究部部室。

アンリと彩は光学迷彩を解いて机を挟んで黒塚の向かいに座っている。彼らの目の前には、小粒の石がコロコロと、ティッシュの上に載せられて置かれていた。

「パパのこと知ってるんだね」

「もちろんさ。……彼の石に対する情熱は計り知れないものがあるよ」

「……父、石好き……？」

彩は小さく呟いて首を傾げた。彼の中で、石と父が結びつかないらしい。

「そうさ。葉佩君は石が大好きなんだよ。ふふふふ」

黒塚は二人の目の前の小石を拾って口の中に放り込んだ。

「至人兄ちゃん、石食べた！」

ポカーンとアンリが黒塚を見つめる。彩も目を真ん丸にして黒塚を見た。当の黒塚は、ボリボリと音を立てつつ噛み砕き、「ふふふ」と笑う。

「これ、チョコレートなんだよ」

「チョコ！」

「……チョコ……？ ……石……」

「石の姿をしたチョコレートなんだ。……素敵だろう？」

「うんッ！ 面白いねッ！」

アンリは目を輝かせて食いつく。石の姿をしたチョコレートに反応したのか、それとも、チョコレート自体に反応したのかは謎であるが。彩はというと、一つ取り上げて未だ訝しげに眺めている。

「ふふふ。君たち、いいねエ……。よし、じゃあ面白い話を聞かせてあげよう。……」

「……じゃあ、何だ、本当に弁当作ったのか？」

感心したような、呆れたような皆守の声。

「うん。冷凍物は使ってないよ？ 前の日に、ちゃんと用意して、朝出来るだけ短い時間で作れるようにしたんだよ」

「九ちゃん、すごいねエ」

こちらは、心底感心したという八千穂の声。

「だって、あそこまで言われたらやるでしょう。……あのコたち取り上げられたら、俺、生きていけないもの」

昨日、亮太にベッコベコに凹まされた葉佩だが、今日は幾分回復したらしい。これから子供たちと一緒に保健室で昼食である。

保健室の戸を開け、葉佩はぐるりと中を見回した。幸い、寝ている生徒などはいないらしい。

「ルイちゃ〜ん。こんにちは〜」

暢気な声に瑞麗は振り向いて煙管を指に挟んだままの左手を上げる。

「やあ、葉佩」

「アンリと彩は？」

「行ったきり戻っていないぞ」

葉佩の顔が、笑顔のまま凍った。

「はい？」

「戻っていない。一時限目が始まってすぐに出て行って、それっきりだ」

葉佩は保健室の戸をピシャッと閉めると、ポケットからH. A. N. Tを取り出して、皆守と八千穂が覗き込む中プチプチと幾つかのボタンを押した。

「……」

「何か、ピカピカしてるね」

「……そういや、発信機付けたとか言ってたなァ」

「うん」

続いてポケットからイヤホンが出てきた。H. A. N. Tのイヤホン端子に差し込み、耳に押し込む。

「それは？」

八千穂の問いに、葉佩は苦笑した。

「盗聴器が拾った音声を聞くためのイヤホンです」

「そんなもんまで付いてんのか」

「心配性もここまで来ると病気だな……。カウンセリングを受けるか？」

「ちょっと、シ〜ッ！ 聞こえないから〜！」

葉佩は唇に指を当て、イヤホンの音に集中する。

「……？ ……？ ……はい？ うそッ！」

ギギギ〜ッと葉佩の顔が皆守を見た。

「何だよ」

「石研にいるみたい……」

「な!？」

「黒塚クンと一緒にいるの?!」

「う、うん〜……そうみたい……だねエ……」

葉佩はあいまいに頷くと、H. A. N. Tとイヤホンを片付けて溜息を一つ。

「迎えに行ってきます」

「行っておいで。……二人が帰ってきたら昼食にしよう」

瑞麗は微笑むと保健室を出て行く葉佩の背中にヒラヒラと手を振った。

「病気だな」

「病気だね」

「カウンセリングが必要だな」

残った三人は大きな溜息を吐いていた。

「たのも〜」

ガラリ、と開いた石研部室の戸。中にいた三人は揃ってそちらに視線を向けた。

「パパッ！ どうしてここがわかったの?!」

駆け寄るアンリを片手でギュッと抱きしめ、葉佩は笑う。

「パパは何でもわかるんです」

そして、黒塚を見た。

「至人ちゃん、ゴメンネ、うちの子がご迷惑おかけしました」

「ふふふ。構わないよ。……むしろ、楽しい話をたくさんしていたところさ。アンリ君と彩君は、なかなか見込みがありそうだよ。彩君は水晶、アンリ君はターコイズが好きだそうだからねエ。ふふふ」

「んふふ。そうかい。至人ちゃんの迷惑になっていないことがわかってよかった」

「葉佩君に負けず劣らず、石好きなんだねエ……？ 君の子供だからかな……？」

「んふふ」

黒塚は標本に頬を寄せ、キラリと眼鏡を光らせつつ微笑む。

「石が教えてくれるんだよ。君たちのことを。……聞こえるかい？」

「……聞こえるよ。いろいろな言葉がね」

葉佩は頷く。黒塚はガバッと顔を上げ、椅子から立ち上がると標本を頭の上に掲げて叫ぶ。

「素晴らしいよ！ 素晴らしいッ！ 君たちは石達の理解者になれる！」

「それは、光栄だねエ」

「ふふふ……こうして、また話がしたいものだねエ」

「そうだねエ。……じゃ、またね」

「ふふふ……ラララ、石は何でも知っている〜」

上機嫌で歌い出した黒塚に、「バイバ〜イ」とアンリと彩は手を振ってから光学迷彩をオンにすると、父の後について石研部室を後にした。

「ただいま〜！」

「あ、アンチャン、彩チャン、おかえりーって、あれ？」

八千穂は半開きになった保健室の戸口を見つめた。アンリの声がしたはずなのに、そこには誰もいない。戸が独りで閉まると、アンリと彩が姿を現した。

「ただいま……」

彩はペコリと頭を下げる。八千穂は「ああ〜！　すご〜い！」とアンリと彩をまとめて抱きしめる。

「カワイイッ！　すごいッ！　フカフカッ！」

ぎゅうぎゅう抱きしめる八千穂に、「きゃ〜きゃ〜」と嬉しそうな悲鳴を上げるアンリと、困ったような顔をする彩は対照的だ。皆守はそれを見ながら溜息を吐く。

「おい、八千穂、後でもいいだろ。飯にしようぜ」

瑞麗は横目で皆守を見つつ、八千穂に向かって微笑んだ。

「皆守が腹を減らして凶暴化したら八千穂、君のせいだぞ？」

キラ〜ン！　と八千穂の目が光る。

「皆守クンが凶暴化?!　見てみたいッ！」

「っていうか、ありえないっぽいよねエ……甲太郎ちゃんが凶暴化するなんて……」

苦笑する葉佩は、保健室に預けてあった弁当を取り出す。

「はい、アンリ、彩。お弁当だよ〜」

「わ〜い！　お腹空いた〜！」

「お腹空いた」

猫耳と尻尾がピコピコ動く。「キャ〜ッ！　カワイ〜ッ！」と八千穂は再び黄色い声を上げ、ピコピコ動くアンリの尻尾を掴んで笑っている。

「八千穂、先に食うぞ」

「あ、は〜い！」

いつもどおりの昼食風景。

アンリは瑞麗のから揚げ弁当のから揚げと自分のから揚げを一つ交換した。

それを微笑ましそうに眺めていた葉佩の弁当箱からから揚げが一つ八千穂の口の中に消えた事実は、彩と皆守と瑞麗だけが知っていることである。

午後。

屋上のドアの開閉音がした。そうっと、極力音を立てないように注意を払う、静かな音。

皆守は薄らと片目を開けた。

十月に入ったとはいえ、日向はまだ暑い。風通しがいい日陰のコンクリートに背を預け、うつらうつらしていたのだが、音には過敏に反応した。

こそこそする気配がある。

人の姿こそないが、陽の当たる屋上のコンクリートに、猫耳のついたモフツとした影が1つ現れていた。

「……光学迷彩って言っても、見えなくなるだけでそこにいるわけだしなァ……影くらい出来るか……」

はァ、と一つ溜息を吐いて再び目を閉じようと思ったが、その気配が猛ダッシュで自分に近付いてきたのを感じて咄嗟に避ける。ゴツンッ！ という音がした。

「イダッ！」

聞き覚えるあるアンリの声。一瞬間が開いて、グジュッと泣きそうな音を立てた。

「あ」

「……グスッ……いだいよォ……うエーーン……」

皆守が避けたため、コンクリートの壁にしたたか頭を打ち付けたらしい。

「……アンリ……？」

「いだいよォ……痛いィ……ヒック……ヒック……」

やはり、泣き出した。アンリは基本的に我慢が足りない。彩は滅多やたらに泣くことはないのだが。

「迷彩を解けよ。どこにいるかわかりゃしない」

アンリは言われたとおり、《猫スーツ》の首にくっついている鈴をいじると迷彩を解いた。

「……グスッ……グスッ……」

小さくしゃくりあげている。額と鼻の頭を僅かに擦りむいていた。

「お前、どういう勢いで突っ込んだんだよ……」

「だ……だっ……て……ヒック……こう、たろ、兄ちゃんが、受け止めてくれるって……思……ッ……思ったんだ、もん……ヒック……」

血が出ていなのは幸いだった。

「……葉佩が何て言うか……」

――アンリがァ〜ッ！ ああああああアンリィ〜ッ！

顔から仕草から叫びまで、頭の中ですべて再生出来た。

「たんこぶとか、出来てないか？」

「……わかんない……」

白い肌が赤く擦れているのは痛々しく見える。

「……保健室行くか？」

「……」

無言で頷くアンリ。皆守は授業時間中だということにもかかわらず、葉佩のH. A. N. Tにメールを入れた。あの男は授業時間中には無音、無振動設定にしている。上手くやるだろう。どうせクロスワードしかしていまい。

「そういや……」

立ち上がった皆守はアンリを見下ろした。

「彩はどこ行った？」

「至人、兄ちゃん、ここに……ここに来る途中で、会った……から……」

「……そうか。なら、大丈夫だな。黒塚ならまア……いいか」

再び迷彩をオンにしたアンリに手を差し出す。

「行くぞ」

「うん」

フカッとした肉球付きの感触に、思わず苦笑がこぼれた。

「君は、熱心に僕の話の聞くんだねエ？」

「楽しい」

「そうかい。見込みがあるよ。素晴らしいね」

黒塚は彩の前にいくつもの石を並べてあれこれと説明しては自己解釈から学説までを彩に披露する。彩はその一つ一つに頷きながら、時に言葉の意味を尋ねながら聞いていく。

「……石の声、聞こえそうかい？」

「わからない」

彩は素直に答える。

「でも、父、言う。『聞こえないと思うと、聞こえない。聞こえると思えば、聞こえる』」

「……葉佩君はいいことを言うね」

低く笑った黒塚は彩を見る。

「そうさ。聞こえない声はない。石の声もそうだよ。皆、石は喋らないと思っている。だから耳を傾けないんだよね。聞こえるはずの声も聞こえなくなってしまうんだ」

「そう」

彩はコクリと頷いて、目の前のチョコレートの一つ口の中に放り込んだ。

「彩君、君はわかってる。その通りだね。……葉佩君はいい子供を持ったと思うよ」

「父、すごい」

「そうかい。……葉佩君は、確かに初めて会ったときから素晴らしいと思っていたんだ。石を拾い、ザラザラした石を見ると舐めたくなくなると言い、僕の話のちゃんと聞いてくれる」

「……父、聞こえる」

「そうだね。……いろいろと訳アリの人みたいだねエ」

授業時間中で人気がないはずの廊下に、足音が響いた。

「おや、誰だろうね？」

足音の主はドアの前で足を止める。

「甲太郎お兄ちゃん……」

「おや、わかるのかい？」

彩は頷く。

「邪魔するぞ。……彩、保健室に戻れ」

「？」

「何かあったのかい？」

「……ああ、ちょっとな。石の話はまた今度にしてくれ」

「わかったよ。……ふふふ。彩君、またね」

「うん。ばいばい。ありがとう」

彩は皆守の後について石研を後にした。皆守は溜息混じりに彩に言った。

「彩、アンリがなァ」

「……うん」

「擦り剥いただけなんだが……」

「うん」

「葉佩が大騒ぎだ」

「父……心配」

「心配も行き過ぎだ」

大きな溜息を吐く皆守に彩は言う。

「父、優しい。……彩、見てくれる」

彩の声は、幼いわりにどこか達観しているように聞こえる声だった。なぜか酷く不憫になる。何があって彩はこんな考え方を持つにいたったのか知らないが、そうなってしまった原因を今知ろうという気にはなれなかった。

その代わりに、言葉を探した。

「……お前の親父のバディは、みんなお前とアンリを見てる」

やや、間があった。

「お兄ちゃんも？」

「ああ。……当然だ」

彩の安堵に似た溜息が聞こえた。

それ以上は何も言わず、彩は皆守の制服の袖を握る。

「……父と、仲良くして」

「出来るだけな」

グスグスと鼻を鳴らしているアンリを、心配そうに葉佩は見つめていた――と、いえば、まだ聞こえはいいが、実際は葉佩が泣きそうな顔をしている。

「アンリ可哀想にねエエエ……」

「パパ～……」

ひしッと抱き合う親子に、瑞麗は溜息を吐いて眉間を揉んだ。

「ただ少し擦りむいただけだろうに。……消毒のたびにピーピー泣かれたのでは……」

「痛いんだから仕方ないでしょ、ルイちゃんたらッ！」

葉佩は言う。

「消毒は染みるんですッ」

はァ、という瑞麗の二度目の溜息。

ガラリ、と保健室の戸が開いたのはそのときである。

「彩を回収してきたぞ」

「父……お勉強……」

「アンリが頭と鼻を擦り剥いたんだよ、彩ッ！ 授業どころじゃないでしょうッ」

「……遺跡、いつも……」

「あ」

葉佩はポン、と手を打った。

「そういえば、そうだねエ……」

「バカ親……！」

瑞麗はデスクの上に立てかけてあったクリップボードを手にすると、スパンッ、と葉佩の頭を叩いていた。『思わず』なのか、『そうしたかった』のかは謎だ。

「てッ……！ ルイちゃんヒドいッ！」

「酷くない！ ……子供は怪我をするのが仕事みたいなものだぞ！ そのたびにピーピー子供以上に騒ぐ親がいてたまるか、馬鹿者！」

瑞麗のいうことは至極もつともだった。皆守は大きく頷く。

「葉佩、お前、もう少し大人気を身につけたらどうだ？」

「お、大人だよ、俺は」

皆守と瑞麗の視線が突き刺さる。絶対零度に近い視線だった。

「……」

「……」

「父、心配する。……彩、嬉しい」

モフモフッとした彩が葉佩にギュッと抱きついた。

「僕も」

アンリもギュッと抱きつく。

「この父親だから、子供がこうなったのだろうか……」

「俺に訊くな、カウンセラー。そりゃ、アンタの仕事だ」

どことなく遠い目をしつつ、瑞麗と皆守は親子三人を見つめていた。

夜。

彩の隣でアンリはスヤスヤと眠っていた。彩は珍しくアンリよりも遅くまで起きている。葉佩はベッドに浅く腰掛けて、彩の顔を覗き込んだ。

「彩は、石研にいたの？」

「うん」

「石研は楽しい？」

「至人お兄ちゃんの話、楽しい」

「そうかい」

「父の話、した」

「俺の？」

「うん」

「至人お兄ちゃん、嬉しそう」

「……どんな話をしたの？ ……使いやすい言葉で構わないよ」

彩は頷くと、口を開いた。

「お父さんの言葉を、至人お兄ちゃんに教えてあげた。『聞こえると思えば、聞こえる。聞こえないと思えば、聞こえない』……みんなそうだって。至人お兄ちゃんが頷いてた。『石は話さないと思っているから、誰も声に耳を傾けないんだ』って……」

葉佩は彩の頭を撫でた。

「そうだよ。すべてのものには声がある。それを聞いてあげればいい。初めはその声が聞こえないかもしれないけれど、だんだんと聞こえるようになるんだよ。そうやって、小さな声に耳を傾けられるようになると、優しくなれるよ。いろんなものが見えるようになる」

「……お父さんは見える？」

「まだまだ、だね」

微笑む葉佩。彩は小さく欠伸をして目を擦った。

「おねむだね。……おやすみ、彩」

「おやすみなさい」

葉佩は彩の頬に口付けを落とし、部屋の電気を消した。

リビングに戻ると小さな音でテレビをつけ、ニュースにチャンネルを合わせる。

「……」

ニュースを見ながら、呟いていた。

「見えないから……お前さんたちのママを幸せに出来ないんだよ……」

溜息一つ。

テーブルの上に出しっ放しになっていたグラスに酒を注ぎ、飲むでもなくその中をじっと覗き込んでいた。

十月五日。保健室。

「今日は、テレビで面白いのやるんだってパパが言ってたんだ～」

「ほう？」

「『トワイライトファイル』のトクバンだって言ってた」

「……『トワイライトファイル』と言えば、あの根も葉もないようなことをいろいろと垂れ流している番組か」

「いつも見てるんだよ。パパ、あのテレビ好きなんだって」

「そんなふうには見えないが……」

「……いつも見てる」

《猫スーツ》の耳と尻尾がピコピコ動いている。どうもそれが気になって仕方がないが、瑞麗は「ふむ」と一度頷いて二人を見た。

「今日はどうする？ どこか行く場所があるのか？」

「今日はね～、今まで行ったことがないところに探索しに行くんだッ」

アンリの目がキラッと光る。

「学校の、あっちの方」

アンリの指差した先は廃屋街だった。瑞麗はあからさまに渋い顔をする。

「なぜ？ 向こうは危険だぞ。打ち捨てられた建物の老朽化は半端ではない。いつ崩れてもおかしくはない場所だ。それに、素行のよくない輩が屯している場所でもある」

「でも、石を探しに行くんだッ」

「……至人お兄ちゃん、石、持ってく」

「勧められない。葉佩に言う」

「やだーッ！ 石、探しに行くの！」

「……行ってきます」

彩とアンリは手に手をとって保健室の戸を開けると、素早く光学迷彩をオンにして出て行った。

「待てッ！」

パタパタパタパタ……ッ。

足音と《氣》の気配だけがそこにあった。

チカチカッ、チカチカッ……

H. A. N. Tがメールの着信を知らせる。

「……？」

葉佩はクロスワードを解く手を止め、H. A. N. Tを開ける。左隣の席の八千穂と右隣の半分寝ていたはずの皆守が、葉佩の手元を覗いていた。

右手から左手にシャープペンシルを持ち変えると、右手でH. A. N. Tを操作しながら左手でマス目を埋めていく。

「器用だなァ……」

変なところで感心する八千穂に微笑みかけ、葉佩は手元のH. A. N. Tに視線を戻し――硬直した。

「何だって？」

訊いてきた皆守にH. A. N. Tを手渡す。

「……瑞麗からか」

呟いて本文を読んだ皆守の眉間に皺が寄る。

「……何だってそんなところに……」

「何々？」

訊いてきた八千穂に葉佩は、

「廃屋街に、二人して出かけたんだって……」

小声でそう告げて、子供たちについている追跡用発信機の信号の位置を確認して渋い顔をすると、やにわに席を立った。

「先生、具合が悪いので保健室に行きます」

「俺も～」

だるそうな皆守の声と、椅子を引く音が重なる。

「あ、あたし、心配なので二人についていきますッ」

八千穂も立ち上がると、三人で廊下に出た。教壇から何事かを言う教師の声など聞こえていない。

「後で、可愛い人からお説教だねェ……」

「テメェの息子のせいだ」

「九ちゃん、土曜日、西口のカレー屋さんのディナーはオゴリね」

「……はいはい」

苦笑しつつ頷いた葉佩は二人を振り返った。

「先行ってる」

カラカラッと廊下のサッシを開けると、三階からヒラリと飛び降りる。皆守と八千穂は廊下を走った。合流場所は一階保健室である。

隣の校舎の三階から降ってきた葉佩を見て、瑞麗は溜息を吐いた。保健室にいた派手な男が口元を歪める。

「元気のいい生徒がいるねェ」

「……あいつが《ロゼッタ》の《宝探し屋》だ」

「へ～？　じゃあ、あいつがさっき廃屋街に走ってったガキンちょの親父か。……確かに若いな～」

「若返りの《秘宝》を飲んだのだからな」

「なるほどねェ～」

男は深く頷き、瑞麗を見た。

「……あいつはルイちゃんに用なんだろ？　俺は消えるぞ」

「ああ」

男が保健室を堂々と出て行くのと同時に、瑞麗は葉佩のために保健室の窓を開けた。

「来たか」

「うん」

窓から中に入ると、葉佩は瑞麗に訊く。

「アンリと彩、廃屋街みたいだね。確認した」

「ああ」

ガラッと音を立てて戸が開いた。間髪入れず、八千穂と皆守が雪崩れ込む。

「まったくお前たちは騒々しいな」

「何で止めなかったんだ？」

入ってきた途端の皆守の疑問に瑞麗は「仕方ないだろう」と柳眉を寄せた。

「止められなかった。素早いな。あっという間に消えてしまった」

「……九ちゃんの子供だからねエ……うーん……足は速いよね」

「行ってみるよ。何かあった後じゃ……話にならないし……」

無理矢理微笑を浮かべようとして葉佩は失敗した。酷く歪んだ笑顔になる。それを見た瑞麗は

、

「早く行け。……質が悪い者も出入りしている場所だ。気を付けろよ」

葉佩の背を叩いて送り出した。

「人の親というものの心労はいかほどのものか。……弟にかける心配とは、また少し違うのだろうな」

廃屋街。

崩れ落ちそうな、打ち捨てられて久しい家屋が立ち並ぶ一画。

基本的に立ち入り禁止になっている。墓地に入れば一発退学だが、ここはそれほど厳しく取り締まられていないらしい。そのせいか、性質の悪い生徒のたまり場となっていると言えた。

窓は破られ、そこから僅かに覗く室内は荒れ果て、落書きだらけ。

「……《生徒会》は、まずはここから手を入れるべきだよ」

自分の息子をこの廃墟に飲み込まれた葉佩は、珍しくそう吐き捨てた。

「あたし、ここって初めて来るなア……」

「女は近付かないに越したことはないだろ」

「そうだねエ、それは言えると思うよ？ 見てごらん」

葉佩は真っ直ぐ前を指差す。

「早速お出迎えだよ」

そこには、数人の男子生徒が手に手に得物を持って葉佩たちを出迎えた。

「ここ、どの辺りなんだろう？」

「.....わからない」

アンリと彩は、光学迷彩をオンにしたまま、手を繋いで廃屋街を歩いていた。

お化け屋敷が立ち並ぶような街並み。一部焦げたような家屋もある。

「.....怖いね」

「石、探す」

「うん。.....そだね.....」

時折、バラバラと何かが落ちるような音、風にギシギシと何かが軋んだ。

「.....怖いよォ.....」

アンリは呟く。初めの勢いはない。

「まだ暗い、ない」

「でも、何か怖いよ.....？」

「.....いる。でも、ニコニコ笑って見てるだけ。優しそう」

彩は首を傾げて何もない方を見ている。彩が言う優しそうな人がいるのだろうか。

「.....アンリ」

「ん？」

半べそのアンリが振り返った。彩は小さく何かを頷きながらアンリにもわかる故郷の言葉を使った。

「お父さんたちが来てるって。.....喧嘩してる.....？」

「パパがッ?!」

「そう.....」

彩はふと足元に転がる石を拾った。

「これ、持って帰る。父、探す」

「うんッ！」

「八千穂ッ！」

「キャッ！」

八千穂のセーラー服の襟を掴み、皆守は後ろに引いた。八千穂の目の前に鉄パイプが振り下ろされる。

「葉佩、やっちまえ！」

「明日香ちゃんに手を出したわけだしねエ」

鉄パイプを振り下ろした生徒の手首を掴んだ葉佩の目が光ったように見えた。

「殺さない程度に、ね？」

んふふ、と小さく笑い声が聞こえたと思った瞬間、鉄パイプの生徒の体が地面に叩きつけられていた。

「腕は折ってない。いろいろと問題になるでしょう？」

人畜無害そうな笑顔が逆に恐ろしかった。

皆守は自分に襲いかかってきた生徒の手に光るナイフを蹴りで弾き飛ばし、軸足を変えて上段蹴りで沈めた。その間も葉佩は殴りかかってきた生徒を一人地面に叩きつけている。自分からは決して手を出さず、すべてカウンターだ。

「チッ……何なんだ、こいつらは……ッ！」

「……このコ等の一連の動きを統率する何かがあるみたいだけれど、姿が見えないのが嫌な感じだねエ」

「？ 操られてるとでも？」

「んふふ。……勘だけどねエ」

笑った葉佩の側に影が二つ、駆け足で寄ってきた。

「パパ～ッ！」

「父、平気？」

声だけがする。八千穂は恐る恐る手を伸ばし、頭があるらしき位置に手を置いた。ポフツとした感触。

「アンチャンと彩ちゃんだね」

「うんッ」

「……明日香お姉ちゃん、平気？」

「あたしは平気」

八千穂は頷いて微笑んだが、すぐに眉を吊り上げた。

「でも、キミたちが心配だったんだよッ！」

「あ……」

「う……」

アンリと彩は口を閉じる。不意に迷彩が解けた。

「あれ？」

「……？」

「電源切れたかなァ」

暢気な葉佩の声が辺りに響く。

「葉佩ッ」

皆守の手が葉佩の胸倉を掴んで思い切り自分の方へ引く。葉佩の頭があった位置をナイフが横薙ぎに通り過ぎた。

「……」

生徒は無言。手短かにいたアンリを捕まえると首に腕を回しナイフを突きつける。

「アンリッ」

「パ、パパ……ッ」

「アンリ！」

「アンチャン！」

皆守は彩の手を引いて八千穂に預けると、アンリを人質に取った生徒の前へ出て葉佩の隣に並んだ。

「葉佩、どうすんだ。最悪の事態だぞ、こりゃあ……」

「……」

葉佩も無言。けれど、葉佩は行動が伴っていた。

どこから出したのか五センチほどの刃のある細い短剣を投げ、生徒の腕に突き立てる。

声もなく怯む生徒からアンリを助け出すと、葉佩は懐からハンドガンを取り出して生徒の眉間にヒタッと合わせた。

「子供に手を出すな」

そのときだった。生徒が白目を剥いてその場に倒れ込む。

「う、撃ってないのにねエ……」

銃を懐にしまい、葉佩は困ったように皆守と八千穂を振り返った。

「撃ってないよ……？」

「誰も殺したとは言ってないだろうが。……とりあえず保健室に戻るぞ」

「……九チャン、刺さってるアレはどうするの？」

「あ、回収しなきゃ」

生徒の腕から抜き取り、ポケットティッシュで丁寧に血を拭くと、再びどこかに消すようにしまい込んだ。

「パパ……大丈夫？」

「俺は平気。アンリは痛かったりしない？」

「うん」

「彩も、怪我とかない？」

「うん」

葉佩は「よかった」と頷いて二人の手を握る。

「……保健室に戻ろうね」

暖かい父の手に感触。けれど、少しだけ握る力が強くなったのに気付いて、子供たちは揃って父を見上げた。

「パパ、ちょっとだけ怒ってるよ？」

子供の手を引いて先を歩いていく葉佩の後姿を見つつ、皆守はアロマに火を点けて八千穂に呟いた。

「……あいつ、怒るんだなァ」

「そだね～……」

叩きのめした生徒たちを一度振り返り、二人も保健室に向かって歩き出した。

保健室に戻ろうと思ったが、ちょうど体育で怪我をした生徒と具合が悪くなったという生徒がブッキングして入ることが出来なかったため、五人は屋上へと向かった。電池切れした《猫スーツ》を抱えていても、元々葉佩は演劇部で、今や天香のトップスタァ。小道具にしか見えない。

子供二人を悠々と抱え、葉佩は屋上に出た。

「……いい天気だ」

呟いてアロマに火を点ける皆守。八千穂も大きく背伸びをして「はぁ〜」と深呼吸する。アンリと彩は父の腕から離れると神妙な顔をして父を見上げた。

「……パパ……？ 怒ってるの……？」

「……」

「怒ってるに決まってるでしょう」

葉佩は涼しい日陰に子供の手を引いて移動した。皆守と八千穂もそれに続く。

「危ないことをして……どれだけ心配したかわかってる？」

「……う……」

「ごめんなさい……」

腰を下ろした葉佩は、自分の正面にちょこんと正座して座ったアンリと彩を見た。

「甲太郎ちゃんも明日香ちゃんも心配して、その上危ない目にも遭ったんだよ？ どうして心配してるかわかる？」

アンリはキュッと唇を噛んで、ぽろぽろと涙を落とし始めた。いつも何をしても怒らない父が怒っているのに驚いたのもあったし、怒られるようなことをしたのだという自分に驚いたのかもしれない。

彩は俯いて呟いた。

「……危ないところ、行った……？」

「それもあります」

葉佩は溜息を一つ吐いて、ポケットからティッシュを取り出してアンリの鼻水を拭いた。

「アンリ、彩。……危ないことをして怒るのは何でだと思う？ アンリも彩も大事だからだよ。……至人ちゃんだって、そんな危ないことしてまで石を取ってきたって言って喜ぶと思う？」

皆守はぽか〜ッと上がっていくアロマの煙を見上げつつ、「黒塚なら経緯は聞かんで喜びそうだ」と思ったが黙っていた。

「みんな、彩とアンリが大事なんだよ。鎌治ちゃんも、リカちゃんも、お前さんたちが今日みたいなことをしたって知ったら、きっと悲しむし、怒ると思う。……大事だからね。嫌いだから怒るんじゃない。大好きだから怒るんだよ」

「うん……」

「ヒック……ヒッ……ク……」

「アンリ、わかった？」

「わ……わか……た」

「お返事は？」

「……はい」

「……は、い……」

「うん。……じゃあ、怒るのはここでおしまい」

葉佩は腕を伸ばして、子供二人を抱きしめた。

「無事でよかった……」

八千穂はホッと溜息を吐いて、ティッシュを取り出すとアンリに向き直る。

「アンチャン、お鼻かもうねー」

「明日香姉ちゃん、甲太郎兄ちゃん……ご、ごめんな、さい……」

皆守はアロマパイプを口に咥えたまま、「ハァ……」と大きな溜息を吐く。

「今度から、勝手に行くなよ。面倒はごめんなん——イテッ！ 何だよ、八千穂ッ！ 骨が折れる！ 叩くな！」

「そういうこと言わないの！ もうッ！」

「大冒険だったんだねエ」

「……父、怒る」

「そうだね。……でも、嬉しいよ」

彩は背負っていた羊リュックから石を取り出して黒塚の前に置く。

「これ」

「ああ、いい感じにザラザラしてる。素敵な石だね。後で舐めなきゃ。どんな感触なんだろうねエ……たまらなくドキドキしてくるよ……」

嬉しそうな黒塚を見て、彩は少しだけ胸を張る。

「彩は父と一緒に。……《宝探し屋》」

「……《宝探し屋》？」

彩はぷるぷると首を横に振る。

「何でもない」

黒塚は標本に頬を寄せ呟くほどの声で言う。

「石たちが噂してるんだよ。葉佩君のことを。……そうか。僕の知らない石スポットを知っている葉佩君は、確かに《宝探し屋》だね」

「……」

「彩君、君も僕の知らない石スポットを知っていると見た。ふふふ……そうだ。これをあげよう」

黒塚はプリクラを二枚、彩に見せた。

「こっちは、君の。こっちは、アンリ君の。……今回は嬉しかったよ。ありがとう。心ばかりのお礼だよ」

彩は驚いたように目を見開き、黒塚にペコリと頭を下げた。

「……！　ありがとう……」

「どういたしまして。失くしたらいけないよ？　再発行はしない主義なんだ。ふふふふふ……」

黒塚は標本から手を離し、自分のプリクラ帳に二枚のプリクラをしっかりと挟んでリュックに片付けた彩の、ふかふかした肉球付きの手を握った。

「よろしく。……僕は黒塚至人。石研部長さ。今日から、彩君とアンリ君は石仲間だねエ」

1冊目のあとがき

こんにちは！ そして、はじめまして！

紫 桐子です。

九龍妖魔學園紀の二次サイトでは『いろは』と名乗ってますので、もしかしたら、そちらの方がなじみ深い方もいらっしゃるかもしれません。

どちらも私です。

さて。

今回の『天香學園狂騒曲～《宝探し屋》子育て奮闘記』の1冊目はいかがでしたでしょうか。通称・『子連れハンター』と言われているこの物語は、某SNSで2007年4月5日から2008年12月29日に書き終わった全246話の長い物語を加筆修正したものです。SNSに上げていた原文は、サイトの方に掲載されているものとほぼ変わりません。サイトに上げる際、あまりにも酷い部分は修正していますが、加筆というところまではしていないのです。

元は、当時絵チャータカミンさんのお絵描きチャットに入り浸っておりまして、SNSで一緒にいた方々から楽しいお話を聞かせていただいたときに出てきたアイデアから生まれたお話でした。

まさか、1年半もかけて初めから終わりまで書き尽くすとは思っていませんでした。

葉佩九龍が子持ちだったら。

こんな素敵なネタをいただき、天香バディたちと楽しい學園生活を送れただけでも嬉しいの一言に尽きます。

途中でネタを下さったり、意見を下さったり、お相手してくださったすべての方にお礼申し上げます。

それから、「これ何ぞ？」と手に取ってくださった皆様にもお礼を。

これから、時間を見つけて2冊目、3冊目と出していきます。本自体は出来ているのですが、中のイラストも表紙もありません。

この本もイラストなんてロクにないですけどね。んふふ。

全6冊を予定しています。

楽しみにしていただけたら嬉しいな、と思っています。

では、また次のお話でお会いしましょう。

2012年 6月 紫 桐子

天香學園狂騒曲～《宝探し屋》子育て奮闘記～

<http://p.booklog.jp/book/50199>

著者：紫 桐子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/underwaterlotus/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50199>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50199>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

九龍妖魔學園紀 ©2004,2006 ATLUS/SHOUT! DESIGNWORKS